
真・恋姫†無双 劉ヨウ伝

肥前のポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 劉ヨウ伝

【Nコード】

N1946W

【作者名】

肥前のポチ

【あらすじ】

平凡なサラリーマンが事故死後、真・恋姫†無双の世界に転生し劉ヨウとして人生をやり直す物語。転生直前に出会った神様から3つの願い事を叶えて貰いチート化した彼が群雄割拠の時代を生き残れるか否か。

投稿初めてです。

駄文だと思いますが、暖かい目で見守っていただきたいです。変な箇所を指摘いただけると勉強になるのでうれしいです。

プロローグ それは突然に

ここは何処？

私は誰？

「林正太郎。29歳の独身サラリーマンなのですが・・・」

「私・・・テンパってます！」

どこまでも見渡す限り真っ白な空間が続いています。

上を見上げると空は青じゃなくて雲も何もない真っ白です。

気づいたときにはここにいたのですが・・・

何でこんな変なところにいるのでしょうか？

「ああっ！これはゆ・・・夢だ・・・夢に違いない！そうだよ・・・
そうだよ夢だよ・・・」

「死んだことに気づいていないようですね。林さん」

突然、後から女性の声が聞こえたので、驚いて振り向くと、そこには妙齢な女性が立っていました。

「申し遅れましたね。私は神様です」

「はぁ・・・」

「あなたは死んだですよ。 林さん」

「死んだ？」

意味が分らず聞きかえました。

「ええ、あなたは死んだのです。でも、わかります。突然のことで動揺されているんですね……。心配なさらないでください。誰でもいつかは通る道です」

女性は慈愛に満ちた笑顔で私に語りかけてきた。

「何いつているんですか？現にここにこうしているじゃないですか！」

「ここはあなたが今までいた現世とは違います。現世と霊界の狭間です」

「あなたのように自分の死を自覚できない人は少なくありません……」

そういうと女性は手を自身の前に出すと、映像らしきものが投影された。

どうゆう原理か分からないが……。

映像は見覚えのある背広を着た首なし死体でした。

私の動揺はピークに達しました。

「こ．．．これ．．．私の背広です．．．。頭がない」

「ええ．．．あなたです。残念ですが手の施しようはないでしょう」

女性は哀しそうな顔で私の顔を見つめていた。

そんな私は死んだのか？

死んだ．．．。

「はは．．．悪い冗談ですよね．．．」

「いえ、あなたの死は事実です」

私の意識は暗転しました。

私はあれからしばらくして意識をとりもどしました。

そしてあの女性から説明を受けました。

彼女は神様であること。

私は泥酔運転手にトラックで跳ねられ死亡したらしいこと。

私の死は定められた死ではなくエラーだったこと。

なんでも私とは別の人が死ぬ予定だったらしい。

なら、生き返らしてくれといったのですが無理だそうです。

一度、執行された事象を戻すことはできないそうです。

悲惨な現実を突きつけられて落ち込んでいる私に、神様は提案を出してきました。

それは外史という人の強い想念がつくり出した世界に転生するというものです。

その転生先は三国志をベースにした「真・恋姫無双」というゲームの世界だそうです。

「えっ、マジ！」

つい私は聞き返してしまいました。

ゲームの世界に転生できること自体に疑問を抱いてしました。

「そんなことで悩んじゃいけませんよ。神様ですから」

そういう訳で私は「真・恋姫無双」に転生することになりました。

ただ、不安です。

転生後の私は「劉ヨウ」という武将です。

私は三国志好きなので知っているのですが、明らかに不幸街道まっしぐらです。

私の未来は孫策に倒されて逃亡先で病没ー

「あの、神様……。劉ヨウに転生って何かの罰ゲームですか？私
が死んだのって、神様の事故でしたよね！」

神様のあまりの仕打ちにキレてしまいました。

「ほらほら、怒らないでください。申し訳ないですが空いている体
が彼だけなのです。それに簡単に死なないように願い事を3つ叶え
て上げます」

私は神様に促されるままに3つの願い事を叶えてもらいました。

1つ、「龍狼伝」の「黄尸虎」の能力と武器が欲しい。

2つ、「ルナ　　ハーモニー　オブ　シルバースター」の「主人
公アレス」が使用する「清流の癒し」の能力が欲しい。

3つ、あらゆることを知る能力が欲しい。

神様から願い毎について一部を修正すると言われました。

1つ目の「黄尸虎」の能力のうち、呪われた鎧は物騒なので除外だ
そうです。

私もあんな気持ち悪い鎧はいらないです。

代わりに体を鋼鉄のように固くできるそうです。

ただし、連続稼動時間は6時間の制限があるそうです。

6時間経過後はこの能力は失われますが、この能力を使用した時間と等価時間の睡眠を取れば能力を回復できるとのことです。

武器である「双天戟」は俺が5歳になったときに神様が届けにくるそうです。

次に3つ目の願いはアバウトすぎるので、神様から手の平に乗る位の水色の透明な玉をもらいました。

「これ何？」と不思議そうに玉を見てみると神様から説明を受けました。

この玉の中に私が死亡した時点のその世界の全ての情報を記憶してあるそうです。

欲しい情報を念じれば私にそれを見せてくれるらしいです。

このボールは私以外には見えないし触れないそうです。

3つの願い事を叶えて貰った私は今後のことを考えていると・・・

「それじゃ願い事も決めたことですし、転生をしましょうか？林さん、来世で幸せになつてくださいね」

唐突に神様は笑顔で私に声を掛けてきた。

私の足下に穴が開いたかと思うと私はその穴に真つ逆さまに落ちました。

第1話 人生の始まりは幼児プレイ

エン州山陽郡大守役宅―

神様に落とされた穴をやつと抜けることができました。

穴の中は真っ暗だったので、正直地獄に落ちているのではと不安でした。

延々とつづく闇って凄く怖いです。

地獄ではないようです。

無事、転生できたようです。

その証拠に、現在、私は笑顔の女性に抱かれています。

精神は29歳なので、この状況恥ずかしいですっ！

腕も、足も上手く動かないですし、喋ろうにも「あぶ、あぶう」と赤ちゃん言葉です。

赤ん坊だから当たり前なのでしょうが・・・。

この状況、鬱になりそうです。

私が鬱な気分になっているのとは裏腹に、私の眼前では見知らぬ人達が私を囲んで笑顔で思い思いに話しています。

「おめでとうございます。元気な男の子でございます。」

「おめでとうございます。奥様」

「本当にめでたいことじゃ！これこれ祝いの酒を持て」

「でかしたぞ！元気な男の子だ！判るか？私がおまえの父だぞ！」

「母上、おめでとうございます！」

「義父上ありがとうございます。あなたはしゃぎすぎですよ。うふふ。燐もありがとう。皆もありがとう」

状況を把握できないのですが・・・多分、私を抱いているこの人が母ですね。

髪は栗色のストレートヘアで、目鼻立ちは整っていて、綺麗なお姉さんです。

惚れてまうやろー！

こんな美人と一緒にいるのは、落ち着かないです。

祖父と父らしきこの人達は、多分、劉本と劉輿ですね。

劉本は青州平原郡般県の県令で、劉輿はエン州山陽郡の太守だったような・・・。

そして、姉の劉岱は将来、エン州刺史に任官されます。

先ほど「燐」と言われた女性が、劉岱のようです。

兄と思ったのですが、召使いが「岱様」といつていたのが聞こえました。

姉は黒髪のボブショートヘアーにした凛とした女性です。

今更ですが劉？はエリート中のエリートなのだと実感します。

劉？の家は、遡ること高祖・劉邦の孫である斉の孝王劉将閔の末子の牟平共侯劉渫の直系の子孫です。

れっきとした前漢の皇族です。

家族の面々はいうに及ばず、叔父の劉寵は三公に4度もつく大物政治家です。

正に政治家一家といえます。

劉備のような自称・皇族の噂がある胡散食い人とは一線を画していると思います。

でも、いくらエリートといっても「群雄割拠の時代」を生き残れなければ意味がないですけど・・・。

実際、姉の劉岱は黄巾の乱で戦死します。

そして劉？も「バトルジャンキー」こと孫策と戦って破れ、逃亡先で病没します。

この世界は「真・恋姫無双」なので、史実通りかどうか判らないです。

それでも幸せに家族に看取られながら、大往生することはないと思います。

はあ、鬱になります。

しかし、私には神様から与えられたチート能力があります。

これで幸せな第二の人生を謳歌してやります。

「ふふ、どうしたのかしら、ボーーとしちゃって」

気づいたら母が笑顔で私の顔を覗き込んでいます。

「おおっ、大事なことを忘れておるのはないか、蔵人よ」

「父上、何をですか？」

「父上、弟の名前が決まっておりますんよ」

「弟はがっかりしているでしょう。自分の名前をつけてくれない父上に落胆したのではないですか？ そうなのであろう弟よ」

姉は茶目っ気たっぷりの顔で、私に語りかけてきた。

「何っ……！ そうなのか我が息子よ……！」

「名前なら既に決まっておりますぞ、かわいい息子の名前を考えていな

いはずがなかるうー！」

テンション高めの父がおもむろに懷から二つ折りにした紙を取り出し、私たちに向けて紙を開いて見せた。

「名はヨウ、字は正礼、真名は正宗」

父はその紙に書かれている内容を意気揚々と読み上げました。

「我が息子よ、気に入ってくれたか？」

真名が正宗って、ここ中国だね？

考えたら負けだ・・・

「気に入っておらぬようじゃな」

「そうですねえ、お義父様。でも、何かに驚いているみたい。もしかして文字が判るのかしら？」

私を覗き込む2人。

鋭いなこの人達・・・。

「な・・・なんだとっ！節も父上も酷いぞ。そのようなことはないよな、我が息子」

雷に打たれたようにショックを受けた父は、直ぐさま立ち直り私に笑顔を近づけてきました。

面倒くさいと思った私は、笑うことにしました。

「キャッ、キャッ！あぶ、あぶう」

29歳の精神にとって、幼児プレイは苦痛です。

こうして私の新たな人生の第1日目は過ぎました。

第1話 人生の始まりは幼児プレイ（後書き）

どうでしたでしょうか？

誤字、脱字、変な言い回しなどがありましたらご指摘いただけるとありがたいです。

劉ヨウの今後なのですが、オリジナルルートを予定しています。

話は逸れるのですが、劉ヨウの父劉輿はエン州山陽郡の太守なので、曹操とゆかりの深い陳留とは一郡を跨いだけなので、曹一族との接点とかあるかも等と考えてしまいます。

ただ、接点があったとしても劉ヨウの一族は清流派なので曹一族と仲が良いとは思えないですね。

第2話 山賊狩りという名の戦闘訓練

幼児プレイを嫌という程満喫した劉ヨウです。

幼児プレイがトラウマになっています。

私の黒歴史を記憶から消し去りたい気分です。

現在、私は3歳です。

精神年齢は29歳を超えているので、今年で前世と通算して32歳です。

見た目は子供、精神はおっさんな私は同年代（肉体年齢）の子供と馴染むわけもなく、一人浮いていることが多いこのごろです。

暇つぶしに読み書きを祖父に習いました。

博識な祖父を家庭教師にするなんて贅沢――

などと思っていた時期もありましたが、今では後悔しています。

元が日本人なので漢字には馴染みがあったためか、すんなり読み書きを身につけることができました。

「正宗は天才かもしれん・・・」

驚いた祖父は教育ママならぬ教育ジジとなって、私に日夜スパルタ教育をしています。

お陰で寝不足です。

「お爺々様、勉強が辛いので、休みをください。寝不足なんです」
あるとき、教育ジジにそういったことがありました。

「笑止、お前は非常の器じゃ！正宗、お前ならできる！甘えるでない！」

私の前世は凡人です。

精神年齢がおっさんだから凄く見えるように錯覚しているだけだと思います。

そんなことを言う訳にもいかず、教育ジジの熱い薫陶を受ける毎日です。

「お願いですから、休みをください！」

毎夜、月に向かって叫ぶことが多くなった気がします。

教育ジジの教育の賜物か、私の学力は3歳にして官吏レベルに達しています。

周囲からは神童などと言われています（神童なんて呼ばれなくていいから休みをください）。

姉の劉岱を超えるのではないかとわれ一躍時の人です。

ところで私の体力なのですが、流石といったところです。

既に「黄戸虎」の能力があります。

試しに鉄棒を槍代わりに庭の大岩を「振雷」で突いたら、凄まじい轟音とともにこなごなに粉碎してしまいました。

誰かに見つかると面倒だったので、逃げましたけど・・・。

あの後、賊の襲撃と間違われて大騒ぎになっていたのでドキドキでした。

自分の戦闘能力の高さに気づいた私は、私を不幸にする孫策を倒すための計画を立てています。

現状の私にできるのは孫策を倒すだけの戦闘能力を身につけること。

知識は教育ジジがいるので問題ないです。

戦闘能力を身につけたかったので、父上に武術の稽古をつけてくださいと頼んだら、もう少し大きくなったらなと笑顔でスルーされてしまった。

よくよく考えると劉？の家系は文官系だから、武術を学ぶ機会が少ない感じがします。

父親が太守なので武官に出会う機会はあるけど、私が槍を教えてくださいというと、遊び相手が欲しいと勘違いする方々が多いです。

姉上は洛陽で文官をしているし、母上にいっても本気で取り合って

くれないです。

私、3歳児ですから。

3歳児が武術を教えてくださいといわれてら、私も本気にしないです。

ここで諦める私ではありません。

私のハッピーライフが掛かっているのですから！

山賊狩りをやることにしました。

周囲の大人の話だが、最近、山賊に襲撃される村が増えているらしいです。

罪もない人達を殺し、略奪を繰り返す彼らを野放しにできない。

それは建前です。

彼らには私の戦闘力向上に一役買ってもらうことにしました。

まだ、神様から「双天戟」を貰っていないので、武器庫の槍を一振り拝借して、山賊を襲っています。

初陣は最悪でした。

相手は5人程の小数でしたが、手こずってしまいました。

私は硬気功が無かったら死んでました。

必死で、山賊を全て殺害した後、あまりの気分の悪さに吐いてしまいました。

あの日のことは今でも忘れません。

毎夜、私が殺した山賊達の夢を見ました。

悪夢を見て怖くなって、父上と母上の寝所に潜り込んだことがしばらくありました。

母上は何も言わずに抱きしめてくれたのがすごく嬉しかったです。

そんな初な時代も過去にはありました。

今では、教育ジジのスパルタ教育のストレスを彼らにぶつけています。

襲撃は家族が寝静まったのを見計らった夜間にしています。

山賊も基本夜間に行動するので好都合です。

最近気づいたのですが夜目が効くようになっていきます。

チートですね私の体は・・・、それとも慣れでしょうか。

現在、私は山賊と交戦中です。

「ぎあ、ぎゃああー！ー！た・助けてくれえー！ー！」

「ひいー！ーひい逃げろー！ー！」

「おっ！お前ら逃げるんじゃないー！ー！」

戦闘開始から30分経過しましたが、300人程いた山賊は見る影もなく、壊滅に一步手前です。

「お・・・お前は何もんだ・・・。た、頼む命だけは勘弁してくれ・・・」

山賊の頭らしき男が恐怖に引きつった顔で私を見えています。

私は体全体を覆うように麻袋を頭からかぶって目と口と耳の辺りに穴を開けています。

一見して怪しい人です。

「そう言った人達にお前は何をしてきた」

感情の籠らない声音でいいかえしてやります。

「やりたくてやったんじゃない・・・」

「しかたないで罪もない人達を襲うのか？」

「お前は・・・ただ、欲望の赴くままに生きているだけのウジ虫だ」

私は言い終わる前に山賊の頭の胸を打ち抜きました。

壊れた案山子のように崩れ行く山賊の頭を見た、山賊達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出しました。

「頭が、頭がやられた――！逃げる――！」

「ば、ばあ、化け物だ――。こ、殺される――！」

山賊の殲滅をしていましたが、一人なので全ての山賊を殲滅できませんでした。

でも、逃げた山賊は小数でしょう。

殲滅できなかったのが悔やまれます。

粗方の山賊を殲滅した私は、奴らが襲っていた村を訪れました。

「酷いな・・・」

村は酷い有様です。

家は焼け落ち、倒壊している家もあります。

あちこちに怪我人も大勢います。

「い、泉っ！しっかりしてっ！」

倒壊した家の辺りで中年の女性が必死な声を上げていた。

近づいてみると子供が怪我をしているようでした。

私に気づいた女性は私を睨みつけます。

私が山賊と思っているでしょうか？

見た目は怪しいですが、私が山賊な訳ないと思います。

それはさて置いて子供の怪我を治すのが先決です。

「私は山賊を追い払った者です。子供を助けたくはないのですか？」

「私ならその子の怪我を治せますよ」

睨みつけていた女性は私がそのことを告げると、いきなりしがみついてきました。

「ほ、本当ですか？本当に治せるのですか？何でもします。お願いですから娘を泉を助けてください」

「痛いです。わかりましたから離してください。」

私はその女性を振りほどくと彼女の娘の側に駆け寄りました。

女の子の腹には明らかに致命傷な深い傷がありました。

普通なら間違いなく死んでますね。

ですが、私はチートです。

神様から貰った傷を治す能力を使えば、あらこの通り治ってしまいます。

私が女の子の腹の傷に手をかざすと、その手が目映い光を放ち傷が

治りました。

この能力は初めて使いましたが、グロイです。

傷が、ビデオ映像の逆再生ように元に戻っていつていました。

凄まじい能力です。

私の隣で様子を伺っていた女の子の母親は驚愕していました。

「うう、うう、お・・・おかあさん・・・?」

おや気づいたみたいです。

私は退散するとしますか・・・。

そつえば他にも怪我人がいましたね。

序でに、他の方達も治療しようと思います。

あの女の子だけじゃ不公平ですから。

あれから一時間、やっと怪我人の治療が終わりました。

早く帰らなれば・・・。

教育ジジの授業の前に、少しでも睡眠を取らなければ死にます。

「「お待ちください!」」

家に帰ろうとする私でしたが、村人に制止されてしました。

村人の中から村長らしき人物が前に出てきました。

「見ての通り・・・お礼を差し上げようにも何もございません。」

「せめて命の恩人のあなた様のお名前だけでもお教えくださいませんか？」

「・・・」

うーん、面倒です。

私は名前を売るために山賊狩りをしている訳じゃないです。

「私は正義の味方だ」

悩む私を見て村長が訝しんでいたので、咄嗟に言ってしまいました。

自分で言った事ですが、ネーミングセンスがない。

それどころか恥ずかしいじゃないかー！。

私は一目散に村を離れ、家路を急ぎました。

第3話 母上危機一発 前編

山賊狩りと教育ジジのスパルタ教育を頑張っている劉ヨウです。

とうとうやってきました。

私は一週間後に5歳の誕生日を向かえます。

神様から「黄尸虎」の武器である「双天戟」を貰えます。

誕生日に約束通り持ってきてくれるか不安です。

転生して以来、一度もあっていないので心配です。

最近、私が嵌っていることがあります。

それは「気」です。

硬気功を操れるので、他のことができないかと試行錯誤をしていました。

結果はあんまり芳しくありません。

ただ、「振雷」の威力を上げることに成功しています。

その技は「振雷・零式」と命名しました。

「振雷」を使うときに硬気功につかっている気を槍に伝達させるという荒技です。

威力は凄まじいの一言です。

人里離れた森の中で試したのですが、森の木を直線上に数百メートル先までなぎ倒してしまいました。

問題は普通の槍では、威力に耐えられず槍が壊れてしまうということです。

「双天戟」なら威力に耐えられるのではと思っています。

当面は、この技を封印しようと思います。

そういえば父上の領内で変な噂が立っています。

夜になると「正義の味方」と名乗る麻袋の怪物が山賊を殺しまくっているという話です。

その上怪物は、山賊に襲われた怪我人を不思議な力で治療するそうです。

領民からは山の神だとかいろいろと憶測が出ているらしいです。

.....

それって私ですかね。

ええ、多分そうだと思います。

山賊の間では怪談話になっているそうです。

うーん。

話は逸れるのですが、気になる事があります。

母上が変なのです。

私のことを監視しているような気がします。

まさか、私が山賊狩りをしていることに気づいたとか・・・。

ないない、あるはずがない。

私が夜間外出しているのに気づいたとかでしょうか。

それならありうりますね。

でも、確信が持てませんね。

しばらく大人しくして様子を見ることにしますか。

山賊狩りをやっていることがバレたら、止められるのが目に見えます。

「本当にしょうのない子ね」

私の心配の種は正宗です。

その心配事とは、 正宗が、 毎夜、 私達が寝静まったのを見計らって、 外出していることです。

このことを知ったのは、 屋敷の召使いがたまたま見かけたことが切っ掛けでした。

その召使いは正宗のことが心配で、 後を追いかけたが見失ってしまい、 私にその事を報告にきました。

私は召使いに口止めをして、 下がらせました。

明け方には正宗は戻ってきて、 いつも通り義父上の授業を受けていました。

毎夜、 毎夜、 何処で何をしているのかしら……。

夫にはこのことは伝えていない。

正宗を叱責するのは簡単だけど、 何をやっているのかが気になります。

それに最近、 領民の間で広まっているあの噂……。

麻袋の怪物が山賊狩りを行っているという話です。

正宗が関わっていないと思うのだけど……。

怪物の噂が出始めたのは正宗が3歳の時…… 正宗が関わるにしても無理があります。

しかし、気になることがあるのです。

正宗は小さいころから手の掛からない子だった。

ときどき正宗と話していると、大人と接しているような錯覚を受けることがありました。

そんな正宗が珍しく夫と私の寢所に潜りこんできたのです。

あのかの正宗は何かに怯えている感じだったので、やさしく抱きしめてあげました。

そうしてあげると、正宗も安心するのか落ち着いた寝顔を見せてくれました。

初めて子供らしい一面を見た気がして、母として本当に嬉しかったです。

それからしばらくして正宗はぱったりと寢所に潜り込むことは無くなりました。

あのかは母として少し寂しかったです。

それ以後、正宗は男らしくなったとういうか・・・凛々しくなりました。

暇な時間を見つけては走っていました。

何故走っているのと聞くと正宗は「体を鍛えているのです」と言っ

ていた。

最初は、親の色眼鏡と思ったときもありましたが、周囲の者達が口々にいつているのを聞いて、私の思い過ごしではないと思いました。

怪物が領内に出没するようになった時期と、正宗が変化した時期が一致しています。

偶然なのかもしれません。

ただの杞憂ならいいのだけど・・・本当に正宗があゝの怪物と関わりがあるというのなら、母としてそんな危険なことから手を引かせなければいけない。

第4話 母上危機一発 中編（前書き）

後編を書こうと思ったら思ったよりボリュームがあったので、中編、後編に分けることにしました。

第4話 母上危機一発 中編

ここしばらく山賊狩りを自重して、大人しくしていました。

お陰でストレスが溜まっています。

この前、教育ジジの授業の合間に、生き抜きをしに市場をぶらついていたとき、商人が話をしているのを聞きました。

山賊の規模が大きくなっているということです。

どうも小規模の山賊が、寄せ集まって大規模になっているようなのです。

その数は3,000人位とのことなのでかなりの大所帯です。

「鈍亀意外の何者でもないですね」

これでは目立ち過ぎて、良いです。

「彼らもそれだけ必死ということですね」

私の襲撃を警戒しているのは間違いないです。

私相手では数百程度の手勢では、皆殺しです。

一人より、二人。

二人より、三人。

頭数を揃えれば良いと思う当たり、お粗末な奴等だと思います。

ここまで大所帯だと父上が軍を派遣して討伐すると思います。

掃討戦になるので、隣の郡から援軍を要請する可能性があります。

殺伐とした話をしてなんですが、今日は私の誕生日です。

神様はいつくるのでしょうか？

早く神様からのプレゼントが欲しいです。

最近のあの子は憑き物でもとれたようにおとなくしています。

夜間の外出もなりを潜めています。

「どうしたのかしらね・・・」

あんなに毎夜、外出していた正宗が、急にやめたことは不自然です。

それも何の前触れなくです。

気にはなりますが、今日は正宗の誕生日です。

あの子ために何かおいしいものを作ってあげようと思います。

普段は召使いに任せていますが、今日だけは特別です。

そつと決まれば市場にいきましょう。

久しぶりに市場に出ましたが、やはり活気があります。

来てよかったわね。

「あの子は桃が大好きなので、桃を買ってきましょう」

召使いに声を掛けました。

「はい、奥様。それでしたらあちらになります」

「それにしても今日は人が多いわね。何故かしら……」

「多分……あの噂が原因だと思います」

「あの噂？」

「はい、最近、山賊が大規模になっているとのことですよ」

「不安になった周辺の村の住民は太守様のお膝元であるこの街に疎開しているらしいです」

「そう……」

場の雰囲気が悪くなったわ気まずいわね。

「奥様がお気になさる必要はありません」

「大守様は頑張っておられると思います。あつ！出来すぎたことを言って申し訳ありません」

「ふふつ、気にする必要はないわ。あの人は文官としては優秀だけど、荒事は苦手なの。だから、武官全般は都督殿に丸投げだし」

「はあ・・・分かりました」

「さあ、気を取り直して買い物を楽しみましょうか」

「そうですね」

このまま楽しい買い物で終わるはずでした。

この買い物に出かけたことが切欠で、正宗が夫や私に黙って何をやっていたのかを知ることになるとは、このときは露程にも思ってもいませんでした。

私は一枚の布を手で握り締めていた。

その布には私の最愛の妻を誘拐したと書かれており、身代金を要求するものだった。

「許せん！賊どもめ！私の妻を誘拐するとは許せぬぞ！」

私は執務室の机を怒りに任せて殴りつけた。

「太守様、落ち着かれませ。まだ、危害を加えられてはいないと思われませ」

長い付き合いになる老齢な武官が冷静に話してきた。

「貴様に何がわかるというのだ！安全であるという保障がどこにある！」

「奥様に危害を加えるつもりなら、わざわざそのような文を寄越しませぬ」

「仮にも一群の太守にこのような真似をして、ただでは済まぬのこととは馬鹿でもわかります」

「それを実行した奴等の目星も検討がつきますゆえ」

「誰だ、その痴れ者は！」

「多分、例の山賊どもでしょう」

「それは領内の山賊の寄せ集めのことか？」

「御意」

「あれだけ膨れれば村を襲うくらいでは、集団を維持するのは難しいと思われませ」

「奥様の身の安全を考えれば、ここは身代金を用意すべきでしょう」

「し．．．しかし、民のための税金だ。私の妻のために使うことなど．．．できぬ．．．」

本音はそうしたいが、民のための税金を自分のために使うことなどできない。

私の矜持が許さない。

「別にくれてやる訳ではありません」

老齡な武官を鋭い目つきで太守に言つて来た。

「奴等に金を受け渡したところで、奥様を無事返す保障などござい
ません」

「故に、受け渡し場所に侍女に扮した女の武官を紛れ込ませ、奥様の居られる場所を突き止めてみせます」

「奴等とて馬鹿ではない．．．。バレたら妻はどうなるか．．．」

「太守様、お気をしっかりお持ちください」

「後のことは、この私にお任せください！必ずや助け出してご覧に
みせます」

．．．．．。

「妻のことを．．．頼む！」

私にはどうすればいいのか判らなかった。

妻の無事を祈るしかできない私が情けなかった。

「はっ！必ずや奥様を助け出してみせます！」

私は拱手する老齢な武官に全てを託した。

あの教育ジジが授業を急遽とりやめて、父上の元に行っています。

家人の様子も何かソワソワして変です。

私に何か隠していると思います。

はじめは私の誕生日なので何かサプライズを考えているのかなと思っていました。

それにしても変です。

屋敷の警備が物々しいです。

私の誕生日に賓客が来るので、警備が物々しいのは当たり前なのですが、警備の武官からは殺伐としたものを感じます。

そう山賊狩りで私が山賊達を探すときの雰囲気似ています。

何かあったのは間違いないと思います。

それにしても母上が屋敷にいないように思います。

いつも今頃は庭でお茶の時間を楽しんでいると思うのですが……。

「ん？」

向こうで召使い達が何か話しています。

気づかれないように近寄ることにしました。

「奥様だいじょうぶかな？」

「山賊に誘拐されたんでしょ……最悪……」

「縁起でもないこと言わないで！奥様の救出のため都督様が陣頭指揮をとられるって仰っていたもの」

「お坊ちゃま、可愛いそう……。折角の誕生日だったのに……」

「そうね……」

私はその場をすぐに後にしました。

あの山賊達を皆殺しにしておくべきでした。

そうすれば母上が誘拐されることなどありませんでした。

「山賊達、どこまでいってもお前らはウジ虫という訳か。」

「この私の手で引導を渡してやる！」

3、000人であろうと関係ありません。

私の母上を誘拐したことを後悔させてやります。

私は警備の厳重な屋敷を抜け出し、人気の無い森に向かいました。

そこに予備の武器を隠しているからです。

今、武器庫にいつでも物色するのは難しいと思います。

私は目的の場所に着くと、隠していた武器を土の中から掘り起こしました。

「必ず、母上を助け出します！」

布に巻かれた槍を手に持ち、自分に言い聞かせるように言った。

山賊達の居場所に当てはありませんでした。

しかし、3、000人の規模でなれば、駐留できる場所は限られます。

山賊達は人の目につき辛い場所に駐留しようと思っはずです。

そんな場所、この郡にあるのか？

領民の噂では山賊達は北のあたりで目撃されています。

そのあたりをしらみ潰しに探すしかありませんね。

「母上無事でいてください」

私が母上の搜索を行動しようとしたとき、真上から私を前世の名前で呼ぶ声が聞こえました。

「どちらにいかれるのです？林さん」

私をその名で呼ぶのは、私の知る限りこの世界にはいない。

上を仰ぎ見ると予想通りの人物が木の幹に腰掛けていました。

「神様、急用がありますので後にしていただけますか？」

「ふふっ、つれないですね」

相変わらずマイペースな人です。

私はあなたに構っている暇などないのです。

「私はあなたとの約束を果たしに來ただけですよ。お手間は取らせません。」

神様はそういうと私の目の前に、何かが空から降って地面に突き刺さりました。

「あっあぶないではないですか？」

突然のことに私は驚きました。

「それでああなたの母上様を助けておあげなさい」

神様は真剣な顔つきで私を見て言いました。

地面に突き刺さっていたのは「双天戟」です。

私はおもむろに相棒となる「双天戟」を力強く握りしめ引き抜きました。

「これでああなたの約束は果たせましたね」

双天戟を手にして初めて実感したことがあります。

手に馴染みます。

今まで使ってきた槍などとは全然違います。

これがあれば山賊達など物の数ではないです。

「神様、ありがとうございます！」

「お礼を言われると心苦しいですね……。元はと言えば、私の不手際でああなたを死なせてしまったことが原因です」

神様は困った顔をしながら私に言いました。

「これでああなたと会うのも最後だと思います。林さん、私はああなた

が幸せになるお膳立てをただけです。幸福なるか不幸になるかはあなた次第……。そのことはゆめゆめ忘れないようにしてください」

神様は私にそう伝えると消えました。

私は先程まで神様が腰掛けた幹を見続けていました。

『そうそう最後におまけです』

『あなたの母上はここから東の方の郡境の谷にいます』

どこからともなく神様の声が聞こえてきた。

「ええ、山賊達から必ず母上を救い出してみせます。この檣に掛けて！」

私は相棒を天に向けて突きつけ叫びました。

第4話 母上危機一発 中編（後書き）

次回で劉ヨウこと正宗が山賊から母上を救い出します。

この作品の主人公である劉ヨウのヨウは文字化けしたりするので、

「月缶系」などと訳される人のことです。

知っている方もいらっしゃる方もいらっしゃると思いますが、知らない方のために書いておきます。

第5話 母上危機一発 後編

「うう・・・ん・・・」

目が覚めると頭に少し鈍痛があり、いい目覚めとは言い難いです。

川の音が近くから聞こえてきます。

ここはどこなのでしょう？

私は市場で買い物をしている最中に賊に頭を殴られ意識を失いました。

今の状況がさっぱりわかりません。

後ろで縛られているようなので、動きづらいです。

周りを見渡すとここが簡素な小屋だということがわかりました。

「頭、女が目を覚ましたみたいだぜ！」

明らかに山賊としか思えない男が、私が目を覚ましたことを確認して人を呼んでいました。

現れたのは熊のような体格で残虐そうな顔つきをした男でした。

「気分はどうだ、くくっ、く」

不快な笑い方をする男だと思いました。

「なぜこのようなことをしたのです」

「金だよ！金にきまつてるだろうが！太守の女房を誘拐すればたんなり金をいただけるだろうからな、ひひっ。しかし、いい女だな。どうだ、太守の女房なんてやめて俺の女ならねえか？一生良い目に合わせてやるぜ！ひひっ」

山賊の頭は下卑た顔で私の顎を掴んで言いました。

私は精一杯の勇気で睨みつけました。

「ふん、お高く留まりやがって、金が手に入ったら覚えてろよ！おい、お前らしっかり見張って置けよ！」

「へい！」

山賊の頭は見張りを残して小屋を出ていきました。

あなた、正宗……。

きつと心配しているでしょうね。

東の郡境某所??。

私は神様に教えられた通りに東の郡境の奥深くを探索中です。

既に日が落ちて周囲が暗くなりました。

夜目の効く私には関係ないですけど・・・。

そして漸く谷を見つけました。

山賊の居場所も直ぐにわかりました。

谷の中とはいえ堂々と火うとは・・・お陰で楽に見つけることができました。

母上大丈夫でしょうか？

貞操の危機とか洒落になりません。

そうなった場合、山賊達は四肢を切断して、川に流してやることにします。

「ふふ・・・ふふ・・・」

まずは母上の居場所を特定することにします。

何か怪しい場所は無いですかね。

谷の上から怪しい場所がないか見ていると・・・。

ありました！

明らかに怪しいです。

谷の下には山賊達が野営しています。

その中に不自然に立っている小屋があります。

これしかないでしょ！

必ず母上はここにいます！

絶対にいます！

間違いないです！

テンション高くなった私は谷の上から小屋の手前目掛けて飛び降り
ました。

普通の人であれば死ぬでしょうが、私は体を硬気功で強化している
ので問題ありません。

落下の衝撃で小屋の前に野営していた山賊達は、ご臨終のようです。

私の足元には血の海が広がっています。

山賊達が何事かと集まっています。

まずは母上の確保をしようと小屋に近づこうとすると……。

熊のような凶悪な人相の男が立っていました。

母上は……そいつの近くで部下らしき奴らに喉元に剣を突きつけ

られています。

「武器を捨てやがれ！母親がどうなってもいいのか！」

「これから死ぬお前に何ができるか教えてくれませんか？」

山賊達は私の言葉が可笑しかったのか笑い出した。

「俺が死ぬ？へへっ、傑作じゃねえか！おい、お前ら！この餓鬼頭が悪いみたいだぞ！」

「坊主、これだけ人数がいるんだ。死ぬのはお前の方だぜ！」

「「あはは、ひひはははあはは」」

嘲笑する笑い声が周囲から聞こえてきます。

「この子は関係ないわ、この子だけには手をださないで！」

「へへ、タダで言うことを聞くと思っているのか？」

山賊の頭は下卑た顔で母上を下から上まで嘗め回す。

「・・・わかりました。ですからあの子には手をださないで・・・」

母上も不快を感じているようだが、私のことを守ろうと観念したように応えました。

私がそんなことを黙認するわけ 아닙니다。

「母上、ウジ虫の指図など受ける必要などありません。それより母上を離せ、今なら人として殺してやる」

「黙りなさい！正宗！母の言うことを黙って聞きなさい！」

「生憎これだけは聞けません。ウジ虫の言うことなど聞く必要などありませんから」

「糞餓鬼っ！手前をぶっ殺した後でお前の母親を犯してやるぜ！」

「母上を離せといっている」

「ああ、自分の立場がわかってるのか！手前え！」

「手前の母親がどうなってもいいのか！」

「正宗！私のことはいいから逃げなさい！」

「黙りやがれ！このアマ！」

「くっ！」

私の言葉が癪に障ったのか下卑た顔から一転、私に罵声を浴びせてきました。

山賊達は母上を殴りつけ、その首元に剣を突きつけ下卑た顔を向けてきます。

山賊達は人質がいることで、自分達が主導権を握っていると思っているようです。

この山賊の頭は馬鹿のようです。

私の恐ろしさが判っていないようです。

「もう一度言う。人として死にたいなら母上を離せ」

「ぎやはは、はは、お前の母親の体に聴かなきゃわからねえみたいだな！」

「おい、手前からそのアマを裸にひん剥いちまえ！」

「へへっ、頭わかりやした」

「や、止めなさい、下郎っ！」

救い様のない奴らだと思いました。

人の痛みを知ろうともしない。

知る気がないのでしょぅ……。。

なら、人として死なせはしません。

覚悟してもらいましょうか。

私は一瞬で間合いを詰め、母上に辱めようとする2人の山賊達の首を双天戟で吹き飛ばし、その返して山賊の頭を胴から真つ二つにしました。

山賊の頭は地に横たわり何が起こったわからずに、目を剥いて痙攣をしています。

グシャ???

私はその山賊の頭の頭を情け容赦なく踏みつけました。

「言ったはずだ。人として死にたければ母上を離せとな。お前達が私に勝てるとも思ったのか？お目出度い奴等だな。だが、もう遅い。お前達に掛ける慈悲はない。お前らの命で償ってもらうぞ」

視線を山賊達に向けると彼らは混乱しているようでした。

ただ彼らでも理解できることがあります。

私が数人の山賊と自分達の頭を一瞬のうち惨殺したことです。

「か・・・頭がやられたぞ」

山賊の一人がそう呟くと堰を切ったように山賊達は動き出しました。

私と母上を殺そうとするもの???

ここから逃げようとするもの???

私はここで封印していた技を躊躇わずにつかいました。

私に向かってくる山賊どにむかって双天戟を突きつけ、硬気功の「気」を一点に集中させ技を放ちました。

「振雷・零式！」

夜であるにも関わらず昼のような輝きを周囲に放ちました。

輝きが収まったときそこには死体の山がどこまでも続いていました。

私の立ち位置から近いところの死体は、原型を留めていません。

血の匂いがそれは生き物の残骸と自覚させてくれます。

さっきの攻撃で山賊達のその半数が壊滅したようです。

「振雷・零式」の攻撃を免れた山賊達はあまりの惨状に恐怖で体を強張らせています。

私は情け容赦なく生き残りの山賊に対し「振雷・零式」の第二射を放ちました。

私は状況を確認することなく、母上を肩に抱えると戦線を離脱することになりました。

母上の安全確保が最優先です。

もともと逃げようとしてた山賊達は、蜘蛛の子を散らすように逃げてます。

私はそれを無視して谷を駆け上がっていきました。

谷を上りきると母上に声を掛けました。

「母上、戦場から一刻も早く離れなければなりません。話は城に戻ったら聴きますので、今は黙って私と共に逃げてください」

肩に抱える母上の顔は見えないが、沈黙を肯定と受け取り足を速めることにしました。

空にはいつのまにか満月が出ていました。

綺麗な月なので黄昏たい気分ですが、そうもいきません。

最悪の誕生日になりました。

帰ったら父上、母上からどのような説教を受けるのでしょうか？

ですが、母上が無事で本当に良かったです。

第5話 母上危機一発 後編（後書き）

次は父上と母上のお説教タイムです。

教育ジジも参戦するかもです。

次の次くらいに原作キャラと接点を持たせようと思います。

第6話 山賊狩りの正体

山賊との戦闘を終え、無事城に戻った母上と私は、急いで父上が居られるであろう政庁に向かいました。

政庁に着くと衛兵の一人が母上の顔を見て大慌てで政庁に入ってきて、直ぐに父上に取り次ぎをしてくれました。

私と母上が通されたのは父上の執務室です。

この部屋に現在いるのは父上、母上、お爺様と私を含め4人です。

3人には私の母上を救出したことのあらまじと、私が山賊狩りをしていた怪物の正体であることも話しました。

父上とお爺様は信用できないようでしたが、母上が証人となったので、半信半疑ですが信用してくれました。

普通は信用しないと思います。

私5歳児ですから。

そして話は本題に入っています。

私は何故、山賊狩りを初めたのかです。

「正宗、包み隠さず話してもらっぞ」

どう話せばいいものでしょうか？

『孫策との戦に敗れて逃亡先で病を患い惨めな末路を回避するために山賊狩りをして腕を磨いていました』

こんなことを言った日には頭のオカシイ子扱いです。

「正宗、どうしたのだ親に話にくいようなことなのか？」

「あるとき、私に話を必ずするといったことは嘘なのですか？」

父上、母上も私が話したくないと思っているようです。

話をしたくないというより、話をしにくいです。

ここは、母上や父上には申し訳ないですが、無難な理由を言って切り抜けようと思います。

「見過ごせなかったのです！山賊達が、力のない人々から略奪を行い、その命を奪っていくのが！」

山賊狩りを初めた当初は、打倒孫策のためという切実なものでした。

「バトルジャンキー」孫策に比べれば山賊など赤子と一緒にです。

自分本位の理由で初めた山賊狩りでしたが、山賊狩りをするうち、私の中で変化がありました。

切っ掛けは、山賊に襲撃された農村の惨状を見てからです。

あの惨状を目の当たりにして、理不尽な暴力が許せないと思いました

た。

前世で戦争のない日本で暮らしていた私の感覚では、あのような暴力を容認することは到底できませんでした。

前世では、テレビやニュースのそういった記事を見てもあまり実感が湧きませんでした。が、現実に関心するのを止めてしまったり、無視することなどできませんでした。

神様から私は強大な力を貰いました。

その力で理不尽な暴力に苦しんでいる人達を少しでも救えるなら、私は迷いなくその力を行使しようと思うようになっていました。

私の想いは偽善なのかもしれないです。

でも、やらずにはいませんでした。

「それは役人、軍人の仕事であって、お前がやるべきことではない！」

父上のいうことは正論です。

都督のジジは決して無能なわけではないです。

しかし、職務上どうしても都市の警備に力を割かざるおえないです。

結果、都市から離れた農村の警備は無視しているに等しいです。

仮に、農村で山賊の襲撃があっても、救援が着く頃にはその農村は

壊滅しています。

「では、何故これほど山賊達がはびこっているのですか！私がどれほどの山賊を殺してきたとお思いですか！農村に住む者が、山賊の脅威に怯え毎日を送っている現実を知っていますか！私が山賊達を殺し続けねば、死ぬ必要のない者が死んでいました！父上にとつて守るべき民は、都市に住む者だけなのですか？都市に住まぬ者は守るべき民ではないというのですか！」

「う、それは・・・」

父上は私の言葉に言葉を詰まらせました。

「そこまでじゃ、正宗よ。お前の想いは良くわかった。その想いは尊いものじゃ。じゃがな・・・。お前は聡い子じゃ。ならば分かるであろう。税収には限りがあり、軍備にも限りがあるのじゃ。その上で最善を尽くすのが政というものじゃ。卑怯な言い方かもしれぬが、大人の世界とはそういうものじゃ。何もお前の父は見えて見ぬ振りをしているわけではないのじゃぞ。父とてきつとお前と同じ気持ちじゃと思う。それでも悩みながら政をしているのじゃ。故に、父をそう責めるでない。それにお前がやっていたことを正統化することにはならんぞ。何処の世界に、年端の行かぬ子供に、賊とはいえ人を殺すことを勧める親がおろうか」

お爺々様は、いつもの好々爺な顔とは違い真剣な顔で私に語りかけました。

流石、お爺々様です。

完全に話の主導権を持っていわれています。

年の功ってやつですか。

私に非があることは間違いないので、ここは素直にあやまるしかないようです。

「父上、母上、ご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした」

私は頭を下げた謝りました。

「ほれ蔵人よ、正宗も反省しているようじゃ。過ぎたことを言ってもせんなきことじゃ。もう、許してやってはどうじゃ？」

先ほどから黙っていた父上は、お爺々様に促されて話しました。

「……。今回は、父上の顔を立てることにしよう。私は大守としてお前の行動を褒め讃えなければならぬのであるうな。しかし！この馬鹿者がっ！親に黙って何と言う危険なことをしていたのだ！死んでいたかもしれないのだぞ！」

父上は言い終わる前に、私の頭の拳骨で殴ってきました。

「い、痛だぁー！。痛いではないですか、父上！」

「あたりまえだっ！それでも甘いくらいだ！」

父上を見上げると、私を見ながら泣いていました。

これでは私は何も言えません。

「父上も私もあなたのことを愛しているですよ」

母上が私を包み込むように、私の背中から抱きしめてきました。

「次からは、悩み事があるなら一人で抱え込まず、父上や私に相談しない。私達では頼りないのですか？」

「い、いえ！そんなことはないです」

「でしたらもつと子供らしく親を頼りなさい。ただでさえ、お前は何事も自分やろうとするところがあります。今回などその最たるものです。正直、単身あなたが山賊の中に現れたときは、心臓を押しつぶされるような想いでしたよ。でも」

母上は私の正面に周り、私の目線で顔を真つすぐ見ながら話しかけてきました。

「あのとのお前は凜々しかったですよ。多分、あなたの親でなかった一目惚れしていたと思います」

母上はやさしく微笑んでいました。

「な、何っ！」

父上が母上が言った「一目惚れ」という言葉に反応しました。

「あなた本気を取らないでください。それ程までに凜々しかったということです。あの時の正宗は本当に勇ましく凜々しかったのですよ」

父上は罰が悪くなったのか背を向けて言いました。

「正宗、今回のことは都督殿に伝えておくのだぞ。私からも話しておくが、今回の件では都督殿には迷惑を掛けてしまったからな」

都督のジジには無駄骨を折らせてしまい悪いことをしてしまいました。

「はい、父上分かりました」

「うむ」

翌日、都督のジジにも父上達に話した内容を話しました。

「がぁはは、はは、若君は勇ましゅうございますな！いつの間にかに立派になりましたな。お氣になされることはありませぬぞ。奥様が無事で何よりですからな。若君と戦場で轡を並べる日が楽しみでございますぞ！」

都督のジジは怒るところか嬉しそう笑っていたのが印象的でした。

数日後、山賊を殲滅した場所に、私と都督のジジ、小数の兵士を連れ向かいました。

一応、検分をする必要があるとのことでした。

私は馬にまだ乗れないので、都督のジジと一緒に馬に乗っています。

現場に到着すると、兵士達はその惨状を見て驚愕していました。

私も冷静になって見ると、やり過ぎたなと後悔しました。

山賊達に同情の気持ちはないですけど。

死んだ山賊達は人の原型を留めていないです。

頭がない死体。

両腕と片足がない死体。

腰から上がない死体。

他にも口で表現できないような状態の死体がそこら中に散乱しています。

獣が荒らした痕跡もありましたが、それを差し引いても酷い惨状でした。

都督のジジもここまでとは思っていなかったようで引いていました。

第6話 山賊狩りの正体（後書き）

次からは予定通り原作キャラを登場させようと思います。

第7話 未来の霸王 前編

母上誘拐事件から2年の歳月が経過しました。

私も今年で7歳です。

私が母上を山賊から救出したことは、すぐに領内に広まりました。

もちろん山賊狩りをする麻袋の怪物が私であることもです。

巷では、『山陽の麒麟児』などと言われています。

恥ずかしいです！

いつのまにかちょっと頭の良い『神童』から、昇格していました。

あれ以来、都督のジジに武官としての手ほどきを受けています。

年齢的な理由もありますが、軍属ではないです。

都督のジジの個人指導です。

私の志に感動したのか、お爺々様が都督のジジに相談したらしいです。

都督のジジも快諾してくれました。

お爺々様の授業はどうなったかというと、今でもスパルタ教育が続いています。

都督のジジの指導が入るので、お爺々様の授業時間が減るのだと思
っていました。

以前より過酷になった気がするのですが、私のせいでしょうか？

明らかに過酷になっています。

「正宗よ。お前の理想を現実にするにはこれまで以上に頑張らねば
ならない。これからは今まで以上に精進せよ。よいな。山賊狩りは
暫く禁止というではないか。その時間を当てれば今まで通りじゃ」

そう、父上、母上から山賊狩りは暫く禁止されました。

危険な行為は、私がもうすこし成長したら考えるそうです。

山陽郡の山賊はというと壊滅状態です。

山賊達にとって、私は恐怖の対象になっているので、残った山賊も
領内から逃げていったようです。

過労で私の心は擦り切れそうです。

これも孫策のせいです。

恋姫の孫策は好きなキャラの一人でしたが、今の私には最も嫌いな
女です。

孫策を倒して私のハッピーライフを必ず実現してみせます！

そんな過労気味の私ですが、楽しい時間があります。

都督のジジの計らいで、武官達の調練に参加できることです。

「キヤアー――！劉ヨウ坊ちゃまよ――！」

「若君様――！」

「キヤアー――！」

私は女性の武官達の人気者になっています。

辛い毎日ですが、この瞬間だけ疲れが吹っ飛びます。

それは睡眠を取ることができるからです。

言ったそばから睡魔が襲ってきます。

今日も朝方まで、教育ジジのスパルタ教育だったので眠いです。

「・・・・・・・・・・ぐう」

「若君様、かわいいわね」

「ふふっ、そうね」

「本当に頑張っているもの」

女性の武官達はやさしい人ばかりです。

この状況は勿体無い気がします、睡魔には勝てませんでした。

過労な毎日を送る私に手紙が来ました。

差出人は姉上です。

姉上は現在、洛陽で宮仕えをしています。

その姉上が私に洛陽で勉強しないかという誘いです。

父上、母上にそのことを伝えると姉上から既に聞いていたようです。

「洛陽はこの大陸の中心だ。いい経験になると思うから行ってきなさい」

「さびしくなるけど、私も賛成よ頑張ってください」

洛陽への行くことは両親も賛成のようでした。

私も洛陽がどんなところか興味がありましたので、この機会に行くことにしました。

そうと決まれば、善は急げです。

都督のジジや知り合いに別れの挨拶をしてきました。

「若君、頑張ってくるのですぞっ！」

都督のジジはそう言うのと洛陽までの護衛として、配下の兵士を10人着けてくれることになりました。

私に護衛が必要かどうかは疑問です。

父上、母上から危険なことは禁止されているので仕方ないです。

洛陽への旅路に出たのですが・・・。

「あの、お爺々様・・・」

「なんじゃ、正宗よ」

「何故、ついてこられているのでしょうか？」

「あたりまえじゃ。お前が羽目は外さぬよう儂がお目付役を買って出たのだ」

「そうですか・・・」

「それにじゃ、お前の勉強に遅れが出ては不味いからの」

洛陽でも、私に勉強をさせる気ですか、お爺々様。

洛陽に行ったらお爺々様のスパルタ教育から開放されて、久しぶりにのんびりできるかなと思っていました。

それがものの見事に打ち砕かれました。

空が晴天なのとは対照的に、私の心には雨が降っていました。

つまらない家庭教師を追い出してやったわ。

馬鹿の一つ覚えのように、本に書かれている通りことを教えるような教師など、この曹猛徳に不要よ！

お母様にも困ったものね。

家庭教師を寄越すなら、もっとましな人間を送ってきて欲しいものね。

ああ、ムシヤクシヤするわね！

「何か私が興味を引くような話はないかしら」

私は夏侯姉妹に時間潰しになるような話題がないか聞いてみた。

「そうですね、うん。あつ！そう言えば街で三頭軍の麒麟の話の聞きました。華琳様」

夏侯姉妹の姉、夏侯惇こと春蘭が初めて耳にする話を振ってきた。

「姉者、三頭軍の麒麟ではなく、山陽郡の麒麟見た」

春蘭の妹、夏侯淵こと秋蘭が姉の発言を訂正した。

やっぱり間違っていたのね、春蘭……。

「そうなのか秋蘭？」

いつもの何気ない風景ね。

「姉者しっかりしてくれ……」

相変わらず春蘭はしょうのない子ね。

「山陽郡の麒麟児、山賊3、000を単騎で殲滅したという話だったかしら」

この陳留から2郡先の山陽郡で話題になっている人物らしい。

太守の妻を単騎で乗り込んで救い出したらしい。

無謀ではあるが、勝算あつての行動というのなら大した人物ね。

「確か……歳は5歳だったからしら、事実なら化け物ね」

流石に無理だろうと思ってしまう。

春蘭も子供ながら、正規軍の兵士に1対1の戦いで後れをとることはない。

しかし、山賊3、000といったら話は変わってくるわ。

絶対に無理ね。

それだけの数の山賊達を相手に正攻法では勝ち目がないわ。

策を弄しようにも一人では何もできない。

「信憑性は疑わしいと思います。この手の話、往々にして尾ひれがつくものです」

秋蘭の考えが妥当な線ね。

「ええ、その通りね。でも、秋蘭、火のないところに煙は立たないというでしょ」

火のないところに煙は立たない。

少なくとも山賊を単騎で殲滅したのは、私たちと同じ子供ということとは確か。

面白いわね。

暇つぶしにはなりそうだわ。

「会ってみたいわね、その山陽郡の麒麟児に」

私はまだ見ぬ「山陽郡の麒麟児」に想いを馳せてしまったわ。

この私を後悔させない人物であって欲しいわね。

第8話 未来の覇王 中編（前書き）

ちよつと変な部分があつたので修正しました。

第8話 未来の霸王 中編

山陽郡を出立した私達一行は、東郡を経由して現在陳留郡に入りました。

洛陽まであと少しです。

この旅路ももう直ぐ終わります。

この地で曹操と出会う可能性があるかもしれないです。

曹操というと「乱世の奸雄」で有名な人です。

史実では、幼少時代の曹操はかなりの不良だったといっています。

恋姫の曹操がそうだったかはわかりませんが・・・。

曹操で思い出したのですが、私の姉劉岱は将来、兗州刺史になると思います。

その後、黄巾の乱が勃発し、青州の黄巾軍が兗州に侵攻してきて、姉は討ち死にし、曹操は姉上の後任として、兗州刺史になるはずで

この出世が曹操にとって、飛躍の第一歩だったと思います。

どうしたものでしょう。

母上の時もそうでしたが、姉上も見捨てることなどできません。

そうなる姉上に助力して、黄巾軍を討伐しないといけないです。

姉上が討ち死にした最大の理由は、家臣の進言を無視して籠城策をとらなかったことにあります。

ありえますね姉上は父ににて文官そのものです。

そのくせ少々、勝気なところがあります。

姉上に籠城を促すだけで、姉上の生き残る確立はかなり上がると思います。

問題は青州の黄巾賊です。

確か100万人だったと思います。

.....

いくら私がチートといっても、100万人はきついです。

多分、孫策に敗れる前に、黄巾賊に敗れると思います。

ですが、曹操は兗州刺史になった後、黄巾賊を打ち破ったわけですから、不可能ではないと思います。

うん、妙案が浮かびません。

この件は洛陽に着いてから考えようと思います。

ただ、姉上に黄巾賊を打ち破らせたら、曹操の出世の道を潰すことになるます。

そうなると歴史が変わり、私の知っている歴史と齟齬が出てくると思います。

私のアドバンテージの一つが失われるわけです。

・・・・・・。

姉上の命には代えられないです。

それに曹操なら、遅かれ早かれ出世すると思います。

「正宗、何を考えているのじゃ。そのように難しい顔などしおって私が物思いに耽っているのが気になったのかお爺々様が声を掛けてきました。」

「洛陽に着いたら何をしようかなと考えていました」

「そうなのか？その割には随分、難しい顔をしておったのう、僕はてつきり悩みごとでもあるのかと思ったぞ」

「お爺々様、そのようなことはないです」

「そうか、まあ、それならよい。何か悩みがあるなら、遠慮なく相談をするのじゃぞ、よいな」

お爺々様は私の応えを信じていないようです。

「はい、悩みがあればそうします」

私は元氣良く返事をしました。

「それは本当のことなのかしら」

「山陽の麒麟児」について、秋蘭に調べさせていたのだけど、やつとわかったわ。

「はい、華琳様。山陽の麒麟児の名前は劉ヨウと言います。山陽太守の長男で、あの三公を4度勤められた劉寵の甥に当たります」

彼は山陽太守の長男らしいわ。

太守の息子が「山陽の麒麟児」とは正直驚いたわね。

それも男だなんて。

この女尊男卑の世で考えられないことね。

余計に興味が湧いてきたじゃない。

何としても「山陽の麒麟児」に会いたくなつたわ。

「斉の孝王劉将閭の末子にして、牟平共侯劉渫の直系の末孫。清流

派の名門一族の子弟というわけね」

確か彼の父劉輿も人物に定評があるし、祖父劉本も県令を勤めた人物と聞いたことがあるわ。

私の祖父曹騰は宦官で、母曹嵩はその養子。

私は清流派の者達から卑しき宦官の孫だと嘲笑されている。

母上も乞食同然分際で宦官の養子となり、金に物を言わせて官職を手に入れた成り上がり者などと陰口を立てられているわ。

そんな私とは正反対の立ち位置にいる人物。

「ふふっ……。面白いわね」

そんな人物が私をどう思うかしら。

私を嘲笑した清流派の者達と同じように、私を卑しき宦官の孫と嘲笑するかしらね。

私は劉ヨウという人物に対しての興味を更に強めていた。

「それで華琳様。耳寄りの情報です。その劉ヨウがこの陳留に入っているそうです」

「秋蘭っ！それを早く言いなさい。それで劉ヨウは何処にいるのかしら」

「洛陽に向かっているとのことですので、この街を通るかと思われ

ます」

「秋蘭、劉ヨウがこの街に入ったら留め置き直ぐ知らせなさい。それと丁重にお持て成ししなさい」

「はっ！、お任せください。華琳様」

「お待ちください。もしや山陽太守劉輿のご子息様ではございませんでしょうか？」

陳留郡に入ってしばらくして、街が見えてきたので、宿を探していると水色の髪で、片目を隠した女の子に呼び止められました。

何処かで見たことがある顔だと思いました。

「何者だ！」

護衛の兵士達が、警戒して私と少女の間に立って訝しんで言いました。

「私、曹操に仕えし夏侯淵と申す者にございます。主に仰せつかつて、劉ヨウ様を丁重にお持て成しするようと仰せつかつております」

知っている顔だなと思ったら、若いですが明らかに夏侯淵です。

この子があのクールビューティーに成長するんですね。

私は感慨深く夏侯淵を見ていました。

「曹操？　もしかやあの曹騰殿の孫か？」

「はい、その通りでございます」

「折角の招待痛みいるが、儂等は先を急ぐ故、曹操殿にはまたの機会にお呼びくだされと伝えてくれぬか」

お爺々様は夏侯淵の誘いを断るようです。

いつもの好々爺然とした顔とは違い厳しい顔つきです。

宿を探していたのに先を急ぐって、今夜、野宿でもする気ですか？

嫌ですよ私は、地面で寝るのは辛いんですよ。

どうせ曹操が濁流派の人間だから、彼女の誘いを受けるのに抵抗があるのでしょうか。

彼女の祖父が宦官なものでしょうね。

「先を急がれていることは重々承知しております。その上でお願いできませんでしょうか？」

なおも食い下がってくる夏侯淵。

粘りますねそこまでした私達を招待したい訳はなんなんでしょうね。

あのレズロリ霸王様が男に興味を抱くなんて変ですね。

そういえば、恋姫の魏ルートでは北郷一刀と恋仲になってましたね。会ったこともない私に恋してるのかでしょうか？

そんな電波系少女でしたっけ曹操って・・・。

そもそも私に恋している自体ないと思います。

想像しましたがイメージが沸きませんね。

違和感あります。

「くどい！人が下手に出ておればいい気になりおって、これだから宦官の孫などに関わりたくないのだ」

私が妄想から戻ってくると、お爺様様が激怒していました。

流石に、いつも冷静な夏侯淵も気分を害しているようでした。

それでも直ぐにそれを表に現れないようする当たり優秀な人ですね。

そこまで会いたいなら会ってやろうじゃないですか。

ここは私が助け舟を出すことにしましょう。

「お爺々様、折角の誘いなのですから、受ければよろしいではないですか」

「正宗、口出しするでない。お前はこやつの主がどのような奴かわかっておらぬのだ」

私の話など聴く気もないみたいです。

「それは宦官の孫だからですか？それとも曹操殿の親である曹嵩殿が金で官位を買ったと言われているからでしょうか？それと曹操殿とどう関係があるのでしょうか」

「全てに決まっておるに決まっております！このような輩と関われば、私やお前の父だけでなく、お前まで要らぬ誹りを受けることになるのだぞ！」

「言いたいやつには、言わせて置けばいいではないですか？」

「お前は何も判っておらぬからそのようなことが言えるのだ！」

まあ、通儒とまで言われたお爺々様にとっては、曹操は最低最悪の存在だと思います。

「まあまあ、お爺々様が行きたくないのなら、私だけ曹操殿の招待を受けます。お爺々様は先を急ぐなり、宿を取るなりしてください。じゃあ、案内をお願いしますか。夏侯淵殿」

こうすればお爺々様は不満があっても着いてくると思います。

私も曹操には興味がありましたし、曹魏を築く傑物と友誼を結ぶことは、将来役に立つはずです。

孫策と対立することになる私には、保険にもなりません。

劉ヨウ様と彼の祖父らしき方が言い争いを初めた。

「お爺々様」と呼んでしたので、この老人が劉本だろう。

華琳様の命で劉ヨウを招待しようとしたのだが、劉本が丁重に断ってきた。

このことは予想がついていた。

それでも敢えて華琳様は劉ヨウを招待しようとしたのだから、私も簡単に引くわけにいなかった。

私のことをしつこいと思ったのか劉本は、本音を吐露してきた。

「宦官の孫」幾度となく聞いてきたが、いつ耳にしても腹立たしかった。

華琳様が何故そのように侮蔑されなければならない。

怒りが少し顔に現れてしまったが、直ぐに、私はいつもように冷静さを装った。

そんなとき劉ヨウが前に進みでて、劉本を嗜めてきた。

しばらく言い合っていたが、劉ヨウは埒があかないと思ったのか私を見て、止める劉本を無視して、劉ヨウは私に案内を頼むと言ってきた。

「はっ！こちらでございます」

私は諦めようとしていたので、突然の劉ヨウの行動に驚いてしまった。

私が夏侯淵と一緒に曹操の屋敷に向かうと、お爺々様と護衛の兵は悩んだ末に、私達について来ました。

お爺々様は不機嫌です。

後で、フォローしないといけないですね。

「ところで曹操殿はどういった方です？」

私は夏侯淵に曹操のことを聞きました。

レズロリ霸王様であることを知っていますが、私の認識と同じか確認のためです。

「曹操様は美しく聡明な方だと思います。」

「ほう。それは楽しみです」

成長した曹操はチビですが美少女でしたから、美しいというより、かわいいが正確な気がします。

あれでSじゃなければ、文句なしなのですが……。

曹操の前で「チビ」という言葉は禁句でしたね。

気をつけないと首を鎌で切り落とされます。

「私は趣味がないのですが、曹操殿のご趣味は何でしょうか？」

「そうですね料理や読書、武術、馬術なんにでも興味を持たれる方です」

夏侯淵は自慢げに曹操のことを話していました。

多趣味ぶりは流石、曹操だと思いました。

私、趣味がないです。

お爺々と都督のジジのせいで……。

「劉ヨウ様は武勇に優れておられるとお聞きおよんでおります。また、山陽郡にて、山陽の麒麟児と称されていることも」

ふう　　ん、ピーンとききました。

私を呼んだのはそういう理由ですね。

将来、人材マニアとなる曹操です。

「山陽の麒麟児」と呼ばれる私に興味を持ったのよね。

なんとなく納得できました。

「私にとってその通り名は恥ずかしいのであまり言わないでいただけませんか」

「何故でしょうか。劉ヨウ様の才覚を民が讃えているのですから、喜ばしいことだと思いますが」

夏侯淵は不思議そうな顔で聞いてきていますが、この人の場合、私の人となりや推し測っているんでしょうね。

おー、怖い。

「別に讃えられるためにやったのではないです。私のためにやっただけです。結果的にそれが民の為になっただけですよ」

私は自重気味に話した。

私のためにやったのは事実ですから。

「傲慢過ぎるのは問題でしょうが、謙虚過ぎるのも嫌みに聞こえ人に要らぬ不評を買うと思います」

夏侯淵は私が謙遜していると思っているようです。

「ははっ、手厳しいですね。そうですねご忠告ありがとうございます」

す
」

「あっ！いえ、つい出過ぎたことを申し上げました」

「いいですよ。置きになさらずに」

私と夏候淵は少し打ち解けた気がしました。

お爺々様は相変わらず不機嫌でした。

第9話 未来の霸王 後編（前書き）

何人かの方に指摘を受けたので、それを参考に手直しを試みました。

後、表現が変な部分があったので、自分なりに修正してみました。

第9話 未来の霸王 後編

秋蘭は無事、劉？を招待することができたようね。

断られるかと思っただけど、案外、上手くいったわね。

招待を断られても、劉？を追いかけて無理にでも会うつもりだったわ。

私に諦めるなんて言葉は存在しないのよ。

秋蘭の話では、劉？以外に、彼の祖父劉本が付いてきているらしい。

当初、劉本は私の招待を拒否したらしいのだけど、劉？が強引に招待を受けてたそうだけど・・・。

劉？がそこまでして、私の招待を受けたことが気になるわね。

祖父と母上の話をされても、私とは関係ないといったそうだし。

私の身の上を同情をしたとかなら許せないわね。

まあ、話せばわかることだわ。

秋蘭が劉？達を案内してきたようね。

「私が曹操と申します。劉本殿、劉？殿に置かれましては、突然の誘いにも関わらずにお応えいただき感謝の極みです」

「僕はこのような場所に来とうなどなかったわ！孫が行くと言う故、仕方なしじゃ！勘違いするでない！」

「曹操殿、お気悪くしないでください。お爺々様はちょっと虫の居所が悪いのです。それでは、気を取り直してあいさつさせていただきます。ご丁寧な挨拶いたみます。こちらこそわざわざお招きいただいたこと感謝の極みです。ところで曹操殿、堅苦しい挨拶はこの辺にしませんか？」

劉？は私に平然と話しかけてきた。

秋蘭から聞いていたが、彼の私への態度には、私を嘲笑する奴等から感じられるような嫌な感じは全くなかった。

「変わってらっしゃるのね、劉？殿」

つい、思っていることが口に出てしまった。

彼の祖父の態度が普通だと思っわ。

「私のこと気にならないのですか？」

「何がです？」

本当に何も思っていないのかしら。

まあ、いいわ。

「劉本殿、劉？殿、食事を用意いたしましたので、口に合うかわかりませんが、ご一緒にいかがでしょうか？」

「どんな食事が楽しみです。」

劉？は本当に喜んでいる顔を見ると、考えるのが馬鹿らしくな
ったわ。

彼の人となりは良くわかったわ。

「本当、変わっているわね」

私は、誰にも聞こえないように呟いていた。

あの後、私が気軽に話そうと思ったら、曹操も堅苦しかったのか受
けてくれました。

それでも口調が若干固めでしたけど。

「どうですお口に合いましたか？」

曹操が私に聞いてきた。

「うん、おいしいです」

「そう、その割には簡素な返事のような気がするんですけど・・・」

「気にしないでいいですよ。私はあまり感情表現豊かな方じゃない

から」

「そうなのですか？」

「うん！」

「劉？殿、歳はいくつなのですか？」

「今年で7歳です。ああ、後、お互い子供なんですから、『殿』と呼ぶはやめませんか？私も曹操さんと呼ばせてもらいますので」

「私達、今日あったばかりですよ。まあ、構いませんが、それじや劉？君とお呼びすればいいのですか？何かちよつと私らしくない気がします」

曹操は少し戸惑っているようだったけど、私のことを君付けで呼んでくれました。

曹操が私のことを「劉？君」と呼ぶと、違和感があるんですけど、ギャップ萌えというものでしょうか？

意外にいい気分です。

「曹操さんの歳はいくつなのです」

「劉？君と同じです」

流石霸王様です。

既に、この掛け合いに順応しています。

「噂で聞いたのですが、劉？君は自分の母親を山賊から救出したそうですね。その武勇はこの陳留にも伝わっていますよ」

「先ほど、夏侯淵殿からも同じことを言われました。そんなに有名なのでしょうか？」

「それは当然です。3,000人の賊を1人で滅ぼして人質を救出したというなら。その上、救い出したのが母親なら美談として広まるのは必然ではないですか。それより山賊の数が3,000人というのは本当なのですか？」

どうしたものかな。

曹操に本当のことをいっても良いのだろうか。

今後のこともあるので、曹操と仲良くしておくのもいいかもしれない。

逆に嘘を言って、曹操に嫌われるのも何だし。

「信じられないかもしれないですが本当です」

「では、どのように倒したのか教えて欲しいですね」

曹操の目が怪しい輝きを放っているように見えた。

「単に打ちのめしただけです」

「私を馬鹿にしているのですか？」

曹操は一点して、怒りに満ちた顔で私の顔を見つめ返した。

まあ、この反応が普通ですよ。

「私は曹操殿のことを気に入りました。だから、私の武がどんなものか見せて上げます。どこか人の居ない広い場所はないですか」

「どうして、そんな場所であればいけないのです？この屋敷にも練武場があります。そこでも構わないと思うのですが」

「多分、そこで私の技を使ったら、曹操さんの屋敷が崩れますよ」

「なっ！そんな馬鹿なことがある分けないじゃないですか！」

「そんな馬鹿なことをしたから私は、山陽郡の麒麟児などと言われているのですよ」

「くっはははっは、正宗やめておけ！その小娘にお前の凄さなど到底理解できぬ！器が違うのじゃからな、ぐわはははっ！」

今までずっと不機嫌だったお爺々様が機嫌良く言ってきた。

お爺々様は曹操を侮蔑した目つきで見ていた。

「わかりました！ならば、嘘だった場合、その命で償ってもらいます。がよろしいですか！」

お爺々様の発言と態度が癪に触ったのか、曹操が怖いことを言ってきます。

嘘はついていないので、私は構わないです。

ですが、「命を懸ける」といつているわけですから、私も曹操からそれに準ずるものを貰ってもいいですよ。

「わかりました。ですが、私だけ命を懸けるのは公平ではないと思います。曹操さんも何かを懸けてくれませんか？そうですね・・・。うん！私と曹操さんで真名を交換するというのはどうでしょう」

「真名でも何でも交換してさしあげます。そのかわり覚悟しておいてくださいね」

そういう訳で、陳留から数里先にある平野にて私の武をお披露目することになりました。

お披露目をしようとしたのですが、既に、陳留の城門が閉じているので、明朝となりました。

陳留群某所―

どこまでも平野が続いていた。

昨晚の約束を果たして貰うため、私は陳留でも人があまりこない場所に来ている。

私以外には、劉？、春蘭、秋蘭、そして劉本の5人。

結果は分かりきっているけど、付き合って上げるわ。

「正宗の趣味を疑ってしまうぞ。こんな娘の何処が良いのだ」

私の隣で、劉本がぼやいている。

別に、劉？は私に惚れたなどとは一度も言っていない。

何を勘違いしているのかしら、このボケ老人は。

「劉本殿よろしいのですか？今ならあなたの孫が土下座すれば許して上げますが」

寛大な私は劉本に救いの手を差し伸べてあげた。

「ふははははっ、お主本気で言っているのか？この勝負初めから孫の勝利に決まっておろうが！」

小馬鹿にしたように、劉本は私を見下ろしながら話してきた。

癢に触るわね、この劉本の態度は何なのかしら、この自信何処からくるのかしら。

子供が山賊3、000人を殲滅するなんて出来る訳ないでしょ！

嘘に決まっているわ！

まあ、いいわ面白い余興と思えばいい、劉？、私に命乞いをすれば

いいわ。

劉？覚悟しなさい。

「春蘭、劉？君のお相手をしてあげなさい」

「はい！華琳様、あんな奴一撃にて殺して差し上げます」

「春蘭、発言には気お付けなさい。皇族の方に失礼よ！」

この子は本当に場を弁えていないわね・・・。

「申し訳ございません・・・。華琳様」

これではつきりするわね。

あなたが嘘つきだということが、がっかりだわ。

少しでも興味を持った私が馬鹿だったわね。

「貴様——！貴様が劉？だな——！」

夏侯惇は大声を張り上げて、私を威嚇してきました。

「呼び捨てですか。まあ、いいですけど。夏侯惇、手加減してあげます。私はここから一步動きませんから、どうぞ」

私は双天戟を両手で持ち、構えました。

「貴様、私を侮辱するきかー！！」

「侮辱していませんよ。あなたが弱いと思うから手加減をするんです」

「な、何だと、もう許さんぞー！死ねー！！」

夏侯惇は盛大に切り掛かってきました。

随分大振りな太刀さばきです。

これなら直ぐ終わります。

私はぎりぎりまで、太刀を避けずに双天戟の棒の部分で、夏侯惇の横腹目掛け叩き付けました。

叩き付けられた夏侯惇は、私の左方向に吹っ飛んでいきました。

死んでいないとは思うのですが・・・。

あれ・・・、動かないですね。

手加減はしたつもりだったんですけど。

「うん？」

周囲を見ると、曹操が私のことを目を見開いて凝視しています。

お爺々様は相変わらず気分が良さそうです。

「姉者っーーーーー！」

夏侯淵が夏侯惇に駆け寄っていつています。

若干、タイミングが遅いような気がします。曹操と同じ理由でしょうね。

私の武を見誤ったというところでしょう。

そもそも、あの程度で夏侯惇が勝てる訳がないです。

「姉者、姉者！ああ、良かった！意識はある」

夏侯惇は死んでいないようです。

夏侯惇が無事であることを確認すると、夏侯淵は親の仇を見るような目つきで私を睨みつけてきました。

そう言えば、夏侯淵はシスコンでしたね。

「貴様、よくも姉者をっ！」

私に向かって弓を放とうか身構えるが――。

「振雷・零式！」

私は彼女が矢を放つ前に「振雷・零式」を夏侯淵の立っている右側

の地面を抉るように放った。

夏侯淵は「振雷・零式」の余波で、体勢を崩し、弓を落としてしまった。

技の無駄使いですね。

これで私の勝ちだと思います。

勝てる見込みなどないことがわかったでしょう。

夏侯惇が怪我しているみたいなので、怪我を治療してあげますか。

「な、何なの・・・、信じられない」

私はその光景を見ていた。

春蘭が劉？に一撃で倒された。

次に、秋蘭が劉？に矢を射ようとしたら、その前に光の様なものを放った。

光は秋蘭に直撃こそしなかったが、秋蘭の右側の地形は光が進んだ直線上に地面を抉っている。

あれが秋蘭に直撃してたらと思うと戦慄した。

劉？の方を見ると、傷一つない。

秋蘭の矢は当たらなかったようね。

劉？あなたは何者なの？

今なら分かる。

山賊を3、000人を殲滅したのも嘘ではないと思えるわ。

私は劉？に恐怖を抱くと同時に、興味を更に強めた。

その後、私は夏侯惇の容態を診たのですが、肋骨を骨折したようでした。

夏侯惇を私の力で治療して上げました。

夏侯惇を治療後、夏侯淵は私に謝罪とお礼を言ってきました。

「劉？君の掌で踊らされたようで癪ですが、約束ですから真名を交換してあげます。私の真名は華琳です。それと私の事は呼び捨てで構いません」

「じゃあ華琳も私のことを呼び捨てで呼んでくれないかな。私の真名は正宗」

「私もま、正宗君のことを呼び捨てで呼ぶのですか？」

華琳は私の申し出に戸惑ったようでした。

「うん！」

「皇族の方を呼び捨ては不味いと思います」

「まあ、いいですよ。無理強いするのも何ですし」

華琳が困った様子だったので、無理強いするのは悪いと想い諦めました。

曹操と真名の交換をしました。

夏侯惇、夏侯淵とも真名の交換をしました。

「夏侯惇、夏侯淵殿。お二人は何故、私と真名の交換をしようと思ったのです？」

「華琳様が真名を交換したからだ！それとお前は私を倒した、それで十分だ！」

相変わらず夏侯惇の偉そうな態度はなんなんだろう。

一応、私は皇族なんだけど、馬鹿じゃないのだろうか。

私は気にしないでしょ。

「私も同じです。姉者を治療してくださった恩人に真名を預けるに

は当然です」

夏侯淵は相変わらず理知的な人ですね。

できれば、将来、私の副官になってくれないでしょうか？

考えるだけ無駄でした。

そついう訳で、華琳、春蘭、秋蘭の3人と友誼を結べました。

第10話 別れと初めての洛陽

お爺々様は私が曹操をギャフンといわせたことに余程満足したのか、機嫌はすっかり良くなっていました。

しかし、華琳達とさっさと別れたいのか、陳留を早く立ちたがっていました。

私は華琳が昼ご飯をご馳走してくれるといつので、その申し出を快く受けました。

朝、戦闘という名の運動してカロリーを消費したので、華琳に昼ご飯をご馳走して貰ってから出発しても問題ないと思いました。

折角、華琳とお近づきになったわけですから。

それは向こうも同じでしょうけど。

「あゝ、美味しかったですね」

「口にあって何よりです」

昼ご飯をいただいている処です。

ここは曹家の屋敷で、今、この場にいるのは、お爺々様、私、華琳

の3人です。

「いや、華琳。お昼ご飯もいただいてしまつて」

「別に気にしなくても構いません。私の方からお誘いしたのですから」

「正宗君。少し、質問してもいいですか？」

「いいですよ、華琳」

「正宗君は、洛陽へは何をしに行くのですか？」

「姉上が洛陽で勉強しないかと便りがきたので、良い機会だから洛陽に行くことにしたんですよ」

「そうなんですか。じゃあ、劉本殿は保護者といったところですね」

「ふんっ！」

お爺々様は本当に華琳が嫌いなようですね。

不機嫌なお爺々様は放つといて、華琳との会話に戻ることにしました。

「それと……。どうして、正宗君は私の招待を受けてくれたのですか？」

唐突に華琳は私に、私が華琳の招待を受けた理由を聞いてきました。

「秋蘭が、随分、熱心に招待しようとしたからですけど」

「そんなに熱心だったのですか？」

「ええ、凄く熱心でしたね。そこまでされて招待を受けないのは野暮だなと思いました。一瞬、私に華琳が恋をしているのかと勘違いしてしまいました」

「それはないから安心してください。それより私が女だと知っていたのですね」

そこを突いてきますか。

言葉尻からそこまで読み解くとは、華琳は鋭いですね。

迂闊なことは言えないと思いました。

「知っていたのは語弊があると思います。曹騰殿に孫がいるのは有名でしたし、女尊男卑の世というだけあって、傑物の多くは女性です。それ加え、私にご執心ときたら曹操は女の可能性が高いと思うただけです」

もつともらしいことを言ってみました。

「そう。その割には確証みたいなものを持っていたように感じるのは私の気のせいですか？」

華琳のあの目は、私を疑っているようです。

「曹操、お前が女なのは儂ですら知っておったわ！儂の愛弟子でも

ある正宗がそれを知らぬはずはなかるうが！」

お爺々様のナイスフォローに感謝しました。

「ですが、劉本殿。正宗君は推測で私が女だと言っているのですよ」

「黙れっ！私の孫を気安く呼ぶな！虫酸が走るわ。昼餉もいただいたのだ、正宗ももう十分満足したであろ。さっさと支度して、洛陽に向かうのじゃ！」

お爺々様はもう我慢の限界のようです。

私の手を握り、力一杯引つ張て行き、屋敷の外に出ようと思いました。

「お爺々様、ちょ、ちょっと待ってください」

「ちょっと待ってください。話がまだ終わっていません」

「黙れ、儂らは早く洛陽に行かねばなんのだ！お前などに付き合ってられるか！」

お爺々様は暴走してしまいました。

私はドナドナの小牛のように、お爺々様に引きずられていきました。

複雑な気持ちでしたが、まあ、何とか切り抜けることができました。

でも、華琳に不信感を抱かれた気がします。

結局、先ほどの会話の件は有耶無耶になり、私とお爺々様は城門近

くにいます。

護衛の兵士も一緒にいます。

目の前には、華琳、春蘭、秋蘭の3人が見送りに来てくれています。

「正宗君、また、会えることを楽しみにしています」

華琳は、意味深な笑顔で私を見えています。

「う、うん、私も楽しみにしているよ」

多分、さっきの会話に納得していないのだと思います。

面倒なことにならないればいいですが・・・。

「正宗っ！さっさと会話など終わらせて、洛陽に向かうのじゃ！」

「お爺々様、華琳に失礼ではないですか！仮にも1日逗留させてもらったのですよ」

「気になどしなくてもいいです。正宗君。こんなこと慣れてます」

華琳は何も気ないように言う。

その割には、春蘭と秋蘭は、怒っているように見えますけど。

「お爺々様には後で言うておきますから」

「本当に気にしなくても良いです。正宗君は、変わっていますね」

華琳は先ほどの意味深な笑顔とは違う、年相応の笑顔を私に向けてきました。

「早くせんかつ！正宗、置いてゆくぞ！」

お爺々様がしびれを切らしたようです。

先に、城門を出て行こうとしています。

「仕方ないですね。お爺々様も。それではお世話になりました。華琳、春蘭、秋蘭、お元気で」

「ええ、正宗君もお元気で」

「あのジジイは二度と連れてくるな」

「姉者、腹立たしいのは分かるが、正宗様に責任はない。正宗様もお気になさらないでください。無事、洛陽の旅路が終わることをお祈りしております」

私は華琳達と別れを告げると、お爺々様達を追いかけてきた。

「正宗、本当に変わったてたわね。でも、私に何か隠してたみたいだったわね」

「そうなのですか？華琳様。ですが、人物は好感を持て、聡明そうでした」

「正宗の武は凄かったです。ですが、この春欄、これまで以上に鍛錬に励み、いつか正宗を倒してみせます！」

「ふふっ、正宗と出会って、久しぶりに充実した気がするわ」

私は正宗が何を隠していたのかが気になっていた。

分からないことをそのままにしておくのは、私の主義ではないわ。

それに正宗は、私と将来対立するかもしれない気がするのよ。

本当に、対立するかはわからないけど。

何と言うか正宗って、つかみ所がないのよね。

善人そうに見えて、強かそうにも見えるわ。

まあ、悪人ではないことは確かね。

暇つぶしのつもりだったのだけど、私は正宗に出会えて良かったと思っただ。

私を楽しませてくれそうなんですもの。

私は正宗が向かった、洛陽の方角を眺めた。

「お爺々様、まだ機嫌は治られないのですか？」

私は今、洛陽へ向かっています。

その道すから、お爺々様の気を沈めようと奮戦しています。

「当たり前じゃ。正宗、洛陽に着いたら、しばらくは二倍の勉強をしてもうぞ。曹操のことなど、考えておられぬ位にな」

私を殺す気ですか、お爺々様？

「華琳が何をしたというのですか？」

「元と言えば、お前が曹操の招待を受けるのが、悪いのじゃ。あのような奴と関わるのはこれっきりにするのじゃぞ」

ここは、形だけでもお爺々様に従っていた方がいいようです。

華琳と友誼を結べたことは、私にプラスになりましたから。

「はい、判りました、お爺々様。お爺々様の気も知らずに、初めての旅で浮かれてしまいすいませんでした。」

「うむ・・・、判れば良い。だが、洛陽での勉強は二倍だから、そのつもりでおれ」

まじーーーーですか！

お爺々様は陳留での件を根に持っているように思います。

はあ、只でさえお爺々様の授業は、スパルタ教育なのに、その倍とは、洛陽での楽しい生活はもはや露と消えたも同然です。

私は意気消沈しながら、重い足取りで洛陽への道を進みました。

あれから数日かけて、かの洛陽に到着しました。

「これが洛陽ですか！今まで見た街とは比べようもない位大きいです」

私は感動していました。

洛陽の街は大きいにつきます。

人も物も沢山あります。

この大陸の中心ということだけはありますね。

「当然じゃ、ここは皇帝のお膝元じゃからの」

「それより、まず、燐のところを尋ねようかの」

「姉上の所に参るのですか？仕事中でご迷惑じゃないのですか？」

「尋ねるのは、燐の役宅じゃよ。早く、行くぞ。洛陽の旅は、この

老体には骨が折れたわ。燐の屋敷で、旅の疲れを取りたいの」

なら、お爺々様、来なければいいじゃないですか。

「そうですね。早く、姉上に会いたいです」

「うむ」

私達は、数刻後、姉上から貰った文を頼りに、無事、姉上の屋敷に着く事が出来ました。

第11話 馬鹿×2 + 苦勞人と少年A

ここ洛陽に来て数日が過ぎました。

姉上は仕事が多忙なようで、未だ会えていません。

私、正宗は毎日、地獄のようなお爺々様の猛勉強に付き合わされています。

お陰で鍛錬の時間もそうですが、睡眠時間がないです。

ああ、今このときも、す、睡魔が襲ってきます。

「これ、手がお留守じゃぞ、正宗よ」

お爺々様は、こつんと私の頭を叩いてきます。

こうやって、お爺々は、私の安眠を妨害してくださっています。

だいたい、お爺々様だって、居眠りをしているじゃないですか。

7歳児にこんな仕打ちをするなんて、これってDVじゃないですか？

う、訴えてやるっ！

私は自分の虚しい行動に、悲しくなってきました。

何が、悲しくて洛陽くんたりまで来て、こんな目に遭わなくてはいけないのでしょうか？

お爺々様、曰く。

「雑念を捨てさせるためじゃ。それに、将来、お前は儂にきつと感謝するじやろつて」

そうですか、お爺々様。

私は返事をする気力もありませんでした。

「おう、そうじゃった！大事なことを忘れておったわ！」

お爺々様は何かに気づいたのか手を打ちました。

「正宗、喜べ。燐がお前のために、私塾を探してくれておったようだぞ。儂も足を運んでみたが、なかなか良いところであつたぞ。念のためにいっておくがの。正宗、私塾は勉強だけが目的ではない、若いうちにいろいろな人物に会い、人脈を作つてゆく場でもあるのじゃ。故に、私塾では勉強ばかりするでないぞ。じゃが、成績が悪くならない程度じゃからな」

お爺々様は好々爺然と態度で言つてきました。

お爺々様、私塾で勉強なんかする訳無いじゃないですか！

勉強なら嫌と言うほど、お爺々様にさせられています。

私はこの話に内心にほくそ笑んでいました。

これで自由な時間が出れます。

「正宗よ、あまり羽目を外すでないぞ」

私の考えが、表情に出ていたのか、お爺々様は一言注意してきました。

「はい、お爺々様。私塾にて、友達を沢山作りたいと思います」

「うむ、勉強もしっかりするのだぞ」

「ところで私塾へはいつから通うのでしょうか？」

「そうじゃな……。善は急げじゃ。私塾の先生の話では、いつからでもいいそうじゃ。今から、その私塾に行くかの。正宗、勉強は暫し中断じゃ。私塾の先生に挨拶行く故、準備するのじゃ」

私とお爺々様は私塾に向かうことになりました。

私の私塾生活は睡眠ライフを満喫できると、心湧き踊っていました。

そうこのときまでは。

「オ　　ホホホホ、ホホホ、斗詩さん。今日の予定は何かありませんか」

私は袁家の長女、袁本初です。将来、私はいずれ、4代にわたって

三公を輩出した名家の当主になりますのよ。

オーホホホホ、ホホホ。

「麗羽さま、特にありませんけど」

「猪々子さん、何かありませんの。非常に退屈ですわ」

「そうですね、姫。上手いラーメン屋があるんですけど、そこに行きませんか？」

猪々子さんは、いつも食べ物のことばかりね。

「ラーメン、まあ、いいですわ。ちょうど、小腹が空いていたことですし、猪々子さん案内しなさい」

時には、下々の食事を味わうのもいいものですわ。

下々の食事を食べて、下々の生活を知る。

まあ、私って何て凄いのでしょうね。

「オ　　ホホホホ、ホホホ」

「姫、何が可笑しいんですか？」

「文ちゃん、麗羽様だから」

2人が何か話しているようですが、気になりませんわ。

「才　　ホホホホ、ホホホ」

「よくわからないけど、まあいいや！姫、斗詩、行きましようよ」

私達は、猪々子さんの案内でラーメン屋行くことになりましたの。

私とお爺々様は、私塾に向かい担当の先生に会いました。

先生からは、お爺々様の孫なので、きっと優秀な子だろうと期待していました。

お爺々様の「通儒」というネームバリューのお陰で、私にプレッシャーがかかります。

私は私塾で睡眠ライフを謳歌したいというのに・・・。

いろいろと雑談をした後、明日から私塾に行くことになりました

「正宗、そろそろ昼じゃな、どこかで何か食べるかの。何が良い」

「手軽な物でいいですね、お爺々様」

「何か上手いものでも食べさせてやろうかと思っておったのじゃが。そうか、じゃあそこらの食堂にでもいくかの」

単に、高級な店は肩が凝るし、落ち着かないだけなんですけどね。

それはお爺々様も一緒でしょうけどね。

どうも、私達の一族の者は、贅沢な生活をしたいと思う人が少ないですから。

私はお爺々様と一緒に近くの食堂に入りました。

「おっちゃん、ラーメン2杯に、ラーメン大盛り1杯とチャーハン1皿ずつ!」

「へい、かしこまりました」

元気の良い女の子が注文をしていました。

うっ!

よく見るとその女の子は見知っています。

彼女が座っている席には、見知った顔が更に2人いました。

面識があるわけじゃないですよ。

恋姫の知識で知っているだけです。

あの3人はどうみても袁紹と文醜、顔良ではないですか!

「どうしたのじゃ、ボーっとして。席に座るぞ」

私はお爺々様に促されて、空いている席に座りました。

お爺々様は、菜譜に目を通すと私に渡してきました。

「何がよい、正宗」

袁紹の存在に動揺した私は、彼女達に目立たないように菜譜で顔を隠しながら料理を選びました。

「ラーメンとチャーハンでいいです」

渡された菜譜を見て、私はお爺々様に言いました。

「そうか、なら僕もそれにしようかの。おい、店主。ラーメン2杯とチャーハンを2皿頼む」

「へい、かしこまりました」

何と言うか・・・。

あまり関わりたくない人達です。

特に、天然クルクルパーの金髪娘には・・・。

容姿は申し分ないんですが・・・、あの性格で無ければ、お近づきになりたいのですが、本当に惜しい人です。

まあ、あれだけの美女とお近づきになるのは無理ですね。

私はチート能力者ですが、イケメンではないので。

そう私は普通ですから。

言っていて悲しいです。

こういうとき北郷一刀を羨ましく思います。

そう言えば彼はこの世界に現れるのでしょうか？

可能性としてはあります。

面倒臭いことになりそうです。

彼が孫策達のところに、舞い降りたら、間違いなく目障りな存在になると思います。

彼は只の高校生で、文武に秀でているわけではない、一般人ですが、未来の知識はあります。

孫策の右腕、周瑜が彼を放つとく訳ないです。

周瑜は必ず、彼の未来の知識を利用すると思います。

もし、孫策の元に彼が現れるなら、警戒する必要があります。

彼には悪いですが、暗殺も視野に入れなければいけません。

今の自分には無理な話ですが・・・。

やはり、将来的には私の自由になる私設軍が必要かもしれません。

「正宗、料理が来たぞ。食べるとするか」

私が物騒なことを考えていると注文していたものが来たようです。

目の前には、ラーメンとチャーハンが並べられていました。

「うーん。おいしそうです」

「そうか、それは何よりじゃ」

私達は食事始めることにしました。

私はラーメンを食べながら、袁紹達に気づかれないように視線を向けました。

彼女達も食事中のようです。

ラーメンはおいしいのですが、彼女達が気になって味わうことができません。

私は何事も無く、この食堂を出ていけることを祈りました。

第12話 袁紹の初恋（前書き）

総合評価ポイントが1,000ポイントを突破しました。

お気に入り数も400件を突破しました。

ありがとうございます。

更新の励みになります。

これからも頑張りたいと思います。

第12話 袁紹の初恋

私とお爺々様が昼ご飯を食べていると、柄の悪いいかにもチンピラ2人組が食堂に入ってきました。

彼らは適当な席に、座ると店主に注文を済ませました。

私は自分の料理に視線を戻し、昼ご飯を食べることに専念しました。それから四半刻過ぎたころでしょうか。

「おい、オヤジ！ちよつとどういうことだ！」

「オヤジ！ちよつと説明しやがれ！」

チンピラ2人組が何か叫んで騒ぎ出しました。

何事かと店内の客がチンピラ2人組を見ています。

「あのお客様、どのようなご用件でございますか？」

「ご用件だと！見てみるこの料理を！髪の毛が入っているじゃねえか！お前の店は客に、こんな料理を食わせるのか！」

「申し訳ございません！只今、作り直させていただきますので」

「おい！オヤジ！それで済むと思ってるのか？」

チンピラ2人組の1人が凄みを聞かせながら、店主に言っていました

た。

「お客様、どのようにすればお許しいただけるのでしょうか？」

店主は面倒な客だと思いつつ、丁寧な態度を取っていました。

「そうだな、今日の売り上げ全て寄越せば、許さなくはないぜ」

店主のその反応に、チンピラ2人組はニヤツと表情を一瞬変えて言いました。

明らかに、言いがかりを付けて、たかろうという腹ですね。

「そ、それは、それだけは勘弁してくださいませんか？それでは店が立ち行かないです」

店主は頭を下げて謝っていました。

可哀想だと思いましたが、あの店主を助けると目立ちますね。

せめて袁紹達が居なくなってくればいいんだけど・・・。

などと店主とチンピラ2人組を見ていました。

私が食事をしている最中になんて五月蠅い人達ですのっ！

「あなた達、五月蠅いですわよっ！静かになさい！この私が食事中なのですわよ！」

私はおもむろに席を立つと見た目が悪人面の2人組に向かって言いました。

「なんだと！ガキは黙ってろ！」

悪人面の2人組が私達を睨みつけながら怒鳴ってきましたわ。

何て人達なのかしら、こんな野蛮な人達初めて会いますわ！

この袁本初に向かって、偉そうですわね。

許せんせんわ！

「猪々子さん、やっておしまいなさい！」

「えっ！姫ー。アタイじゃ無理ですよ！」

猪々子さんが抗議してますが、認めません事よ。

主君の為に、家臣として頑張りなさい。

「猪々子さん、あなたは私が侮辱されて悔しくありませんの！さつさとあの野蛮な人達をやっておしまいなさい！」

「麗羽様、相手は大人なんですよ。いくら力持ちの文ちゃんでも無理ですよ」

斗詩さんまで何なのですの！

「さっきから、ごちゃごちゃ五月蠅せえぞ！この糞ガキ！」

「あつ！姫、危ない！くっ！」

野蛮な人達の1人が殴り掛かってきました。

私は殴られると思ったのですが、猪々子さんが私を庇ってくれたので殴られませんでしたわ。

「猪々子さん、だ、大丈夫ですのっ！しっかりなさい」

私は殴られた猪々子さんに駆け寄りました。

「いつ、痛っ！・・・あ、姫！。大丈夫でした・・・か？」

「猪々子さん、大丈夫ですの？」

私は心配になって尋ねました。

「まあ、大丈夫かな・・・。足をちよつと挫いちまったかな」

猪々子さんは少し苦痛な顔で私を見ていましたわ。

許せんわ！

「あなたなんてことをするんですの。私が誰か知って」

私が言い終わる前に、野蛮な人達は怒鳴ってきました。

「テメエが誰かなんか知るか！」

「痛い目に会わせてやるぜ！」

な、何て野蛮な人達なのかしら、それより私は、袁家の者なんですよ！

私は周囲を見渡すと、誰も私と目を合わせようとしませんわ。

店主に至っては、何ですのあの態度はっ！

だ、誰もなんで私を助けませんのっ！

私は、こ、怖くなんてありませんわ、本当ですよっ！

「正宗、さっさとあの暴漢を追いつ出して参れ」

お爺々様は一度、箸を休め、私にそのことを告げると、直ぐに、食事を再開しました。

「お爺々様、私は父上、母上に危険なことを禁止されておりますので、無理です」

袁紹に関わりたくない私は、お爺々様に小声で言いました。

「お前は儂に、暴漢の相手をしろというのかの？この老体には無理じゃ、それに儂は、昔から荒事は苦手じゃ。それとも正宗、困っているか弱き淑女を見捨てるのか？お前の父と母もこの程度、目を瞑ってくれるはずじゃ」

お爺々様は目を瞑り、嘆かわしいことじゃと言わんばかりの態度を取りました。

「お爺々様が『淑女』というのはどこにいるのでしょうか？私には暴漢に喧嘩に売っている愚か者にしか見えません。しばらくすれば騒ぎを聞きつけた警邏の兵が駆けつけると思います。わざわざ私が出しゃばらなくても良いかと思えます」

私は、お爺々様に食い下がりました。

「警邏の兵が来る前に、あの少女達が怪我をしたらどうするのじゃ。お前はそれでも無視を決め込むつもりなのかの。昔、お前は言っただけじゃ。弱き者を守りたいと。あの言葉は嘘じゃったのかの？」

お爺々様はそのことだけ告げると、また、食事を再開しました。

.....

こう言われては私も何も言い返せません。

お爺々様も人が悪いです。

お爺々様は人助けの為に、私が武を振るうことには、賛成でした。

都督のジジに、私が軍属としての指導を受けれたのもお爺々様のお陰でした。

はあ、正義の味方は辛いですね。

確かに、お爺々様の言う通り、助ける者を選び好みしてはならないです。

それは弱き者を守るとは言わないです。

私は席を立つと、袁紹と暴漢の間に入りました。

「なんだお前？ガキ、邪魔だから失せろ！」

「生憎とここを退く訳にはいかないのですよ。できればなんですが、ここは黙って帰ってくださいませんか？」

私は無理だろうと思いつつ、暴漢と円満解決を図ろう丁寧に言いしました。

「ああ？何で俺達が帰らなくちゃいけないんだ！俺達は被害者なんだぞ！店の親父に慰謝料も貰ってねえのに帰るわけねえだろうが！その糞むかつくガキ達にも嘗めた真似したらどうなるか教えてやらないと気が済まねえんだよ！」

暴漢達は頭に血を上らせながら、大声で私に怒鳴りました。

お前達が被害者って・・・。

一部始終を見ていた私には、明らかにお前達が言いがかりを付けて

いるとしか思えないんだけど。

はつきり言ってお前達のやっていることは三文芝居もいいところだよ。

仮に、暴漢達の言い分が正しかつたにしても、慰謝料の限度を超えていると思います。

「そうですか……。仕方ないので、実力行使させて貰います。怪我しても文句は言わないでくださいね」

私は暴漢達を力強く真つすぐ見据えていました。

私は不安に……。じゃないですわ。

少々、野蛮な人達に手こずっているのですわっ！

そんな私の前に、颯爽と、男の子が現れました。

彼は私達に一度目を向けると、野蛮な人達と対峙しました。

歳は私と同じ位ですわ。

私の華麗さに比べたら、地味な子ですね。

幼なじみの白蓮さんみたいですわね。

彼は野蛮な人達に向かって、帰るように言っていましたわ。

何なのかしらこの子っ！

野蛮な人達は、私に無礼を働いたばかりか、猪々子さんを殴り怪我をさせましたのよ。

こんな野蛮な人達にはケチヨンケチヨンにしなくては気が済まないですわ！

私が心の中で、不満を口に出していると、どうやら彼と野蛮な人達は交渉決裂したようですわ。

オーーホホホホ、当然ですわ。

この袁紹に無礼を働いたのですから、私の誇りに懸けて帰すわけには参りませんわ。

「その貴方っ！見事、野蛮な人達をケチヨンケチヨンにして下さいますし！」

私は彼に言っていましたわ。

なんなんでしょう？

先程までは、不安でしたのに・・・、不安じゃないですわね。

こ、この私が不安なんてありえないですわっ！

ほんのちよつとだけ、不安でしたのよ。

それなのに今は淒く落ち着いていますわ。

彼の所為なんですか？

ぱ、白蓮さんのような地味な人のお陰なんて、絶対に有り得ませんわ！

慌てて、彼に視線を戻すと、野蛮な人達の一人が彼を殴りつけてきましたわ。

彼はその小さな体で、野蛮な人の拳を片手で受け止めていましたわ。

私は驚きましたわ。

あの力だけはある猪々子さんを殴りつけたあの野蛮な人の拳をもの
ともしないなんて・・・。

「すいませんが直ぐ終わらせてもらいますね」

彼は一言言つと、野蛮な人の懐に入り込み腹に一撃を放ちましたわ。

あの無礼な野蛮な人は白目を向いて、膝を付いて前のめりに倒れましたわ。

オーホホホホホ、いい気味ですわね！

それにしても、私、彼のお姿を見ているだけで、体が熱くなりますわ。

彼、凜々しいですわっ！

もう一人の野蛮な人は驚いていますわ。

彼は最後の一人の野蛮な人に近づくと、一瞬体勢を崩し、野蛮な人の左足の関節に蹴りを入れましたわ。

「ぎいやあああああー！ー！ー！」

野蛮な人が絶叫を上げ、野蛮な人の足は変な方向に曲がっていますわ。

い、痛そうですわね……。

彼は体勢を崩して、叫んでいる野蛮な人の背後に回り、腕で首を絞めて気絶させていましたわ。

最初に倒された野蛮な人同様、白目を向いてますわね。

オーホホホホホ、気分が良いですわね。

それにしても私どうしてしまったのでしょうか。

彼を見ると体が熱くなりますわ。

こんなこと、今までに体験したことはありませんわ。

これがもしかして……、巷で聞いた事があるあれですわねっ！

「私は貴方に恋をしてしまいましたわ」

私は気付くと彼に近づきながら、そう言ってしまうたわ。

な、何てはしたないことをしていますの。

気付いた彼は、私の告白に動揺しているみたいですね。

キヤアー————、まずいですわ、気まずいですわ！

私の顔から火が出そうな位、熱いですわ。

第13話 モテ期は不幸と共にやってくる

私は動揺して、状況が把握できません。

袁紹が私の前に立ち、頬を染めて私を見つめています。

『私は貴方に恋をしてしまいましたわ』

私が最後の1人の暴漢を倒したところで、袁紹は私に告白をしてきました。

・・・・・・・・。

何故、助けただけで、一足飛びにそういう事になるのでしょうか？

あつ、そうだった！

先程の言葉は、きつと聞き間違いです。

彼女居ない暦〓年齢の私は、とうとう幻聴が聞こえるようになったようです。

私は気を取り直して、袁紹を見ると顔を真っ赤にしクネクネと体を擦らせています。

えーと、何か嫌な予感がするので、早く、お爺々様とこの店を出ることにします。

ちょっと惜しいという気持ちがありますが、悪魔の誘惑に乗ったら

負けです。

明らかに、不幸になりそうです。

そうと決まれば善は急げです！

「お爺々様、暴漢は仰せの通り片付けました！後のことは、この店主に任せても問題はすです！早く、この店からでましょう！」

私は袁紹が現実に取り戻される前に、一刻も早く、この場を去りたかったので、お爺々様に語気を荒げて言いました。

「何をそんなに慌てておるのじゃ。まだ、料理が残っておるぞ。勿体ないではないか。儂も未だ、食い終わっておらぬ」

お爺々様は人の気も知らないで、飄々とした顔で私に言うと、チャーハンをレンゲで掬って食べていました。

お爺々様はこの状況を判っておられないのですか！

あなたの孫は今、非常にヤバイんですよ！

この天然クルクルパーの金髪娘に関わるのは危険なんです！

私は、あの「バトルジャンキー」孫策で手一杯なのです。

これで、「天然クルクルパーの金髪娘」袁紹が加わるなんて、地獄への片道切符を強制購入させられるようなものです。

将来、霸王様と対立することになります！

私の様な小市民が、三国志の英雄2人を同時に相手にするなんて精神衛生上良くないです。

「あ、あの……。その貴方。助けて下さってありがとうございます」

後から、今一番聞きたくない声が聞こえました。

聞こえないっ！

あー、聞こえない、聞こえないっ！

私は袁紹の声を掻き消そうと必死になりました。

「ま、まさかっ！私の所為でお怪我でもされたのですか？」

声音の変わった袁紹が、私の正面に回ってくると、不安な顔で私の顔を見てきました。

う、流石、綺麗です。

そんな目で私を見るな、惚れてまうやろー！

「は……。ははっ、怪我はしていないけど……」

私は袁紹と会話をしてしまいました。

「本当ですか？本当のことを仰ってくださいまし。お怪我をしているなら、当家の専属医を直ぐによびますわ。ちょっと、何してます

の！斗詩さん、屋敷に戻って医者連れてきなさい！」

あのー、袁紹さん。

文醜のことを忘れていないですか。

自分を庇って怪我をした文醜を忘れるのは酷いと思いました。

でも、袁紹ですからね・・・。

「は、はい、麗羽様畏まりました！あの、文ちゃんをお願いしますね！」

顔良は文醜が心配の様でしたが、いずれにせよ医者が必要だと思ったのか、食堂を足早に去っていた。

「あれ、猪々子さんそこでどうしてますの？ああ、足を挫いてらしたのよね・・・」

袁紹はバツが悪そうな顔をしていました。

「姫ー、アタイのことを忘れるなんて・・・。酷いよ」

文醜は呟いて、俯いていました。

「い、猪々子さん。忘れていたわけではないのですよ。オーホホホ」

袁紹は文醜を忘れていたことを誤摩化そうしていました。

なんてことですの。

彼の前で、恥をかいてしまいましたわ。

猪々子さんも、猪々子さんさんですわ。

もう少しを気を使ってくれてもよろしいじゃありませんのっ！

「おい、正宗、お前も気の利かぬ奴じゃな。その怪我したお嬢さんを介抱してやらんか！お嬢さんも、そこで立つたままなのもなんじゃ。空いている席に座わるとよい」

なんですのこの老人は、私に気安く声を掛けないでいただきたいですわ。

まあ、立ってるのも疲れますので、言う通りに空いている席に座って差し上げますわ。

あれ、さっき気になることを聞きましたわ！

確か、この老人は彼のことを真名らしきもので呼びましたわね。

このお方は彼のお爺々様ということですよわねっ！

オーホホホホ、これはきつと運命なのですわっ！

それより猪々子さん、家臣なのにどういふことですの！

彼に怪我の介抱をして貰った上、お姫様だっこされて、羨まします！

私もしてもらいたいですわ・・・。

私は彼と猪々子さんを恨みがましい目で見てしまいましたわ。

「あのお爺々様、この状況はなんでしょうか？」

私の横にはあの袁紹が陣取っています。

当初、介抱していた文醜を私の横に座らせようと思いました。

別に他意はないです。

ただ、面倒だっただけです。

それが袁紹の抗議によって、今に至るわけです・・・。

「立って話すのもなんじゃと思ったので。それより、正宗、さつさと残った料理を片付けぬか」

私は冷えて伸びたラーメンと冷えたチャーハンを啜る羽目になりました。

元とは言えば、お爺々様の所為ではないですか。

「あ、あの貴方のお名前をお聞きしてもよろしいですか？私は袁紹、字は本初。真名は麗羽です。麗羽とお呼びくださいまし」

袁紹が私に名前を聞いてきました。

真名を初対面の私に預けるなんて、袁紹はかなり変ですね。

私は真名を受け取れないと言おうかと思ったのだが、袁紹の期待の眼差しを見てしまい言えませんでした。

真名を預けられて、預けないというのは失礼です！

ええ、そうです！

私はヤケクソになんて、成っていませんよ！

「私は劉ヨウ、字は正札。真名は正宗です」

私は袁紹に慚然と言ってしまいました。

「わ、私と真名を交換するのはお嫌でしたでしょうか？」

私の態度が真名の交換を嫌々していると思ったようで、不安な顔つきで私を見ていました。

「い、いえ、先ほど食べたチャーハンが冷めて美味くなかっただけです」

私は少しズレた回答をしてしまいました。

「そうですの……。そうですわっ！ 正宗様！ 助けていただいたお礼に、当家の屋敷に招きいたしますわ。当家の料理人が腕によりを掛けて、お持て成しいたしますわ。」

「いえ、麗羽さん結構です。大したことはしていませんので」

私は麗羽にこれ以上関わり遭いたくなかったので、必死に断ろうとしました。

「そうじゃの。袁紹と言ったかの？」

「正宗様のお爺々様、私のことは麗羽と及びください」

「それは真名であろう。儂も呼んでよいのか」

「構いませんわ。正宗様のお爺々様ですもの」

「そうか……。なら、麗羽。その話は後日、折を見てにせぬかの。儂らも午後より予定があるのじゃ」

「お2人の事情も考えず、申し訳ありませんでしたわ……」

お爺々様の言葉に、麗羽は落ち込んでいました。

「まあ、そう落ち込むでない。儂も孫も暫く、洛陽に滞在するのでな。また、会う機会はあるうて。のう正宗？」

おい、お爺々様、あなたは何を言ってるんですか！

余計なことは言わないで下さい！

「本当ですよ、正宗様っ！」

麗羽は私の方を振り向き、私を期待に満ちた目で見つめてきました。

「いや、それは無理・・・」

会いたくないので、無理だと言おうとしたら、麗羽がつつすらと涙を浮かべていました。

「・・・そうですねっ！また、会えると思いますよ。はは、はは、は・・・」

「正宗様っ！麗羽は嬉しいですわっ！」

負けてしまいました・・・。

仕方ないじゃありませんか。

私、いままでモテたこと一度もないんですよ。

そんな私が、いくら頭は残念でも、容姿は美人な麗羽に泣かれて、それを突き放せる程、人として強くないです。

はは、ははははははは！

私はこの先どうなるのでしょうか？

このまま行くと私は戦乱の中に身を置くことになりそうです。

打倒、孫策を掲げている時点で私が戦乱に身を置くのは決定なのでしょうけど。

麗羽との出会いは、私の想定を超える程、危険な予感がしてきました。

間違いなく華琳との対決は避けられないと思います。

あの華琳ですよ！

天才である華琳に、努力してやっと秀才の私に勝てるわけないです。

ですが、私も諦めるわけにはいいかないです。

私にはハッピーライフを送るといふ悲願があるのです。

まだ、私には時間があります。

何としても破滅の人生を回避しなくてはいいけません。

私は絶対に生き残ってやります！

第14話 束の間の平和なひととき（前書き）

更新が遅れすみませんでした。

ヒロインは麗羽で決定になりました。

種馬一刀のようにハーレム化は避けようと思っています。

ごちゃごちゃしてきそうなので・・・。

微ハーレムはあるかもしれないです。

第14話 束の間の平和なひととき

麗羽との出会いから数ヶ月が過ぎようとしています。

あれから知ったのですが麗羽も同じ私塾に通っていることを知りました。

そして、麗羽の家臣、文醜、顔良と真名を交換しました。

文醜、顔良の真名はそれぞれ猪々子、斗詩だそうです。

猪々子からはアニキと呼ばれています。

私の戦う姿を見て、憧れているようです。

斗詩は猪々子の態度を注意していましたが、私は気にしなくてもいいと言いました。

「正宗様、申し訳ありません」

それでも、斗詩はやっぱり悪いと思ったのか、私に謝罪を言ってきました。

本当に、斗詩は苦勞人なんだなとつくづく思いました。

最近、私は将来に向けての青写真を想い描いています。

麗羽には将来、華琳の抑えになって貰おうと考えています。

しかし、今のままの麗羽では、史実通り以前に恋姫の原作通りに華琳に敗れると思います。

麗羽には、私が揚州を制覇するまでの抑えになって貰いたいと思っています。

それにここ数ヶ月の付き合いですが、麗羽に対して私は情を持ち始めています。

恋姫の原作通りに華琳に敗れても無事逃げられる確証は何もありません。

そもそも恋姫の原作に私の存在など居ませんでした。

存在しないはずのイレギュラーがどう影響するか気になります。

少なくとも麗羽には、華琳に敗れて死ぬようなことがないように予防線を引いておきたいです。

麗羽に必要なことは、文武の道を教え導く存在だと思います。

私にとってのお爺々様、都督のジジのような存在です。

ですが、麗羽は文武に全くの興味もないようです。

非力ながら、この私が麗羽を導こうと考えました。

最近の日課は、麗羽の家庭教師代わりです。

私塾で麗羽の勉強を見て上げ、放課後は、武術の鍛錬を教える上げ

ることにしました。

意外なことに、麗羽は嫌がると思いきや、喜んで受けてくれました。少し身が入っていないような気がします。最初の頃に比べれば、幾分ましになった気がします。

「正宗様、どうですか？」

「うーん、最初に比べたら、良くなったと思うよ」

現在、私は麗羽に武術の鍛錬をしている最中です。

「オーホホホホ、当然ですわ！」

この高笑いが無くなれば問題無しなんですが、麗羽のトレードマークと今では諦めています。

私が袁紹の家庭教師代わりになることで、将来、華琳に敗れることが無くなればいいのですが・・・。

ああ、そうでした。

私は将来、黄巾の乱までに、私設軍を創設しようと考えています。

いろいろとやらなければいけないことがあるのですが、手始めに人材探しから始めることにしました。

それで、軍の将官候補になる人材探しのために旅に出ようと考えています。

人材探しの部分は伏せて伝えていますが、旅に出ることは、お爺々様に相談しています。

父上達にはお爺々様に相談した後で、文を出しました。

その文には、お爺々様に添え文をして貰いました。

先日、返事が届いたのですが、15歳になったら、旅に出ても良いと書かれていました。

そのときは一度、故郷に立ち寄ろうと考えてみます。

本音は、もっと早く行動をしたかったのですが、そうは上手くいきませんでした。

「麗羽、私は15歳になったら、この洛陽を一度離れようと思う」
思い出したので、忘れないうちに麗羽に伝えておく事にしました。

「えっ！どういうことですか。正宗様」

麗羽は突拍子もなく、私が洛陽を離れると言ってきたので驚いています。

「前々から決めていたことなだけだね。見聞のために旅に出るんだよ」

「そ・・・そんな、正宗様は私を置いてくつもりですか」

麗羽は目を潤ませながら、私のことを見つめてきました。

「見聞のための旅だから、麗羽には危険だと・・・」

「なら、私、頑張りますわ！正宗様と旅をするために、今まで以上に勉強と武術を勤しんで頑張りますわ！ですから、私を置いて行くなんて言わないで下さいまし！」

私が言い終わる前に、麗羽は必死の形相で言い返してきました。

「旅といつても半年位だから」

私も長々と放浪の旅をするつもりはないです。

人材探しの地は、だいたいの目星を付けているつもりです。

「は、半年ですってっ！ひ、ひどいですわ・・・。正宗様は麗羽をそんな長い間ほったらかしにする気ですの！」

麗羽は狼狽し、ポロポロと涙を流しながら訴えてきます。

半年間は確かに長いけど、そこまで非難されることでしょうか。

「ま、正宗様、私、絶対に付いて行きますわ」

麗羽が私の服が破れそうな勢いで、しがみついてきました。

「わ、わかったよ。でも、旅に連れて行くとなると、中途半端な能力では足手まといになる。賊に殺される可能性だってあるから、私の指導もそれ相応に厳しくなるけどいいかい？」

麗羽に少し脅しをかけてみました。

実際、危険ですし……。

これで、麗羽も引き下がると思うのですが……。

「望むところですわ！正宗様と離れる位なら頑張って見せますことよ！」

麗羽は涙をハンカチで拭いながら、気合いの入った表情で応えてきました。

予想に反した行動でしたが、麗羽がやる気になってくれたことは、私にとっても嬉しいことです。

「……そうか。じゃあ、早速、今日から厳しく指導するよ。それじゃ、立ち会いをもう一度しようか」

「はい！正宗様」

その後、一刻程、立ち会いをした後、麗羽を家まで置くつて上げました。

麗羽の屋敷への道すがら、空に見えるのは綺麗な夕焼けでした。

第15話 姉上と正宗（前書き）

主人公の人材探しまでの旅まで、あと数話位かかると思います。
主人公の姉である劉岱は史実で袁紹とは凄く仲が良かったと言われるので、幼少期に接点を持たせたかったので、書いてしまいました。

第15話 姉上と正宗

仕事に忙殺され、弟の正宗と話をする暇もない。

そんな私が久方振りの休みというのに……。

正宗はどこに行ったのかしら。

「おお、燐ではないか。何をうろつろしておるのじゃ？」

背後から声を掛けられたので、振り向くとそこにはお爺々様が立っていた。

「お爺々様、正宗と話でもと思いましたが、姿が見えなくて……。正宗が洛陽に来て以来、仕事が忙しく会話らしい会話も出来てないので、今日こそはと意気込んでいたのですが……。」

結果は、空振りでした。

「正宗か……。多分、この時間なら、麗羽と稽古をしていると思うぞ。洛陽郊外の森に行くと言っておったな」

「麗羽とは誰です？初めて聞く名ですが……。正宗と仲の良い友達ですか？」

私は洛陽に来て間もない弟が既に友達を作っていたことに驚くとともに、そのことを知らない自分に少し寂しさを感じました。

「袁紹じゃよ。袁成殿の忘れ形見じゃ。それと燐、麗羽は真名じゃ

から気をつけよ」

「ご注意痛み入ります。袁紹というと、汝南袁氏の者ですね。私塾で仲良くなったのですか？」

袁紹という名を聞いて、私は複雑な気持ちになっていた。

袁紹と言えば、あまり良い噂を聞かない。

叔父の袁逢と袁隗に甘やかされて育ち、この洛陽では暗愚な人物で通っています。

そんな者と私の弟は関わっているのかと思うと、弟のことが不安になってきました。

「お爺々様、何を平然としておいでなのです。袁紹は如何に名門の出とはいえ、暗愚な人物です。そんな者との交流を何故、黙っておいでになったのですか」

私は、お爺々様に不満をぶつけました。

「暗愚だったの間違いではないのか？麗羽は本当に頑張っておると思うぞ。少しでも、正宗に釣り合える人物になりたいと思つての」

お爺々様は私の顔を怪訝な顔で見ていました。

何ですって、あの袁紹が正宗に釣り合えるように頑張っている？

それって……。

「も、もしかして、袁紹は正宗と恋仲なのですか？」

私の予想が外れくればと思いつつ、お爺々様に確認をとりました。

「僕はそう思っておるがの。あの2人は四六時中、一緒だからの。正宗は私塾で麗羽の勉強をみて、放課後は2人で武術の稽古をしておるみたいじゃしの。ちと、早い気もせんこともないが、微笑ましいものじゃ。燐よ麗羽の前で、暗愚など言うてやるなよ。あれだけ一生懸命なのじゃから過去のことはどうでもよかるうて」

お爺々様は好々爺然として表情で、私に言ってきました。

「な、何ですってえー！それは本当なのですか？お爺々様！」

私はお爺々様に詰め寄って、再度確認しました。

「急に五月蠅いではないか！燐、はしたないぞ」

お爺様は私の声が五月蠅かったのか、愚痴りました。

「それより、袁紹と恋仲というのは本当なのですか？」

私はお爺様の言葉を無視して言いました。

「じゃから、何度も言うておろうが……。ああ、正宗と麗羽は恋仲じゃ。それも麗羽の一目惚れのようじゃが。別によいではないか。家柄とて申し分ないじゃろうが」

お爺々様は面倒臭そうに私に応えてきました。

私の預かり知らないところで、こんなことが起こっていたなんて・・。

衝撃の事実だわ・・・。

お爺様の話では、袁紹は真面目に文武に励んでいるそうなんだけど・・。

そんなに簡単に人って変わるものなのかしら。

洛陽中で暗愚と言われた人物のことだけに、信じられませんでした。

「憐、そんなに心配なら、2人の稽古を見物にでも行けばよいではないか。面倒じゃが、儂が連れて行ってやる」

お爺様は私の不信な表情を読み取ったようで、弟と袁紹が居るところに案内してくれるそうです。

しかし、あのお爺様がこんなに好意的なんて、そんな袁紹は好人物なのかしら。

正直、想像が付かないわ・・・。

私とお爺様は弟と袁紹の稽古している場所に出向くことになりました。

「もう少し踏み込んで！」

「はい！」

私は今、麗羽と剣術の鍛錬をしています。

もちろん剣は木剣です。

私達は、私塾が終わって直ぐに、馬に乗ってこの鍛錬場に来ました。

最近、猪々子も鍛錬にときどき参加することがあります。

彼女の場合、食いが勝っているようで、ほぼ不参加です。

今日も、猪々子は良い店を見つけたと斗詩を連れだっていなくなりました。

2人とも主人を置いていくのはどうかなと思ったけど、麗羽は機嫌が良かったです。

「隙ありですわっ！正宗様！」

「うおおおっと！麗羽危ないじゃないか」

危うく頭に剣が当たるところでした。

「正宗様がボーーとしていらっしゃるのが悪いのですわ。いつも私に余所見をするなと仰っているじゃありませんか」

「あはははっ、そうだね。麗羽に一本取られたよ」

私は麗羽の言葉に、笑いがこみ上げてしまいました。

「うふふふっ！」

麗羽も私の笑いにつられて、笑いだしました。

「おお、何やら楽しそうじゃの、正宗」

私達の会話に入ってきた人物の声は、お爺々様のものでした。

「わざわざどうしましたのお爺々様。あら、その方はどなたですの？」

麗羽が先にお爺様に話しかけてきた。

「そうですよ、どうしたんですか」

私もそういつて、声のする方向に顔を向けるとお爺々様ともう1人女性が立っていました。

何処かで見たことのあるような気がするのですが……。

誰でしたっけ？

「あのお爺々様、その方はどなたです」

私はお爺々様に女性のことを聞きました。

「何を言つておる。お前の姉の劉岱じゃろうが。まあ、お前は小さ

い時以来、一度も会っておらぬ故、仕方ないかの。洛陽に来てからも憐が忙しくて会う暇もなかったしの」

「えー、姉上ですか？」

私の目の前の女性は、スレンダーで黒髪のボブカットが似合う大人な魅力を漂わせる凄い美人です。

小さいころの面影が若干ありますが、こんな美人になっていたなんて・・・。

「い、痛いっ！」

私が姉上をじっと見ていると麗羽が頬膨らませて、ご機嫌斜めでした。

「麗羽、痛いじゃないか」

「正宗様を見ていたら、何か無性に腹が立ちましたわ！」

「あなたが袁紹殿かしら。私は劉ヨウの姉の劉岱です」

私が麗羽は宥めようとしていると姉上がこちらに近づいて、麗羽に話かけてきました。

「正宗様のお姉様ですね。はじめまして、袁紹と申します。正宗様とは懇意にさせていただいております」

本当に、麗羽は変わったなと思いました。

たった、出会ってから数ヶ月しか立っていないけど、以前は、この挨拶すらできない子でした。

『オー——ホホホホ、私が名門の出の袁本初ですことよ！オー——ホホホホ！』

昔ならこういう挨拶をしたと思います。

姉上は麗羽の挨拶に驚いているようでした。

「それで姉上はどうして此处に？」

その後、私と麗羽は休憩を取ることにしました。

お爺々様と姉上も一緒に、寛げそうな場所に敷物を敷いてのんびりとしています。

「どうしてとは何なの。折角、暇が出来たので、弟と話でもしようと思ったのに……。正宗は楽しそうでいいわね」

姉上は機嫌が悪そうでした。

「そう、拗ねるでない。正宗と麗羽は遊んでいたわけではないのじやから」

「気になったんだけど、袁紹殿は何故、剣術なんてやっているのか

しら？」

「それは正宗様の見聞を広めるための旅にお供するためです」

「健気ね。お爺々様に聞いてはいたけど、なんで正宗、あなた旅にでるわけ？この洛陽でも十分に情報は集まるところだよ」

姉上は麗羽の言葉に、勝手に納得して、私に旅に出る理由を尋ねてきました。

「洛陽に入ってくる情報を見聞きするより、自分の目で見た方が良い経験となると思ったからです」

本当のことは言えなかったので、もっともらしいことを言いました。

「取って付けた様な言い方がちょっと気になるけど……。正宗、あなた本当に7歳なの？とても7歳の子供が考えることじゃないわ。普通、あなた位の年頃なら、遊ぶことに一生懸命なもの。お爺々様や父上達にあなたのことを聞かされたときは半信半疑だったけど……。こうやって対面すると実感するわね。じゃあ、最後に教えてくれるかしら。正宗は旅で、何を見たいのかしら？」

私の言葉が年相応とは思えないと言った後、私を見据えていいました。

「民の生活と地方での役人の姿を見たいと思っています」

「なぜ？」

「民の生活は飢饉や天災などで、窮乏しています。それにも関わら

ず重税を課し私腹を肥やす汚職役人がいます。私は彼らのことを目に焼き付けて置きたいのです。私は将来必ず、偉くなってみせます。そして、弱い立場の人々が安寧な生活が送れる世を作りたいと思っています」

「ふふっ、英雄願望というやつかしら。正宗、確かにあなたの言う通りよ。漢臣である私が口にしてはいけないことだらうけどね。今の宮中は売官と賄賂がはびこっているわ。それに、宦官の専横は見るに耐えないわ」

私を見つめる姉上は頬を綻ばせて優しい笑みをを見せていました。

「頭は良いと思っていたけど、想いは子供なのね。少し安心したわ。そうね、正宗は一度旅にでるのも良いと思うわ」

姉上は自分の中で、納得したようでした。

「それにしても袁紹殿には驚いたわね。袁紹殿、気を悪くされないでね。噂であなたが暗愚な人物と耳にしていたので、そんな人物と関わっている弟のことが心配だったの。でも、実際、袁紹殿に会ってそんな印象が全くなかったわ。本当にごめんなさい」

姉上は麗羽の方を見やると、頭を下げて謝っていました。

「正宗様のお姉様っ！頭をお上げくださいまし。以前の私は暗愚と言われても仕方なかったと思っていますもの」

麗羽は姉上が頭を下げてきたことに恐縮しているようでした。

「それでは私の気が済まないわ。あまり高い物は無理だけど、何か

欲しいものはない？」

姉上は麗羽の家が金持ちなので、金銭感覚がズレていると思って、値段の高い物は無理と予防線を引いていました。

「できれば、真名の交換をお願いできませんでしょうか？ 正宗様のお姉様と仲良くなりたいと思っています。よろしいでしょうか？」

「真名の交換？ そうね。正宗とも仲が良いみたいだし・・・、それに袁紹殿は噂とは全然違っていたようだし。良いわよ。私は劉岱、字は公山、真名は燐よ」

姉上は麗羽との真名交換

「私は袁紹、字は本初、真名は麗羽です。それと正宗様のお姉様には、殿ではなく呼び捨てで呼んでいただきたいです。私は燐お姉様と呼ばせていただいてもよろしいですか？」

「燐お姉様・・・。何か妹ができた気分ね。いいわよ、じゃあ麗羽、これからよろしくね」

「はい、燐お姉様、こちらこそよろしくですわ」

姉上と麗羽は和んでいました。

「まあ、一件落着じゃな。よかった、よかった」

お爺々様は姉上と麗羽が仲良くなったのを喜んでいました。

「正宗、旅に行くこと自体に文句はないわ。でも、ちゃんと麗羽の

ことを守って上げるのよ。麗羽は女の子なんだから、分かっているの？」

姉上は急に思いついたのか私にそう言ってきました。

「言われないでも分かっています。危なくなれば守ります。ですが、旅先では何が起こるかわからないのです。麗羽自身にも力をつけてもらわないと、もしもということがあります」

私は真剣な顔で姉上に言葉を返しました。

「燐お姉様、麗羽は正宗様の足手まといには成りたくはないですわ。だから、正宗様の指導を受けていますの」

麗羽は燐お姉様に抗議していました。

「何よ、私は麗羽のことを思って、言っただけなのに。それに麗羽は気負い過ぎよ。足手まといに成りたくないという気持ちは分かるけど、正宗に頼るときは頼りなさいね。そんなだと余計に危ない目に遭いかねないわ」

姉上は私と麗羽に不満を言うと、麗羽に対して助言をしていました。

「姉上にしては、いいことを言いますね」

「それはどういう意味かしらね。正宗！」

「ふふつ、2人とも仲が良いですね。姉上様にはご助言感謝いたしますわ。そのこと、心に留めおいておきますわ」

その後は、鍛錬を早めに切り上げ、姉上の奢りで4人で食事に行くことになりました。

第16話 火縄銃を我が手に

私は絡繰り師になろうと思います。

というのは冗談です。

将来のことを考えて、オーバーテクノロジーな武器を開発中です。

その武器の名は鉄砲です。

鉄砲の設計図は、私のあらゆることを知る能力で簡単に制作できました。

鉄砲のモデルは日本の戦国時代の武器である火縄銃です。

単に、火縄銃といっても生産地によって、外観が変わってきます。

私は仙台で生産されていた火縄銃である仙台筒の開発を行っています。

仙台筒の特徴は、大きめの銃床やストレートの八角銃身などに特徴がみられます。

見た目がかっこ良く感じたことが採用の決め事です。

火縄銃に使用する火縄は雨火縄にしようと思っています。

雨火縄は木綿を材料にし、塩硝をしみ込ませて、水に濡れても燃えるようになっています。

土砂降りで無い限り、火縄銃の使用に支障ありません。

いずれ揚州で使用するとなれば、この方が良いでしょう。

火薬の調合は試行錯誤しましたが、上手くいきました。

雨火縄も問題ないと思います。

問題は鉄砲の方なのです。

私には鍛冶の技術などありません。

それで鍛冶屋に頼もうとしたのですが、お金がありませんでした。

一度、鍛冶屋に足を運んだのですが、私の小遣いでは足りそうにありませんでした。

私の家は皇族といっても、前漢の皇族です。

後漢の皇帝とは、遠縁なので、名門といっても超セレブな麗羽の家のような経済力はないです。

その上、私の一族は清廉な人物が多いのです。

経済的に困窮はしていませんが、子供に大金を渡す程、裕福な家とは言いません。

私の叔父上などはよい例だと思います。

普段から、貧乏な格好をしているので、招待を受けた屋敷の家人に、門前で止められるような人です。

清廉すぎるのも問題だと思います。

私は金策先を考えましたが思い浮かぶはずもなく、麗羽に相談をすることにしました。

「これも内助の功というものですわ」

麗羽は気になさらないでくださいという表情で私に話してきました。

私は気になる言葉を耳にしましたが、仕方なく麗羽にお金を借りました。

何かヒモになった気分で、良い気持ちではありませんでした。

でも、麗羽以外に、理由を根掘り葉掘り聞いてこなそうな人物に心辺りがありませんし・・・。

麗羽には、必ず返済すると言ったのですが、笑顔で「いいですよ。私と政宗様との間で遠慮なんてなさらないでください」と言われました。

私は鉄砲の技術をできるだけ秘匿したかったので、全ての部品を一つの鍛冶屋に頼むのではなく、洛陽だけでなく、近隣の街の鍛冶屋

に小分けで依頼しました。

自作できそうな部品は、自分で制作しています。

最終的には、出来た部品を自分で組み立てる算段でいます。

日本でも火縄銃は戦術を大きく変えた武器です。

私の奥の手になるのは間違いないです。

孫策との戦までに、秘密裏に鉄砲隊を組織するつもりです。

そのため製造方法は秘匿にする必要があります。

こんなとき、李典が居てくれたらとつくづく思います。

旅に出たら必ず彼女を仲間に引き込むつもりです。

金ない、人材いないの私を悩ませているのが、砲身の部分です。

他の部品はまずまずの出来でした。

洛陽でもかなり腕の良い職人に頼んでいるのですが、上手くいきません。

この時代の技術では、鉄パイプの空洞のような均一な穴を開けるのは指南の技のようです。

お陰で、麗羽に金を無心するのが日課になりつつあります。

端から見たら、私は多分、ダメ男ですね。

今日も、日課となっている砲身を依頼している鍛冶屋に向かっていきます。

「親方いるかい。劉ヨウだけど空洞の空いた鉄の棒は出来ているかな」

私は後々のことを考え、砲身のことをこう呼んでいます。

「これは劉ヨウ様じゃないですか！良いところに気やしたね。依頼の品は出来ていますよ」

親方は自信ありげに私に言ってきました。

「本当かい。見せて貰ってもいいかな？」

私はまた失敗じゃないかと、思いながら親方から砲身を受け取り、品定めをしました。

.....

「親方、上手くできているじゃないか！」

「へへ、劉ヨウ様には随分と鼻厩にして貰ってます。ここらで決めねえと職人の沽券に関わりますよ。鑄造方法を少し変えてみたのが良かった見たいです」

「この出来なら問題無さそうだよ。早速帰って使わせて貰うよ！」

「しかし、劉ヨウ様はそんなものを何に使われるんです？随分、金を使わせちゃって何ですけど」

親方は私が砲身を何に使うのが気になるようです。

「これかい、これを使って絡繰りを作ろうと思ってね」

鉄砲も絡繰りの一種だと思います。

「へえー。劉ヨウ様は絡繰りに興味がおありだったんですか。全然知りませんでしたよ。それで何を作られるんです」

「えーと……。絡繰り人形でも作ろうかなと思っているんだ」

ついつさに嘘を言いました。

「絡繰りを作る方は変わった方が多いと聞いてましたが、劉ヨウ様も変わってらっしゃいますね」

「それは酷いな親方。まずは、こいつを試してから問題なければ依頼しようと思っているのだけど、これと同じものをもう一つ作れるかな？」

麗羽にも一丁作って上げようと思い、親方に尋ねました。

麗羽には私がダメ男ではないことを知っていて貰いたいですし、鉄砲は将来、彼女の助けになると思います。

「ええ、そりゃ問題ないですぜ」

私はそれから屋敷に帰り、麗羽の指導の合間を利用して、2週間掛けて、鉄砲を完成させました。

もちろん火縄も、鉄砲に必要な弾丸、火皿や火薬袋といった小物も準備済みです。

私は鉄砲を木綿袋に収納すると、それを肩に掛けて試し撃ちに人気の無い森に行くことにしました。

第17話 未来を知る者の告白

屋敷を出て洛陽の市街地に入ると麗羽とお供2人に声を掛けられました。

麗羽のお供は猪々子、斗詩です。

「アニキ、そんなに急いで、何処にいくのさ」

一番最初に口を開いたのは、猪々子でした。

猪々子は肉饅頭をこれでもかと詰めた紙袋を左手に抱えながら、肉饅頭を頬張っています。

よくそんなに食って、その体型を維持できるなと若干引いてしまいました。

「あ、ああ、ちょっと森で、武術の稽古をするつもりだよ」

咄嗟に応えました。

「へえ、じゃあアタイ達も一緒に稽古に参加するよ！最近のアニキは自宅に籠ることが多くて、アタイ達と付き合い悪いしさ。アニキに何も言わないけど、姫だった寂しがって・・・」

「猪々子さん！あなた、何を勝手なこと言っていますのっ！」

麗羽は慌てて、猪々子の言葉を制止しました。

「何言ってるんですか、姫。アニキが何かに熱中していて、一緒に居る時間が少ないって、言ってたじゃないですか」

「そ、それは……。私はもっと一緒に入れる時間が欲しいと思うただけですわ……」

麗羽は少し元氣無さげにボソリと話しました。

「姫ー。それを寂しがっているっていうんじゃないか」

「もう、文ちゃん」

最近、鉄砲の開発に熱中し過ぎて、麗羽と一緒に居る時間が減った様な気がします。

……。

少し考えた後、麗羽と一緒に鉄砲の試し撃ちに行くことにしました。

本当は、鉄砲を完成した後で、麗羽に見せたいと思っていました。

先程の麗羽と猪々子の会話を聞いて、初めて麗羽の気持ちに気付きました。

麗羽とは、鉄砲の開発が忙しくて、私塾や鍛錬以外の時間ではあまり一緒に入れなかったです。

普段、麗羽は私の前では特にそんな素振りを見せなかったので、彼女の気持ちを少しも気にしませんでした。

冷静に考えると麗羽がそう思うのも自然です。

いくら、鉄砲の開発に忙しかったとはいえ、守りたいと思っている麗羽のことをほったらかしにするというのは問題あります。

麗羽には自分の気持ちをはっきりと伝えようと思いました。

そう言えば、私は麗羽に告白らしいことをしていません。

麗羽からは告白を受けましたけど。

私がこれからの未来を知っていることも含めて話そうと思います。

信じてくれないかもしれないですが……。

麗羽の気持ちには、誠実に向かい合いたいです。

将来のことを考えれば、麗羽にだけは私の秘密を知っていて貰った方が良くないと思いました。

「麗羽、一緒に行かないかい大事な話があるんだ。猪々子と斗詩は今回は遠慮して貰えないかな」

私は意を決すると、麗羽に声を掛けました。

「えっ！ 正宗様？」

麗羽は私が考え込んでいたのに、突然、話しかけたので驚いたようでした。

「アニキ、流石っ！じゃあ、早速いこうぜ！」

猪々子、お前は話を聞いてたのか？

「もっつ！文ちゃん、何しているのよ！すいません。正宗様」

猪々子が意気揚々と歩を進めようとすると、斗詩が猪々子の片腕を掴み、進むのを止めました。

斗詩は猪々子の耳に口を近づけてボソボソと話していました。

何を話しているのやら……。

「あの、正宗様……。よろしかったんです？お忙しかったんじゃない……。それに大事な話って……」

麗羽は私の横に近づくと、申し訳なさそうな顔で私の顔を見ていました。

「麗羽が気にすることはないよ。それにさ、俺が忙しくしていたのは、自分の為だけど、麗羽の為でもあるから」

「私の為……？」

麗羽は意味が分からないのか不思議そうな顔をしています。

「そうだよ。だから……」

「アニキ、アタイ達はちょっと急用が出来たんだ。だから、アニキと姫の2人で行って来なよ」

「正宗様、そうしてください。文ちゃんと私は急用が出来ましたので、麗羽様とお二人で行ってらしてきてください」

言葉が続けようとしたら、猪々子と斗詩が私に話しかけてきました。猪々子は私の顔を見て、何やらニヤニヤしているが、何が話していたのでしょうか。

斗詩は物わかりが良く、助かります。

猪々子にはもう少し、斗詩のような気配りを持って欲しいと思いました。

「わかったよ2人とも。じゃあ、麗羽一緒に行こうか」

私は猪々子の態度に不自然さを感じましたが、麗羽と一緒に森の奥に行くことにしました。

私達はあれから数刻懸けて、森の中を進み、人気の無い見晴らしの良い場所に居ました。

私は100メートル程離れた場所に、鉄砲の的にちょうどいい木を見つけると、木綿袋に入れてある鉄砲を取り出しました。

ズズドオーン。

鉄砲を撃つ準備をした私は的の木の枝目掛けて、弾丸を放ち枝を落
としました。

銃声は静かな森の静寂を打ち破りました。

周囲に目を向けると銃声に驚いた山鳥が、一斉に飛び立っていました。

麗羽は私の行動を不思議そうに見ていましたが、私が鉄砲で枝を撃ち落としてからは、驚愕の顔で枝が落ちた場所とそれが元あった場所を交互に眺めていました。

初めて銃を撃った感想ですが、かなり体に衝撃がきますね。

麗羽に上げるのは、長筒ではなく、短筒にした方がいいかもしれな
いと思いました。

「何なんですか・・・？正宗様、どういふことが説明してください
まし」

「これであそこの木の枝を落としたのさ。麗羽から借りたお金で、
これを作っていたんだ」

そう言って、私は鉄砲を麗羽の目の前に差し出しました。

「正宗様、これは何なのですか？」

麗羽は私の顔と鉄砲を交互に見て聞いてきました。

「鉄砲という武器だよ。威力は抜群だよ。弓など玩具に等しくなる程のね。これを大量に生産して、兵士が持つことができれば、今までの戦の常識が覆るはずだよ。これからの私と麗羽が戦乱の世を生き抜く為に必要なものなんだ」

「戦乱の世ってなんですか？漢王朝が健在なのですよ。戦乱の世など来る訳がないではないですか。それなのに、何故、正宗様はこんな危険な物をお作りになられましたの」

麗羽は私の言葉に訝しい表情をしています。

これから麗羽に伝えることが本命なのですが、信じてくれるでしょうか？

「それは・・・、多分、信じれないと思うけど・・・。私が将来、戦乱の世が来ることを知っているからだよ・・・。」

これだけ聞くと多分、頭がおかしい人です。

これから話す内容を見ると想像以上に気持ちが重く感じました。

止めておけば良かったと今更ながら思っています。

「・・・。その話、続けて下さいませんか」

麗羽は一瞬、戸惑うような素振りでしたが、直ぐに真剣な表情で私に次を促しました。

私は転生前とその後、死んで転生する前に神様と出会った話から、今までに至るまでの話をしました。

もちろん、私が将来、孫策と対峙して破れ病没すること、麗羽が華琳に破れ全てを失うことも包み隠さず話しました。

「これで全部だけど・・・」

麗羽の顔を見ませんでした。

私を頭がおかしい人もしくは、麗羽と別れたくて変人を装っている
と思っっているかもしれないです。

「どうして、そんな大事なことを私に話してくださいましたの」

麗羽は淡々と話しました。

「私の言葉を信じてくれるのかい？」

私は麗羽の言葉尻から、私の言葉を信じているように思えました。

普通、信じれないと思います。

私は顔を上げると麗羽は、微笑んでいました。

「正宗様に驚かされるのは今更ですわよ。最初の出会いだって、普通じゃありませんでしたもの。それより、私に話してくださいさった理由をお聞かせくださいませんか？」

「それは、麗羽のことが好きだから・・・。将来、麗羽に不幸に成つてもらいたくなかったから・・・。それと麗羽とずっと一緒にいたい思つたからかな」

麗羽は少し驚いた顔をしましたが、平静を装うように言いました。

「聞こえませんわ。正宗様。もっと、大きな声で言ってくださいな
いと」

麗羽さん聞こえていると思うのですが・・・。

ああ、もう成るように成れ！

「麗羽、私は君のことが好きだ！」

私は恥ずかしいのを我慢して、精一杯の大きな声で麗羽に言いました。

恥ずかしい――！

前世では、一度も告白することがなかったので、恥ずかし過ぎます。

「ふふ、ふふふ、初めて好きだと言ってくださいましたね。私、ずっと不安でしたのよ。特に、最近は正宗様が他の事に心奪われているようでしたから」

麗羽は口を手で押さえながら、軽く笑っていましたが、目に涙を少し浮かべていました。

「正宗様、嬉しいです」

優しい顔で私を見つめてくれました。

第17話 未来を知る者の告白（後書き）

まず、第17話で告白をして、次話で主人公は麗羽に今後の方針も含め未来の知識の詳細を話します。

第18話 天下への野望

「私は将来、華琳さんと戦に敗れ、没落し放浪の旅をすることになりますのね」

正宗様から、私の悲惨な未来について教えていただきましたわ。

名門袁家の当主が宦官の孫に敗れるなどという恥辱を味わうなんて、正直、実感が湧きませんわね。

でも、正宗様が私に嘘をつかれるなんて信じられませんわ。

真実として受け入れるしかありませんわね。

正宗様も非業の死を遂げられる未来を知りながら、その未来を回避するために頑張っていたらしい。

私も負けてはいられませんわ。

正宗様に側に居て、恥ずかしくない人となりにならなければいけませんことよ。

悔しいですが、華琳さんは天才というのは認めますわ。

容姿と魅力は、群を抜いて、私が勝っていると思いますけど・・・。

「麗羽は華琳と面識があるのかい？」

正宗様は私が華琳さんと面識があることを驚いていますわね。

正宗様が華琳さんのことを真名で呼ぶことの方が気になりますわね。

「何故、正宗様が華琳さんことを真名で呼びますの」

私は猫の様な眼差しで、正宗様のことを見据えましたわ。

「洛陽に来る時に華琳に会ったって、話したじゃないか」

「それは聞きましたわ。でも、真名を交換したことは初耳ですよ。そのことは後ほど、詳しく説明していただきますわ」

「ああ、分かったよ」

正宗様、なんだかホッとしていますわね。

このことは念入りに聞いておく必要がありますわね。

私はそれから、正宗様の未来について説明を受けましたわ。

その中で、私は腹立たしいことを耳にしましたわ。

「正宗様は野蛮で凶暴な孫策という危険人物との戦に敗れ、落ち延びた先で病を患って死ぬ事になるんだしたわね。孫策はなんて野蛮人ですの。揚州牧の地位にあった正宗様を下級役人の分際で、我欲のために戦を仕掛けるなど、天下の逆賊ではありませんか！」

孫策という人物に私は生まれて初めて殺意を抱きましたわ。

正宗様が、将来、野蛮人の所為で、お辛い目に遭われるなんて許せ

ませんことよ！

「何故、もっと早く私に相談してくれませんでしたの？私は悲しいですわ。そんなに、私は頼りになりませんでしたの」

確かに、会った当時の私には、相談したいと思わないですわね・・・。

なんだか悲しく成ってきましたわ。

私は少し昔の自分の姿を思い浮かべ恥ずかしくなりました。

「麗羽。このことは親にも黙っていたことだから・・・。別に、麗羽だから黙っていた訳じゃないよ」

正宗様は、私が落ち込んでいると思ったのか、私を気遣うように話しかけてきました。

正宗様は、ご家族の誰にも未来の知識、神様からいただいた能力の話について話していないらしいですわ。

そこまで、私を信頼してくださっているのですね。

この麗羽は、正宗様となら、どのような苦難にも立ち向かって見せますことよ。

正宗様は、私のことを好きだと言ってくださいました。

正宗様が一番信頼できる人物である私。

正宗様が好きな人物である私。

.....。

これは間違いなく、私を生涯の伴侶と想ってくださいに違いありませんわ！

正宗様には悪いですが、私達はまだ子供ですよ。

でも、正宗様のお気持ちを悪し様にすることなんて、私には出来ませんわ！

.....。

そうですわ！

屋敷に帰りましたら、早速、叔父様にご報告しなくてはいけませんわ。

叔父様に頼んで、私達を許嫁の間柄にさせていただきますわ。

オーホホホホ、正宗様。

麗羽に全てお任せくださいませし。

「ちょっと、麗羽。大丈夫かい？」

正宗様が心配そうに私の顔を見上げていますわ。

「だ、大丈夫ですわ。少し、将来のことを考えていましたの」

私は正宗様に笑顔で返しましたわ。

「話を戻すけどいいかい。漢王朝は滅びる。このことは間違いない。その引き金になるのが、黄巾の乱と反董卓連合による洛陽制圧。この二つの大事で漢王朝は形式上は残るけど、実質は滅びる」

「形式上は残るけど、実質は滅びる？それはどういう意味ですの」

「言葉のままだよ。さっき話した大事で漢王朝の権威は地に落ちる。権威を失った王朝は滅んだも一緒だよ」

「2つの大事の1つ目は、民によって引き起こされた反乱なんだ。この反乱を官軍は自力で征伐できない。困った朝廷は、各地の群雄の力を借りて、やっと征伐するんだ。2つ目は、中央で権勢を握る董卓という諸侯に嫉妬した連中が、洛陽に大軍を率いて上洛する。この暴挙を最高権力者である皇帝は黙って見守ることしかできなかった。これを切っ掛けに、朝廷と皇帝の権威は地に落ちることになるんだよ。だけど、その権威は利用価値があるのさ。戦乱の世になったからといって、領土を奪いとるには、大義がいるんだよ。そのとき、漢王朝の権威が役に立つのさ。例えば、手にしたい領土の州牧に朝廷から任官して貰うことができれば、侵略行為の正当性の理由付けになるんだよ」

私は正宗様が語る内容に驚かされました。

確かに、そんなことが起これば漢王朝は権勢を失いますわね。

「正宗様は未来の知識を利用して、漢王朝を立て直そうと思わなかったのですか？漢王朝を立て直せば、戦乱が起きないで、正宗様も

私も没落し酷い目に遭う事もないように思いますわ」

私は思っていることを正宗様に質問しましたの。

「それは無理だろうね。漢王朝は腐り過ぎているんだよ。例えできたとしても、それは延命であって、立て直すことにはならないと思うよ。本気で立て直そうというのなら、中央は言うに及ばず、地方の汚職役人達を全て誅殺しないとイケないよ。漢王朝が弱体化する原因の発端である黄巾の乱は、別に権力者が反乱を起こしたんじゃない。圧政に苦しむ民が苦しみ耐えかねて起こした反乱なんだよ。そこまで民を追い込んでしたのは、他ならぬ漢王朝なんだよ」

正宗様の話を聞いて、漢王朝を立て直すのは無理だと感じましたわ。

それでも漢王朝が減びることが分かっているが、それを静観せざる負えないのは複雑な想いがありますわ。

「正宗様、これからどうしますの？」

私は戦乱の世をどうやって、生きて行くのか想像もつきませんわ。

正宗様の話では、私達にとって、戦乱の世は厳しいものとなるのでしょうから。

「私は大陸を統一するつもりだよ。華琳を下し、孫策を下し、並みいる諸侯を戦で敗る。戦乱が無くならない限り、私と麗羽が安心して暮らすなんて、夢のまた夢だよ。正直、最初は戦乱の世を生き残れば良いと思って、文武に励んでいたんだ。でも、麗羽と出会って、自分の事も大事だけど、君のことも守りたいと思ったんだよ。だから、鉄砲の開発もしていたんだ。少しでも、優位に戦乱の世を

生き抜く為にね。15歳になったら旅に出ると言ったのも、将来に備え人材を探すためだよ」

天下を統一するという正宗様は、その理由に私と正宗様が安心して暮らすためと仰っていましたわ。

正宗様の言葉は、自分本意な願いですが、そのように想っていただけける私は果報者だと思いましたわ。

まさか正宗様の旅を為さろうとしていた理由が、人材探しだったなんて・・・。

そんな前から、私のことを想ってくださったのですね。

私は正宗様の想いに応えるべく、彼と共に戦乱の世を生き残ることを決意しましたわ！

第18話 天下への野望（後書き）

次、とうとう主人公が旅に出ます。

第19話 旅立ち

私は15歳を迎え、当初の予定通り旅に出ることにしました。

この旅で私の人生が決まるといっても過言ではありません。

この時点で有名になっている武将や軍師をスカウトするのは厳しい
そうなので、未だ無名な人物を狙って行きます。

15歳の誕生日を迎える数ヶ月前に、両親から私の元に文が届きました。

文の内容は、旅の途中、山陽郡に必ず帰省するようにと書かれていました。

両親に言われるまでもなく、両親の元気な顔を見たかったので、そのつもりでした。

私の旅の同行者は、麗羽、猪々子、斗詩です。

麗羽はあれからも文武に励んで、名将とまではいきませんが、将としては十分な素養を身につけています。

多分、今の麗羽の能力は、恋姫の公孫賛と同程度だと思います。

麗羽も原作のような高飛車な態度がなくなり、家柄が低いからといって、見下すようなことは無くなりました。

私が時間を作って、街の子達と接する機会を幾度となく設けたのが

良かったでしょう。

『正宗様、何故、下々の者と付き合わねばなりませんの！』

麗羽は最初、街の子達と接することを嫌っていました。

しかし、自分より歳下の子供達の無邪気さに触れていくうちに、少しずつですが仲良くなっていきました。

今では街の子供達から「姉ちゃん」と呼ばれて慕われています。

そのことを麗羽も喜んでいるようでした。

麗羽は根は優しい子なので、切っ掛けさえあれば庶民と呼ばれる人々が同じ人間だと理解してくれると思っていました。

私はというと・・・。

いつのまにか麗羽と許嫁になってしまいました。

麗羽の叔父上で袁逢と名乗る人物が突然尋ねてきて、私のお爺々様に直談判をしてきました。

お爺々様は元々乗り気だったのか、袁逢殿の申し出を二つ返事で受けました。

その時の私の扱いは完全に空気でした。

普通は、当人である私に話すものじゃないですか？

許嫁の話が終わったかと思うと袁逢殿は、いきなり私の前に来ました。

『劉ヨウ殿、麗羽の事を頼みましたぞ！劉ヨウ殿のことは、毎日、麗羽から聞いております。麗羽が武術と勉学に励み出した時は、正直、驚きました。家庭教師を付けても意味が無かったあの子が・・・。劉ヨウ殿には、本当に感謝しております。これからは私以下、袁家の者を家族とさせて頂いてください。おお、思えば、れ、麗羽は哀れな子なのです。小さくして、親と死別をしましてな。その麗羽が初めて好きな男の子がいると打ち明けられ、驚きました。しかし、う、嬉しかった！れ、麗羽には幸せに成って欲しいのです。り、劉ヨウ殿、れ、麗羽のこと、く、くくれぐれも宜しくお願いいたしますぞ！』

袁逢殿は私の両肩をガシツと両手で押さえると、号泣しながら長々と麗羽のことを頼むと言ってきました。

あの時の袁逢殿の号泣姿に、私は引いてしまいました。

私はこれからもずっと麗羽と一緒に戦乱の世を生き抜くと誓ったのです。

あの時、袁逢殿に頼まれずとも、麗羽を守りたいという想いに変化などありません。

でも、あの時の袁逢殿の言葉で自覚を持つ事は出来た気がします。

袁逢殿は私と麗羽が旅に出る当日、態々見送りに来てくれました。

忙しい人なのに、麗羽のことがやっぱり心配なんですね。

それに比べ、私のお爺々様と姉上は・・・。

「蔵人達には、儂は元気じゃと伝えといてくれ」

「父上達には、元気でやっていると言えといてね」

もう少し、旅に出る私に対してという言葉があるように思います。

「普通、かわいい孫や弟が旅に出るといったら心配するものじゃないですか」

私は溜め息混じりにお爺々様と姉上に言いました。

「正宗の強さは規格外じゃから、心配いらぬじやろ。賊の方が逃げるところぞい」

「私もお爺々様の意見に同感。正宗なら心配ないわね。心配なのは逆に麗羽よね。許嫁なんだから、ちゃんと守ってあげなさいね」

この2人の言葉に私は意気消沈してしまいました。

「劉ヨウ殿、麗羽のこと確と頼みましたぞ。これは些少ですが、路銀の足しにでもして下され」

袁逢殿は私にずっしり重い袋を渡してきました。

「こつこつ物は受け取れませんよ」

この重さからして、かなりの金額です。

流石に、こんな大金は受け取れません。

路銀なら、地道に山賊狩りでもして、稼げばいいと思っています。

その方が、その土地の情報も手に入れやすいでしょうから。

「な、なんと！私の金など、受け取れないというのですか！ひ、酷すぎますぞ！私は劉ヨウ殿と麗羽の旅の助けにと持参したのですぞ！」

袁逢殿は号泣しながら、私に顔を近づけてきます。

ちょ、ちよつと袁逢殿、顔が近いです！

「叔父様、正宗様が困ってらっしゃいますわ。正宗様もここは叔父さまの顔を立ててくださいませんか？」

麗羽が袁逢殿との間に入ってくれました。

ふーっ助かりました。

「・・・ああ。分かったよ。袁逢殿、有り難く頂戴いたします」

「おおつ、受け取ってくださいますか！ささ、どうぞ遠慮なく受け取ってください」

袁逢殿は笑顔になり、私に饒別のお金を渡してきました。

「徒歩の旅はきついと思い、涼州産の馬の4頭用意しましたぞ。気に入ってくだされば嬉しいです」

袁逢殿は胸を叩いて、袁家の家人に馬を引かせてきました。

流石は、汝南袁氏といったところでしょうか・・・。

太っ腹ですね。

「わざわざ、涼州産の馬を用意していただかなくても普通の馬で十分でしたよ」

「何を仰せに成るか劉ヨウ殿！袁紹の夫になれる方にこれらの馬をお渡しできよう筈がございませんぞ。そんなことをしては、袁家の沽券に関わりますぞ」

まあ、歩きの旅は疲れると思ってたので、有り難くいただくと思います。

「袁逢殿、お心遣い感謝します」

「なんのなんの、これしきのこと。無事旅を終えますことを祈っておりますぞ」

「アニキ、姫ー。早く行きましょーうよ」

痺れを切らした猪々子が私と麗羽に声を掛けてきました。

「もうっ！文ちゃん、もう少し空気呼んでよ」

斗詩が猪々子に注意しています。

いつもの光景に今から本当に洛陽を立つのか疑ってしまいます。

「麗羽、そろそろ出発しようか」

私は気を取り直して、麗羽にいました。

「そうですね。猪々子さん、斗詩さん、出発しますわよ！」

麗羽は笑顔を私に向けて言うと、連れの二人組に声を掛けていました。

私達は見送りと別れを済ますと洛陽を出発しました。

第19話 旅立ち（後書き）

とうとう旅立ちです。

旅立ちまで長かったです。

これからが人材探しの旅です。

主人公は陳留を迂回して、エン州入りをします。

陳留を通ると面倒なことが起こりそうなので・・・。

第20話 正宗の軍師

私達は洛陽のある司隸州河南尹を北抜け、河内郡に入りりました。

私は今、袁逢殿が馬を用意してくれたことに感謝しています。

馬での旅は楽ですし速いです。

私はこの旅の荷物の中に、火縄銃を一丁持ってきています。

これを持ってきたのは、絡繰り好きの李典を懐柔するためです。

きつと、彼女は興味を引いてくれると思います。

「正宗様、何故、陳留ではなく河内ですの。正宗様のご両親は山陽群にいらっしゃるではありませんの。河内では方角が全然違うように思いますわ」

私の隣に馬を寄せてきた麗羽は、私に疑問を投げかけてきました。

「麗羽は私の旅の目的が人材探しであることを忘れていないかい。これから行く温県の孝敬里に、司馬懿という人物がいるはずだから、私の軍師として仕官してくれと頼みに行くのさ」

私は麗羽の方を向いて、淡々と最初の目的地について話しました。

司馬懿の出身地は、私の能力で直ぐ分かりました。

こっちの世界の司馬懿が男性なのか女性なのか分かりません。

恋姫世界は基本、英傑と呼ばれる人の多くが女性です。

そう考えると多分、女性じゃないでしょうか。

私は司馬懿をどうやって仕官して貰おうか悩んだ末に、彼女相手に小細工するだけ無理だと悟りました。

司馬懿は人の考えを読むことに長けた人物と情報から分かっています。

ならば、司馬懿に対して、自分の気持ちを素直に伝えた方が好印象を抱いてくれるかもしれないです。

その逆もあるかもしれないですが・・・。

深く考えたところで、妙案が浮かばないのでこの方法でいきます。

駄目でも、旅の帰路にもう一度訪ねます。

それでも駄目なら、司馬懿の元を何度でも仕官をしてくれるように足を運びます。

そういえば司馬懿を含め、司馬懿の兄弟は「司馬八達」と呼ばれていましたよね。

司馬懿の家柄もかなりの名門です。

私の家臣になってくれるでしょうか？

今、私は無位無官ですし・・・。

「司馬懿・・・。司馬家ということは名門ですわね。正宗様に相應しい家臣ですわね。それより、その司馬懿という人物の情報は例の力で手に入れましたの？」

「そうだよ。司馬懿が私の家臣になってくれるか分からないけどね」
「そんなことはありませんわ。きっと、正宗様の家臣になってくれますわよ」

麗羽の言葉は私の気持ちを察した訳ではないと思いますが、私にとつては慰めの言葉になりました。

「アニキー、今夜は孝敬里で美味しいもの沢山食べられるかな？」

猪々子は目を爛々と輝かせています。

孝敬里に上手いものがあるとは限らないです。

「急げばありつけると思うぞ。でも、このんびり移動していたら今夜は野宿だな」

私は猪々子の緊張感のない言葉に、適当に返しました。

「なら、アニキ、早くいこうぜ！」

猪々子は馬を急がせて、先行してしまいました。

やはり涼州産馬は普通の馬と違って、馬力が全然違いますね。

もう、あんなところに行っちゃってしまっています。

「あっ！ちよつと文ちゃん。待ってー」

斗詩は慌てて、猪々子の後を追っています。

私と麗羽も取り残されない様に急ぐとします。

「麗羽、猪々子が先行したから、早く後を追おう。斗詩だけだと、猪々子の抑えにならない」

「猪々子さんは本当に困ったものですわね。仕方ないですね。正宗様、急ぎましょう」

麗羽は指を眉間に当てて、想いに耽っていましたが、顔を上げ私に言ってきました。

私は麗羽に対し頷くと、麗羽と共に馬を走らせました。

私は未だ見ぬ孝敬里の地に胸を膨らませました。

今日もウザイ連中だった。

お前らみたいな豚どものに仕官なんかするわけない。

大体、母上も母上だ。

あの連中は売官で地位を買った連中で、民草から搾取することしか知らない。

どうせ裏では宦官どもと通じているに違いない。

アタシは誰とも関わりたくない。

母上が五月蠅いから、あの連中に会ってやったけど、いい加減にして欲しい。

アタシは今、いつも通り部屋に引き籠っている。

どいつもこいつも私に笑顔で接してくるけど、本音は恐れている。

一度、アタシが苛ついて睨みつけたら、アタシを見るあの目今でも忘れない。

あの連中は、私が将来きつと朝廷の高官になるはずと思っているみたい。

未来の高官の不興を買うと不味いと本気で思っている。

あの連中、頭がおかしいんじゃない。

アタシは官吏にもなっていないのに・・・。

だからこそ、あの連中は今の内に手なずけて置きたいのだろう。

私の才気が普通じゃないらしいから、友達だっていない。

近寄ってくるのは、私に媚を売ってくる打算的な連中ばかり……。

考えるだけで、虚しくなる。

アタシは好きでこの才を手に入れた訳じゃない。

もう、誰とも関わりたくない。

この部屋の中で静かに暮らして行ければ、それで良い。

母上もそのことを理解してくれないかな。

アタシが仕官したところで、その才覚からいずれ疎まれるようになるに決まっている。

自分より優れ過ぎている人物を部下に持つて、その人物を重用し続ける訳がない。

せいぜい利用されて切り捨てられるのが落ちだと思う。

かの高祖劉邦が元勲達を誅殺したようにね。

だから、アタシは仕官の話に興味なんてない。

こうやって、部屋に引きこもって、のんびり読書しているのが性に合っている。

こうしている時間だけがアタシにとって平穏なひととき。

第20話 正宗の軍師（後書き）

主人公の右腕となる軍師は、司馬懿で決定です。

第21話 軍師の母

私は孝敬里に着くと直ぐ、司馬防の屋敷を訪ねました。

麗羽達には今日泊まる宿を探しておいてもらうことにしました。

目的の司馬懿の屋敷は、街の人に聞いたら直ぐ分かりました。

司馬家の屋敷をいきなり訪ねたので、今日は司馬懿に面会できないと思いましたが、すんなり通されました。

召使いに屋敷内を案内され、応接室にいます。

暫くすると、妙齡の女性が部屋に入ってきました。

黒髪の長髪で、知的なスレンダー美人ですが、性格はかなり厳しそうに感じます。

「私が司馬防です。劉ヨウ殿と仰いましたね。確か、劉本殿のお孫様ですね」

彼女は私の前に座って、私に名乗りました。

司馬防は、司馬懿の母親であり、史実で華琳を尉に推挙した人物だったはずです。

「はい。司馬防様には、突然の訪問にも関わらず、わざわざ、ご面会の機会をいただきありがとうございます」

私は面会の機会を作ってくれたことへの感謝の気持ちを伝えました。

「お氣に為さることはありません。私も『山陽郡の麒麟児』がどう
いう人物か一度会ってみたいと思っていました」

「私の異名を何故知っておられるのですか？エン州ならまだしも、
ここ司隸州でも噂になっているのですか？」

私は「山陽郡の麒麟児」という異名があまり好きではないです。

小市民の私には大仰な異名は気が重くなります。

「いいえ、司馬家の情報網を通して知りました。あなたが幼少時よ
り化け物じみた強さで、山賊を討伐していたこともお聞きしており
ます」

司馬家の情報網って凄いですね。

猫耳軍師の情報網とどっちが上なのでしょう。

「劉ヨウ殿は武勇だけでなく、勉学にも励んでおられるそうですね」

「私はいったて頭の方は平凡な人間です。平凡なりに努力している
だけです。司馬防様のお子様のように優秀ではありません」

「ご謙遜なさらずとも良いですよ。己を知るのは、あなたが優秀
である証です。それで、わざわざ私の屋敷に來られた理由をお聞か
せ願えませんか？」

司馬防は私を褒めると、來訪の理由を尋ねてきました。

「私は今、旅をしています。この河内に入った際、司馬防様のご息女である司馬懿殿の話をお聞きしました。それで司馬懿殿にお会いし、私に仕官をして欲しいと頼みにきました」

「懿にですか？」

司馬防は訝しい表情をしています。

「はい。司馬懿殿に是非、私の右腕になって欲しいのです。私は、現在、無位無官の身です。しかし、いずれ必ず立身してみせます」

私は司馬防に自分の気持ちを真剣に伝えました。

「劉ヨウ殿が無位無官かどうかをとにかくいつつもりはありません。よりもよって懿ですか・・・」

司馬防は何故か難しい顔をしています。

「懿は博覧強記・才気煥発と巷で呼ばれるだけの才のある子です・・・。我が子の中で、最も優秀なことは事実です。お恥ずかしい話ですが、あの子は人見知りをする子でして、いつも部屋に引きこもっているのです」

司馬防は何とも言えない表情で言いました。

いつも部屋に引きこもっている？

司馬懿が引きこもりをしている？

史実では、曹操の誘いを断るために、病気を理由に出仕を拒否していた話は知っています。

それが引きこもりなんて、イメージが湧きません。

「引きこもっておられることはわかりました。その上で、司馬懿殿にお会いできませんか？身勝手なことで承知でお願いいたします。司馬懿殿に直接断られるのなら納得いきますが、会えないだけで諦めることなどできません」

私は必死に司馬防に掛け合いました。

この程度のことです。引く訳にはいきません。

私の将来が掛かっているのです。

どうしても会ってみせます。

「・・・わかりました。懿に伝えるだけは伝えましょう。少し部屋でお待ちいただけますか。」

「あ、ありがとうございます！」

司馬防が司馬懿に取り次いでくれることになりました。

「揚羽、聞こえますか？あなたに客人が来ています」

母上が私に客人が来たと言っている。

無視。

「客人の名は劉ヨウ殿といいます。」

劉ヨウ？

誰それ。

「通儒で有名な劉本どのお孫様です。あなたにどうしても会いたい
と屋敷に来られています」

劉本？

確か・・・、ああ。

・・・皇族の劉本ね。

その孫がここ河内まで来て、私に何の様な訳？

面倒臭いから無視。

「揚羽っ！引きこもっていないで出てきなさい！劉ヨウ殿はお前に
自分の右腕として仕官して欲しいとわざわざ来られているのですよ。
あなたが引きこもっている話をしましたが、直接会わせて欲しいと
仰っています。ここまで礼儀を尽くす人物を無碍に帰す気ですか！」

母上、五月蠅いわね！

アタシが頼んじやいないのよ！

勝手に来て、会いたいと言っているだけじゃない。

アタシに関係ないわよ。

「揚羽っ！」

はあ・・・わかったわよ、戸口で怒鳴らないでよ。

「母上、今、準備しますからしばらくお待ちしてください」

「・・・。わかりました。直ぐに準備するですよ」

私は劉ヨウという人物に会うことにしました。

劉本というあの『山陽郡の麒麟児』よね。

まあ、どうでもいい。

直ぐ、終わらして部屋に戻るわ。

アタシは面倒くさがりながら、身支度を整えた。

第21話 軍師の母（後書き）

次は、主人公と引きこもり司馬懿が初対面です。

第22話 正宗と軍師の邂逅

「初めまして、劉ヨウです。司馬懿殿にはわざわざ会っていただき感謝します」

今、この部屋に居るのは私と劉ヨウだけ。

母上が、劉ヨウに気を効かせのね。

いつも同席する母上が席を外すということは、母上が劉ヨウを気に入ったということね。

仕官の話だから、私と劉ヨウと一対一で話すのがいい。

どうせアタシは断るけどね。

「こちらこそ劉ヨウ殿にお会いできて嬉しいです」

私は笑顔で劉ヨウに返事をしました。

アタシは内心腹が立っていた。

人が部屋にこもって気持ちよく黄昏れていたというのに……。

こいつのお陰で……私の憩いの時間が奪われた。

劉ヨウはアタシより少し年上ね。

アタシに仕官しろと人の家まで、押し掛けてくるからどんな人物か

と思ったけど、見た目は普通ね。

でも、見た目とは裏腹に、強い覇気を感じる。

世間知らずの馬鹿かと思ったけど違うみたいね。

『山陽郡の麒麟児』と言われるだけのことはあるということね。

「それで劉ヨウ殿は私に、あなたの家臣になるように頼みにきたそうですね」

アタシはさっさと劉ヨウと話を済ませる為に本題に入った。

「はい。私はあなたに、私の右腕になって欲しいのです」

母上に聞いていたけど、率直すぎ。

普通、もう少し話を盛り上げてから、切り出すものよ。

とんだ変人だわね。

「申し訳・・・」

私が断りを入れようとしたら、劉ヨウは私の言葉を制止してきました。

「断るのであれば、まずは私の話をもっと少し聞いてからにしてくださいませんか？」

結局、あなたの右腕になれって話には変わらないでしょ。

聞く意味ある？

・・・いいわよ聞いてあげる。

後で、母上にくだくだと小言を言われるのも嫌だ。

劉ヨウの話聞いた上で、お前のボロを暴いてあげる。

少しは覇気を感じるから、それなりの人物なんでしょうけど、今までの連中とそう変わらないはず。

皇族だかなんか知らないけど、どうせ出世したい、権力欲しいとかの理由で、私を手駒にしたいだけでしょ。

うんざりしているのよね。

せいぜい、アタシにつまらない話を聞かせるがいい。

「わかりました。劉ヨウ殿の話聞かせていただきます」

「司馬懿殿ありがとうございます。私があなたを右腕として必要としているのは、私の夢の実現の為です」

「夢の実現ですか？」

ほら、早速来たわね。

さっさとボロを出しなさい。

「はい」

劉ヨウは一呼吸置いてから話を続けた。

「私には許嫁がいます。彼女の名は袁紹といいます。私は彼女と一つの約束をしました。それはこの大陸を統一することです」

大陸を統一？

こいつは本当の馬鹿じゃない？

漢王朝がこの大陸を治めているのに、何でお前が統一することができるのよ。

「大陸を統一するですか？漢王朝が健在なのにどうして、あなたが大陸を統一できるのです。それ以前に、この大陸は既に一つです。それとも劉ヨウ殿は皇帝を目指すつもりですか？如何に、劉ヨウ殿が皇族とはいえ、あなたの家柄は後漢の皇族とは遠縁です。皇帝になるには無理があります」

アタシは思いついた限りのことを劉ヨウに言った。

「そのようなことは承知しています。私は何も今とは言っていません」

アタシの反論に対し、劉ヨウは事も無げに、言い返してきた。

劉ヨウは何て言った？

『今とは言っていないせん』

確かにそう言った。

「それはどういう意味です？」

アタシは劉ヨウの言葉が気になった。

「いずれ大規模な農民の反乱が起きるでしょう。それを引き金に、漢王朝は衰退していきます。その結果、この大陸は諸侯達が血で血を洗う戦乱の世になるはずです。その時、私と袁紹は天下に覇を唱えるつもりです。私には優秀な人材が一人でも多く必要なのです。その人材の中で、あなたには私の右腕となり戦乱の世を共に歩んで欲しいのです」

こいつ何者なの・・・。

最近、賊の数が増え初めているのは知っていた。

その原因が朝廷の腐敗にあるということも。

私のところに訪ねてくる豚ども所為で、民が重税に喘いでいる。

最初は、税を払えない農民達が賊に身を落とした。

その賊に襲われた農民達が彼ら同様、賊に身を落とした。

負の連鎖は止まらない。

政が変わらない限り、この悲劇は止まることはない。

国の礎である民を蔑ろにした結果、最後に待っているのは国の崩壊。

劉ヨウの言っていることはあながち的外れなことではない。

アタシは劉ヨウの先見の目に驚いた。

劉ヨウのような考えを持っている者はまずいない。

いたとしても片手の指で数えられる程度だと思う。

私は反乱が起きるであろうと思っていた。

しかし、漢王朝が滅びるとは思っていない。

いや、滅びないと信じたいというのが正確ね。

それを劉ヨウは滅びると断言している。

私は劉ヨウの冷静に未来を見据えている姿勢に恐怖を覚えた。

私は生まれて初めて、人に恐怖を感じた。

普通の人間は都合の悪いことから目を背ける傾向にある。

だから、都合の良い情報だけに目を向け、目を曇らせてしまう。

個人差はあるが、私とはいえ劉ヨウのように感情を微塵も入れずに判断できない。

人だからこそ、そうなるのが自然なのだ。

劉ヨウはそれを実践している。

未来をその目で見ているかのように……。

今まで、私の才に恐怖を感じた連中のことを思い出した。

こんな想いだったのか……。

アタシは今、別の想いも抱いている。

アタシは自分を恐怖した連中とは違う。

劉ヨウへ恐怖を感じた事実だが、それ以上に、初めて自分を理解してくれるかもしれないと期待する気持ちがあった。

「何故、そう思われるのですか？」

アタシは確認の意味で戦乱の世になる理由を聞いた。

この劉ヨウという人物の言葉が妄言でないという確証を得るため。

「少し長くなりますがよろしいですか」

アタシは劉ヨウに肯定の意味で頷いた。

劉ヨウの話は民の窮状の話から始まり、途中まで、アタシの予想の範疇通りの話だった。

しかし、アタシの想像の域を超えた内容を劉ヨウから告げられた。

第23話 正宗の覚悟

私は司馬懿と話すうち彼女を引き込むには、私の秘密を明かす必要があると思いました。

司馬懿は三国志至上指折りの天才です。

特に外交交渉においては、三国志一だと思います。

外交交渉が得意な司馬懿は、相手の腹の内を見抜くことが得意なはずです。

私の秘密を最後まで、隠し通せるとは思えません。

その時になって告白するより、この場で告白した方が、彼女の信頼を得られると思います。

残念ながら、私には司馬懿程の知恵はないです。

だから、私には司馬懿の様な軍師は絶対に不可欠なのです。

私の武を戦場で、最大限に引き出してくれる軍師になりえるのは司馬懿だけと思っています。

この時代、他にも名軍師はいます。

しかし、その才を主君から警戒される程の軍師は司馬懿だけだと思います。

私は史実の曹操のような過ちを犯すつもりはないです。

司馬懿の子供が篡奪を働いたのも、曹操の司馬懿への過度な警戒が一因だと思います。

『みな私が謀反すると疑っていたので、私はいつもそのような疑いを懷かれぬよう注意を払ってきた』

司馬懿は死の間際にそう家族に告げていたそうです。

そんな話を聞かされれば、司馬懿の子供達が魏に対し良い感情を持つ訳がありません。

司馬懿が魏に対し忠節を尽くしていれば尚更だと思います。

私は司馬懿に全幅の信頼を預けるつもりです。

それは命を預けることに他なりません。

命を預ける者に隠し事をしていては、信頼を得られるはずがない。

是が非でも司馬懿を私の軍師にしたかった私は、麗羽に説明した今後の未来を司馬懿にも語りました。

私の話を司馬懿はただ黙って聞いていました。

司馬懿は感情を殺すのが上手いので、内心どう思っているかわかりません。

「正直、私はあなたが未来を知っていると言われても、それを確か

める術を持ちません。ですが、私が見通していた未来をあなたが知っていることは事実です」

司馬懿は私の目を真つすぐ見据えながら話しました。

「あなたが未来を知る者であるというなら、私の未来を教えてくださいませんか？」

司馬懿は私に自分の未来を教えて欲しいと頼んできました。

司馬懿は史実において有能な人物ですが主君に常に警戒され、最後は篡奪者のような扱いです。

その話もするべきなのでしょうが？

「私の将来は話しづらい内容なのですか？」

司馬懿は真剣な顔で聞いてきました。

「あなたは自分の未来を聞く覚悟はありますか？聞かなければ良かったと思えることもあるかもしれせんよ」

「既に、聞いております。それに劉ヨウ殿はご自分の未来を変えようとお思いなのでしょう。ならば、私も運命がどのようなものであると変えてみせます」

決意は固いようです。

私は司馬懿に全てを話しました。

彼女が曹操という人物に脅迫紛いの方法で仕官させられたこと。

その後、曹操の元で栄達をしていくこと。

しかし、司馬懿の才の高さ故、曹操に常に警戒されるようになること。

司馬懿の死後、彼女の子供2人が篡奪を計画すること。

司馬懿の孫が篡奪に成功させること。

その話を司馬懿は沈痛な顔で聞いていました。

「私の子供や孫は篡奪者になるのですね……。ふふ、人にその才を恐れられ、その才を主君の為に使い続けた挙げ句、その主君からは警戒される。想像は着いていたことはいえ酷い人生です。結局私は仕官したところで、報われぬのですね。いくら栄達しようと、これでは滑稽ではありませんか。劉ヨウ殿、私はあなたが知っておられる通り、幼少のころより才知溢れていました。その才の所為で私に心許せる者など居りません。部屋に引きもるようになったのも誰とも会わなければ嫌な想いをせずに済むと思ったからです。何故、劉ヨウ殿は私を右腕にしたいとお思いなのですか？」

「あなたが篡奪者となった訳ではない。篡奪者はあなたの子供とその孫です。なら、あなたの子供を篡奪者にならぬ様な人物に育てればいいだけです。それに篡奪が全て悪いとは思いません。仮に、君主が手の施し用のない患者であるなら、篡奪もまた正しいことです。愚者に治められる民が苦しむ姿を無視する方が悪と思います」

司馬懿は篡奪者なのではない。

少なくとも司馬懿自身は、魏に対し忠節を尽くしたと思います。

篡奪を計画したのは、あくまで彼女の子供のしたことです。

司馬懿は私の言葉を黙って聞いていました。

空気が重たいです。

どうすればいいでしょうか。

.....

このままでは司馬懿を軍師にすることに失敗します。

今回失敗しても、何度でも仕官交渉をするつもりでしたが、司馬懿が自分の将来に悲嘆して、引きこもりが酷くなるかもしれないです。

そうなれば、二度と司馬懿に会うことができなくなるかもしれないです。

この機会を逃したら、次が無いと思った私は、別の話をしようと考えました。

何か良い話はないでしょうか.....

司馬懿の気を引けそうな話.....

駄目です想いつきません。

そうです！

私の最終目標について語りましょう。

麗羽にまだ話していないので気が引けますが、司馬懿に話しましょう。

私はこの空気を払拭するために、司馬懿に自分の描く未来への青写真を話すことにしました。

第24話 正宗の子房

アタシは劉ヨウから聞いた自分の将来に悲嘆していた。

覚悟はしていたが、それでも酷い未来だった。

以前から、アタシは仕官しても碌な将来はないと思っていた。

いくら栄達しても、尽くした主君に警戒されるなんて虚しいだけだ。

私が想像していた未来より酷いものだった。

私の子供2人は篡奪を計画し、その孫が篡奪者になるそうだ。

劉ヨウは私が篡奪者じゃないと言っていたが、そう割り切れるものじゃない。

劉ヨウ達の未来は戦乱の世の倣いなので、私の場合とは違うと思う。

「袁紹は大陸の北を、私は大陸の南を制し、私と袁紹の子に天下を一つに纏める役目を託したいと思っています」

劉ヨウはいきなり話題を変えてきた。

「戦乱の世になれば、明日はどうなるかわからないと思います。仮に、私が道半ばにて死ぬ事があった場合、司馬懿殿には袁紹と共に、大陸を一つにして欲しいのです」

己が死すとも、袁紹が生き残る道を模索している訳ね。

袁紹が羨ましい。

劉ヨウはアタシに自らの大陸統一への道筋を話した。

伴侶とともに、北と南に別れて覇道を歩み、自分達の子に統一を任せる。

随分と奇抜な発想だと思う。

普通、思いつかない。

夫婦で天下を治めるといふ考えを持つ人間はいない。

袁紹は袁家の財力が強みとなるだろう。

希有な人材を集めることができるかが鍵だと思う。

袁紹という人物の王者の資質は未知数だ。

面識がないので、はつきり断言できないが、袁紹が北を制することは不可能じゃない。

問題は劉ヨウの方だ。

彼は皇族とはいえ、後漢の皇族という訳ではないので、強い権力も持っている訳じゃない。

劉ヨウには超えなければいけないことがある。

彼の家は名門であるし、司馬家の情報網によれば、彼自身は「山陽郡の麒麟児」の異名通り武官としては一流、文官としては一流とはいえないが優秀であることは間違いない。

彼が一大勢力になるには、今後、地盤を手に入れ、人材を手に入れる必要がある。

これは袁家の支援があれば上手くいくはず。

経済的にも袁家の支援が見込めるだろう。

しかし、何も無いところから、劉ヨウが強固な地盤を築くには時間がかかる。

それまで、戦乱の世が待ってくれるかということだ。

それに、戦乱の世になれば、不確定要素が多くなるだろう。

最終的にどうなるか分からない。

「劉ヨウ殿の想いはわかりました。あなたが大業を為すというなら、成し遂げられるという証拠を見せてくださいませんか？」

劉ヨウの言葉は、大志だと思うが、それは誰でも言えること。

それを成し遂げる気概がお前にあるか知りたい。

さあ、どうする気？

「私の言葉が信じれぬと仰るなら、これを受け取ってください。そ

して、私の側に居て、私が下らぬ妄言を吐く痴れ者と思われたら、これで私の命を奪ってください」

劉ヨウは思い詰めた顔をしていたかと思うと、彼の懷から短剣を取り出し、アタシに突き出してきた。

劉ヨウの表情は覚悟を決めている人間の者だった。

そうまでして私に仕官して欲しいわけね……。

「己の命を懸けてでも私の才が欲しいのですか？」

「はい、司馬懿殿でなければいけないのです」

「何故です？私でなくとも有能な人物は巨万と居ますよ」

そうアタシでなくても、有能な人物は居る。

「私は天下を統一したいと言った筈です。私と袁紹が安寧に暮らせる世を実現したいのです。だからといって、私は民を蔑ろにするような国にする気はないです。私が望む世は民が少しでも苦しめぬ国を作りたいのです。頑張った者が報われる世を作りたいのです。その為には、あなたのような天下一の才人がどうしても必要なのです」

天下統一の為に天下一の才人のアタシが必要ね。

アタシが天下一の才人かどうかは置いときましょう。

ふふ、ここまで本音で言ってくる人間には初めてあった。

天下を纏め上げる理由が自分の伴侶と安寧に暮らせる世を実現するため。

その上で、民達が苦しめぬ国を作りたい。

アハハハハ、自分達の安寧を実現するためとは笑えるわ。

でも、この劉ヨウという人物は、アタシの所に行脚してくる豚どものような欲に取り付かれているようには見えない。

彼のいう安寧とは別に贅沢がしたい、権力が欲しいとかじゃないと思う。

ただ、平和に日常を送りたい。

そのための国をつくりたいと思っているだと思っ。

ある意味贅沢じゃない。

良いんじゃない。

随分と庶民臭い王になるかもしれない。

それでいい。

アタシも平穩に日常を送れる生活を送りたい。

劉ヨウの言葉通り、いずれ戦乱になるとアタシも思っ。

そうなれば、いずれ好む好まざるに関係なく仕官をせざる負えなく

なる。

ならば、少しでも気の会いそうな人物の下で働く方が良い。

「劉ヨウ様、この司馬懿、仕官のお話を謹んでお受けいたします。これよりは私のことは揚羽とお呼びください」

アタシは劉ヨウ様に真名を預けて、頭を平伏し仕官の話を受けた。

「ほ、本当ですか？ありがとうございます」

「敬語は不要です。それに劉ヨウ様に仕官するには条件があります」

「条件？私にできることであれば何でもするよ」

劉ヨウ様、言質は取りましたよ。

「劉ヨウ様が納得していただければ問題はありません。劉ヨウ様は私に仰りましたね。自分が道半ばで、夢を実現できぬときは、袁紹殿と手を取り合って、国を統一して欲しい。それをやり遂げるには私があなたの家臣では不都合です。正室の座は袁紹殿に譲りますから、私をあなたの側室にしてください」

アタシは仕官の条件に、劉ヨウ様の妻にして欲しいと頼んだ。

劉ヨウ様に惚れた訳じゃない。

ただ、そうしたいと思っただけ。

それを惚れたというのかもしれない。

劉ヨウ様はご自分の運命を変えようとしている。

その彼と共に歩みたいと思ったことは確かなこと。

第24話 正宗の子房（後書き）

司馬懿が主人公の嫁宣言をしました。

麗羽はこのことを知りません。

波乱の予感がします。

多分、これ以上嫁は増えないと思います・・・。

第25話 正室と側室 前編

揚羽の仕官に成功した私は、一度、麗羽と合流することにしました。私が司馬家の屋敷を後にしようとしたら、揚羽も着いて行くと言いました。

揚羽を連れて行きたくなかったのですが、無理でした。

麗羽達を探す道すがら、揚羽に私の真名を預けました。

この後のことを考えると、私は憂鬱でした。

「正宗様。ご説明していただけますこと」

麗羽は不機嫌そうに、私のことを睨みつけてきました。

「えーと、麗羽さん、何から話しましょうか」

「全てですわ!」

「そう……ですか……」

私がいるのは今夜宿泊する宿の一室です。

この部屋には私と麗羽、猪々子、斗詩、そして、揚羽の5人です。

私と揚羽は床に正座させられ、残りの3人は麗羽を中心にテーブルに座っています。

私の心境は裁判官を前にした被告人の心境です。

剣呑とした空気が立ちこめています。

お気楽な猪々子もこの空気が気まずそうです。

「あのさ姫……。アタイ、ちょっとお腹が減ったからさ……」

「猪々子さん、何かありました」

麗羽は能面の表情で、猪々子に視線を送ります。

「ア……。ハハハ……。何もないです……」

口を閉じた猪々子は私に避難の目を送ってきます。

斗詩は私に「何とかしてください」オーラを放っています。

揚羽を見ると、私の隣で落ち着いた表情で、飄々と正座しています。

「麗羽、揚羽が仕官してくれたんだ」

言葉が何も思いつきません。

「揚羽……。司馬懿さんのことを真名で呼びますのね」

麗羽の額に青筋が現れています。

「それは、さっき聞きましたわ！私が聞きたいのはそんなことじゃありませんわ。正宗様は司馬懿さんに仕官を頼みに行かれたのですわよね？それが何故、司馬懿さんが正宗様の側室を宣言しているの？」

麗羽は能面の表情を私に向けてきました。

「揚羽が、私に仕官する条件に側室にして欲しいと言われたんだ」

「そうですよ……。そんな大切な話を私に相談もなしに決めましたのね」

麗羽の表情が能面から般若の表情に豹変しました。

ひいひいー、麗羽さん、落ち着きましょ。

私は麗羽の怒りに気圧され喋ることができなくなりました。

「袁紹殿、よろしいでしょうか？」

今まで、黙っていた揚羽が口を開き、麗羽に声を掛けました。

「黙りなさい！今、私は正宗様と話していますの！」

麗羽は揚羽に発言は認めぬと言わんばかりの迫力で言いました。

「黙りません。正宗様が一番愛している女性は袁紹殿であることは

事実です。私は正宗様の仕官の話を断るつもりでした。ですが、正宗様はこれを私に渡されたのです」

揚羽は私が渡した短剣を麗羽に差し出しました。

「何ですの……。これは正宗様が持っている物に似ていますわね」

麗羽は訝しい表情で短剣を見ていましたが、私の短剣と気づき疑問の表情を揚羽に向けました。

「はい、これは正宗様の短剣です。正宗様は自分に仕えて、仕えるに値しない人間なら、これで自分を殺してくれと私に仰りました。」

「な、何ですって！ 正宗様、本当ですの？」

麗羽は私が揚羽に言った内容に驚いているようです。

仕方無かったのです。

揚羽には自分の秘密を話してしまいました。

後には引けなかったのです。

もし、仕官を断られれば、私は揚羽を殺さなければいけませんでした。

「命を賭してまで、私を仕官させたかった理由を袁紹殿はお分かりですか？」

揚羽は麗羽に対し、話を続けました。

「・・・その理由は何ですか？」

麗羽は揚羽に対して、神妙な面持ちで聞きました。

「その前に、そちらの2人にはご退席していただけますか？」

揚羽は猪々子と斗詩に目を向け部屋から出て欲しいと言いました。

猪々子と斗詩は麗羽に視線を向けて、返事を待ちました。

麗羽は揚羽が私達にしか話せない内容を感じたのか、2人に退出を促しました。

「いいですね。二人とも街にでも行って、時間を潰してきなさい」

猪々子と斗詩は「助かった」という表情で部屋を出て行きました。

猪々子と斗詩が部屋を退出するのを確認した麗羽は揚羽に話の続きを促しました。

「早くお話しなさい」

「袁紹殿、あなたの為です。正宗様は袁紹殿と安寧に暮らせる世を実現したい。その為には私が必要と仰られていました」

その後、揚羽は麗羽に私の秘密を教えられたことを話しました。

麗羽は揚羽の言葉を黙って聞いていましたが、最後は驚き私の顔を見ました。

「私の為ですの……。正宗様の秘密を教え、自分の命を預けてま
で……。正宗様……。この司馬懿はそれ程の人物なのか？
それ以前に信頼できますの？」

麗羽は憑き物がとれたように、いつもの表情でした。

「ああ、揚羽は天下一の軍師だ。そして、將軍としても一流だ。だ
から、彼女には是が非でも私の右腕に成って欲しかったんだ。彼女
に私の秘密を話さなければ、彼女を仕官させることができないと思
った。私は将来、死にたくない。でも、麗羽が不幸になるのはもっ
と嫌だ」

私は俯いて麗羽に自分の気持ちを正直に告げた。

「正宗様……。卑怯ですわ……。そんなことを言われたら何も
言えませんわ……。」

麗羽は私に近づいてきて、片膝を着き、私の手を握りながら言いま
した。

第26話 正室と側室 後編

「司馬懿さん、正宗様の気持ちは分かりました。でも、それとあなたが側室になることと、どう繋がりますの？」

「それは、正宗様が描かれる、将来の戦略にあります。私はそれにより効率的にするために進言しただけです。」

「あなたが正宗様の側室になることができますの！」

麗羽は揚羽の言葉に怒りました。

結局、私がその後の話を継ぐことになりました。

私が話すのが筋です。

私としては揚羽を嫁にしくても良いと思うのですが・・・。

揚羽が側室にすることを仕官の条件にしている以上、受け入れるしかないでしょう。

しかし、揚羽は何故私なんかの側室になりたいのでしょうか。

揚羽は見た目はブスではないです。

ブスというより美人です。

引きこもり生活が長い為か肌は白磁のように白いです。

髪は司馬防讓りの黒髪の長髪、瞳の色は黒色のスレンダー美人です。

彼女が十二単を来たらかぐや姫に見えると思います。

私じゃなくて、もっと釣り合いそうなイケメンを探した方が良いでしょう。

私は揚羽が私の側室になりたい理由が理解できないと悩みながら、麗羽に説明をしました。

説明の内容は揚羽に話したものと同じです。

麗羽は私の計画を聞きながら、不機嫌になったり、笑顔になったり、目まぐるしく表情を変えていました。

「一応分かりましたわ。私と正宗様の子供に大陸統一をさせることには依存ありませんわ。でも！」

麗羽は機嫌良さそうに話していましたが、急に語気を強めました。

「私と正宗様が北と南の別行動で戦をしていくことは不満です！不満大有りですわ！司馬懿さんがなんで正宗様と一緒にですの。だいたい、司馬懿さん、あなた何ですの！仕官の条件に正宗様の側室の座を要求するなんて、人の足下を見過ぎじゃありませんの！正宗様の弱みにつけ込むなんて卑怯者ですわ！」

麗羽はやはり別行動で戦端を開くことと、揚羽が仕官の条件に側室の座を要求したことが気に入らない様でした。

私の戦略はやはり不味いかもしいです。

揚羽が側室の座を要求した時点で、この戦略は破綻しています。

揚羽が側室を要求しなければ、麗羽もしぶしぶながら要求を飲んでくれたと思います。

でも、揚羽の存在がそれを阻んでいます。

どうしたものでしょう。

揚羽を排除する訳にもいきません。

それに私の戦略にも問題点があるのは事実です。

それは戦力の分散です。

私と麗羽それぞれで諸侯として覇を唱え、北と南で戦端を開くので、連携を取るには、中原を早い段階で制覇する必要があります。

そうしないと二人とも共倒れする可能性があります。

華琳は絶対にその点を理解し、どんな手段をとっても連携を阻止してくると思います。

麗羽と離れていることを理由に、離間の計を施してくる可能性が高いです。

揚羽が私の軍師をすることになれば尚更です。

.....

戦略の練り直しが必要ですね。

やはり軍師ではない私では、この程度の戦略が関の山です。

自分では、良い線いつていると思いましたがど・・・。

揚羽がいるのだから、ここは揚羽に戦略の練り直しをお願いします。

「揚羽、麗羽が望まない以上、この戦略は破綻している。このままこの戦略を実行に移すと、敵につけ込まれる隙を作ってしまう。だから、揚羽は戦略の練り直しをしてくれないか？」

私は揚羽に言いました。

「確かにそうですね。これでは、自滅する可能性があります。わかりました私の方で戦略の練り直しをさせていただきます。ですが、正宗様。仕官の条件である側室の座の件は取り下げません」

揚羽は私の方を向いて、笑顔で応えました。

「なああんですって！正宗様は戦略を練り直すと仰っているのよ！司馬懿さんが正宗様の側室である必要がなんでありますの！」

麗羽が揚羽に詰め寄って怒っています。

「正宗様の戦略上、私が正宗様の側室になった方が利があると申しました。ですが、それだけで、私が側室の座を要求した訳ではありません。私が正宗様の妻に成りたかったからです」

揚羽は麗羽の怒りなど、どこ吹く風で淡々と話しました。

「正宗様も司馬懿さんに何か言ってくださいまし！」

麗羽は揚羽の態度に腹が立ったのか、私に向き直り加勢するように言ってきました。

「正宗様はお忘れではないですよ。私が仕官するなら、どんなことでもすると仰ったこと」

揚羽は笑顔で私に釘を刺してきました。

「あなたは黙っていなさい。正宗様は私の大切な方ですよ。そんなに結婚相手が欲しいのなら、街に出て男にでも声を掛ければ良いではありませんの！」

「誤解しないでください。私は痴女じゃありません。私も袁紹殿と同じく、正宗様でなくては納得できません。正室の座はお譲りしますので、ご安心してください」

麗羽と揚羽の言い合いが段々ヒートアップしてきました。

私は、このままだと不味いと思いました。

「二人とも落ち着いてくれ！」

私は言い合っている2人に大きな声で言いました。

麗羽と揚羽は言い合いを止めて私に向き直りました。

北郷一刀はあんな大勢の女性を侍らして、よく問題起きなかったものだな。

私は2人でも既に精神的に辛いです。

「揚羽に聞きたいんだが、何で私なんだい。良い男なら私以外にもっといと思うよ。私は皇族っていつても、裕福な方じゃない。姉上も郎中から出世しているんだ」

私は揚羽が私の側室になりたい理由を率直に聞いてみました。

「私は正宗様だから好きなのです。とはいっても……正直なところ、私は正宗様が好きなのか分からないです。恥ずかしながら私は人を好きになったことがないのです。ただ、正宗様と一緒に居たいと思っただけです。袁紹殿は不愉快でしょうが、お許しください」

揚羽は気恥ずかしそうに、私を顔を見ながら話してきました。

麗羽は不機嫌そうな表情だったが、揚羽の態度を見て、諦めたような表情になりました。

「……はあ、分かりましたわ……。ここは正室としての寛大さが必要ですのよね……。司馬懿さん、私の真名は麗羽です。あなたに真名を預けますわ。これからは二人で正宗様を支えますことよ」

麗羽はしづぶ揚羽を向いて言いました。

「麗羽殿、分つてくださり感謝いたします。私の真名は揚羽です。麗羽殿に真名をお預けいたします。」

「正宗様！これ以上側室を増やしたら、許しませんことよ！その時は、正宗様を刺して、私も一緒に死にますわ！」

麗羽は鬼の形相で私に向き直ると私を射殺さんばかりに睨みつけてきました。

私はただただ頷くことしかできませんでした。

第27話 楽進

旅の仲間に揚羽が加わり、私達は孝敬里を立ちました。

揚羽の馬は、涼州産馬ではありませんが、なかなかの駿馬でした。

揚羽が乗馬する時、心配しましたが杞憂に終わりました。

以外にも揚羽は乗馬が上手かったのです。

揚羽にそのことを告げると、揚羽は笑っていました。

揚羽は日中は引きこもりですが、夜な夜な馬に乗って遠出していたそうです。

揚羽曰く、気分転換だそうです。

特攻服を来ている揚羽の姿を想像しました。

髪を上げたら似合うなと一瞬思ったことは内緒です。

揚羽の母である司馬防殿は私に感謝し、凄く喜んでいました。

理由は言うまでもなく、揚羽の引きこもりが解消したことです。

『婚礼の日取りが決まりましたからお知らせください』

司馬防殿にこのことを言われたときは、ドキッしました。

司馬防殿に話を聞くと、揚羽が私の妻になることを話したそうです。

私は司馬防殿にそのときは改めてご挨拶に伺いますと言いました。

10日位掛けて、司隸州の河内郡を抜け、冀州の陽平郡を目指しています。

冀州に入ると途端に、賊と遭遇する機会が増えました。

私が賊に遅れを取るなど、ある訳がありません。

襲撃してきた賊はほぼ殲滅しました。

賊達に恐怖を与える為に、敢えて惨たらしく殺して、賊の何人かは半殺しにした上で見逃しました。

目的地への道すがら立ち寄った村が賊に襲撃されていたことも幾度となくありました。

もちろん賊達には、私の手で地獄を見せてやりました。

命乞いをしてくる賊が多かったですが、無慈悲に双天戟で串刺しにして上げました。

振雷・零式で賊を焼き払ったりもしました。

お陰で、大仰な異名が増えていました。

「地獄の獄吏」と呼ばれています。

この前、私が巷の「地獄の獄吏」と呼ばれている人物と知ると、村人から手厚い持てなしをうけました。

私は、前世が小市民なので、その持て成しに恐縮してしまい、宿賃を少し多く村人に渡しました。

それが逆に、私の風聞をより大きくしているようでした。

「正宗様、この際なので聞いてもよろしいですか？」

物思いに耽っていた私に、麗羽が突然話しかけてきました。

「麗羽、なんだい？」

「後、何人の人物を仕官させようと考えていますの？」

「計画では4人だよ。1人はこれから向かう衛国に住んでいる楽進。エン州泰山郡鉅平県の于禁。そして、エン州山陽郡鉅野県の李典。青州東萊郡黄県の太史慈。これで全てだよ。実際にそこに住んでいるかはわからないけど……。当てがないよりましだろ」

「正宗様。その者達は文官、武官いずれで待遇するつもりでございますか？」

揚羽が私にこれから探す4人をどう待遇するのかと聞いてきた。

「基本4人とも武官だよ。李典に関しては、工房を任せるつもりだよ」

「工房ですか？」

揚羽が疑問の顔を私に向ける。

「ああ、李典には武器工房を任せるつもりだ」

「その李典はどのような人物なのですか？」

麗羽が李典のことを聞いてきました。

「李典は便利なものを開発することの天才なんだ。その中で、私が一番期待しているのは武器開発だよ」

「武器ですの。・・・例の物に関係ありますか？」

麗羽は私の荷物袋を見て私に言いました。

「ああ、そうだよ」

「正宗様、例の物とは？」

揚羽が麗羽がいう「例の物」という言葉に飛びついてきました。

「揚羽にもおいおい見せるよ。この場では見せない」

私は声を小さくして、揚羽に言いました。

揚羽は私の言葉から、何か察したようで、それ以上何も言いませんでした。

恋姫の原作に置いて、李典の技術力の高さは判っています。

李典の技術力はチートです。

李典が仲間になれば、火縄銃の性能アップ、大量生産も夢ではないです。

武器開発工房や諜報部隊の本拠地を隠れ里みたいな場所に作るのが夢です。

隠れ里の候補はまだ考えていません。

これから麗羽と揚羽と一緒に考えていけばいいです。

その後も、私達は賊退治をしながら、目的地に向かいました。

この村が楽進の出身地のはずなのですが・・・。

随分、荒れています。

私達はすぐ村の中に入らず、外から村の様子を伺いました。

建物や外壁の壊れ方からして、災害とかではないと思います。

多分、賊の襲撃を受けたのでしょう。

本当にいつ見ても嫌な気持ちになります。

この村は賊に襲撃されてから、まだ、それ程日は立っていないです。

私達は楽進が住んでいる衛国に来たのですが、この有様です。

楽進は居るんでしょうか？

考えるだけ無駄だと思った私は、人を探すことにしました。

「アニキ、みんなで手分けして探そうぜ！」

猪々子が元気良く言ってきました。

普通はそうしますが、この村は賊の襲撃を受けた場所です。

賊が近くに絶対いないとも限らないので、集団行動を取った方がいいでしょう。

「駄目だ、賊が近くにいないとも限らないから、皆で行動しよう」

「ふーん、まあ、アニキが言うならそうするよ」

「生存者を探しましょう」

「そうですわね」

私達が村の中に入ると、1人の人物が近づいてきました。

銀髪で体中に傷があります。

私はその人物が楽進だと気付きました。

居てくれて安心しました。

「旅のお方、この村から直ぐ離れられた方がよろしいです。この村は、いつ賊の襲撃を受けるか判りません」

楽進は私達に言ってきました。

「賊ですか？尚更この村を立つ訳にはいかない」

私は馬から降りると、楽進の前に近づきました。

「そうですね。賊如き正宗様が退治してくださいますわ」

「アニキに任せておけば大丈夫だって！」

「そうですね。正宗様にお任せすれば問題ないです」

「正宗様が関わる段階で、賊が哀れに感じますね」

「あのあなた方は何者なのですか？」

賊の襲撃の話をして、落ち着いている私達に楽進は不思議そうに聞いてきました。

「私は劉ヨウ」

私が自分の名を名乗ろうとしたら、麗羽に遮られました。

「オーーホホホホ、この正宗様こそ、巷で『地獄の獄吏』と呼ばれている方ですよ」

麗羽さん、それを止めてくれません。

そうです。

私の異名が急速に広がった理由は、行く先々で、麗羽がこうやって派手に宣伝するからです。

麗羽に言わせれば、せっかく頑張っているのですから、知って貰わなければ損なそうです。

「『地獄の獄吏』！もしかして、賊達が恐怖する『地獄の獄吏』と呼ばれている劉ヨウ様ですか？」

地獄の獄吏―

その異名が随分広がっているみたいです。

「地獄の獄吏」なんて危険人物みたいな異名で呼ばれるくらいなら、「山陽郡の麒麟児」と呼ばれる方がいいです。

「あの『地獄の獄吏』というのは有名なんですか？」

私はその異名がどれだけ有名になっているのか、楽進に質問をしま

した。

「はい！劉ヨウ様が悪事を行った賊達に罰を与えて殺していると村々の人々は口々に言っています」

楽進は目をキラキラと輝かせて私を見えています。

変身ヒーローに憧れる子供みたいです。

その視線は私には辛いので、勘弁してください。

「それで、あなたのことは何と呼べばいいかな？」

これ以上、楽進の視線に耐えれそうになかった私は、楽進に名前を聞きました。

「申し訳ありません。私は楽進、字は文謙です」

「楽進殿、それでこの村には今何人くらい居るんだい」

「だいたい300人位です。その内60人位は負傷者です」

楽進は悔しそうな表情で、拳を強く握り絞めていました。

「傷の程度によるけど、私が治療するよ」

私のチート能力を使えば、傷は立ちどころに癒えます。

失った腕を再生とかは無理ですけど、切断した腕があれば引っ付けるのは問題ないです。

「劉ヨウ様、本当ですか！」

樂進は私に詰め寄ってきました。

「嘘を言ってもしょうがないでしょ。早く、怪我人のところに案内してくれないか」

「申し訳ありませんでした！こちらです！」

樂進は謝罪し、私を村の奥に案内しました。

第27話 楽進（後書き）

楽進、于禁、李典、太史慈で劉ヨウ四天王とか変でしょうか？

本音いうと楽進を親衛隊長、于禁、李典を後方支援部隊の隊長にして、？徳、高順、徐晃、太史慈で四天王にしたいです。

？徳は現実的に厳しいですよ。

少なくとも涼州が曹操の手に落ちてもしないと引き抜き難いそうです。

史実、三国志において忠義の人ですもんね。

第28話 三羽鳥

楽進に案内され怪我人を収容している一角に向かいました。

麗羽達には、私が治療中の間、村の外の様子を監視してもらうことにしました。

その際、集団行動を徹底するように言っておきました。

楽進の話ではいつ賊が来るかわからないような口ぶりだったので、用心に超したことはありません。

猪々子には独断行動は許さないと念を押しておきました。

「凧、その人達は誰や」

「凧ちゃん、その人達、誰なのー」

村の中を移動していると、何か聞き覚えのある声が楽進を呼んでいます。

声の聞こえる方向を見ると・・・。

そこには、李典と于禁が居ます。

私を不信な目で見ながら近づいてきます。

何故、楽進の住む村に2人が居るのでしょうか。

恋姫では、楽進とこの2人は同郷のようでした。

史実では同郷ではないです。

この世界はやはり恋姫の世界なので史実とは大分乖離しているみたいです。

史実は精々、参考程度に留めておいた方が良い気がしてきました。

姉上が死ぬのは、反董卓連合後なので、この話は麗羽と揚羽と追々話し合いましょう。

今はやるべきことがあります。

「真桜、沙和！失礼だぞ！この方は劉ヨウ様だ！」

私が考え事をしながら、李典と于禁を見ると楽進が2人に怒っていました。

「劉ヨウ？誰やそれ」

李典は私のことを知らないようです。

私は李典のことを狂わしい程に欲していたのに、彼女は私のことを何も知らないようです。

当然と言えば当然なのでしょうが、何故か哀しくなってきました。

「もう何言ってるの！劉ヨウ様っていったら、皇族なのに民の為に賊を倒している偉い人じゃないの！」

于禁は私のことに全く興味のない顔をしていましたが、楽進から私の名を聞いた途端、ミィハーな女子高生のような態度を取り出しました。

于禁・・・あなたは態度が豹変し過ぎです・・・。

「おーー、そうや！思い出したわ！あれやろ沙和。最近、『地獄の獄吏』と呼ばれている人やろ。そないな人に見えんな・・・」

李典は、本人を目の前にして、失礼なことを言ってきました。

「地獄の獄吏」というネーミングセンスを疑う異名は要りません。

「楽進殿、早く怪我人の治療がしたいのだが・・・」

私はこのまま延々と無駄話に付き合わされなくなかったので、楽進に話しかけました。

「も、申し訳ありません！劉ヨウ様！真桜、沙和。怪我人はどうなっているんだ？」

急に、李典と于禁は急に沈んだ顔になりました。

「医者が居らんから、かなりの人数が死んだわ・・・」

「そうなの。手分けして、頑張ったの。でも、傷が酷い人が多いから・・・」

「大丈夫だ2人とも。劉ヨウ様が治療してくださるんだ！」

楽進は元気な顔で李典と于禁に声をかけました。

「それ本当か！」

「本当なの！」

「ああ、そうだ」

「3人共、盛り上がるのは良いが早く案内してくれないか？話を聞いていが重傷の者が多いのだろう。幾ら、私でも死人の治療はできないよ」

私は興奮する楽進、李典、于禁に言いました。

「申し訳ありません・・・」

「すみません」

「ごめんなさいのー」

「早く治療したかったただだから、別に気にしないでいい」

私は3人にそういうと、今度こそ怪我人の収容場所に案内させました。

いつ見ても酷い光景です。

この光景を見ると、賊共に情けなど必要ないとつくづく思っています。

まず、彼らの治療が先決です。

賊どもを掃除するのはその後です。

「楽進殿、私は傷が重傷な者から優先して治療していきます。あなた達は、軽症の者の手当をお願いします」

「軽症の人達は私と真桜ちゃんで、もう見たのー」

「残つとるのは、アタシ達じゃ手に負えない、重傷の人ばかりや」

「そうか……。じゃあ、私が治療するまで、その重傷者の側にいて元気づけてやってくれ。多分、心細いだろうと思うから」

「はい判りました!」

「判ったで、まかしとき!」

「判ったの!」

私は早速治療に入りました。

私の服に血が付くのを避ける為に、上着を脱ぎました。

その後は、傷の酷い人から順に、私の能力で傷を治療していきました。

中には前腕を賊に切られている人もいました。

流石に、無くなった腕を再生させるのは無理なので、止血をしてやるのが精一杯でした。

それから何人治療したか判からなくなる程、怪我人を治療しました。治療の最後の辺りでは、楽進、李典、于禁も私の治療を見ていましたが、驚愕していました。

傷が動画の逆再生のように治っていくことに驚いたのだと思います。

私でも最初使ったときは、あまりの凄さに驚きました。

神様に感謝です。

あれから神様には会っていませんが、どうしているのでしょうか？

神様なので元気になっていると思います。

「あー。劉ヨウ様、お聞きしてもよろしいですか？」

「先程の治療のことかな？」

楽進、李典、于禁の3人は黙っています。

図星のようです。

「あの能力は神様から貰ったものだよ」

変に誤摩化すよりこの方が良いと思います。

別に、信じなくてもいいです。

「神様ですか？」

「神様？」

「神様なの？」

彼女達は素っ頓狂な声を上げています。

「信じられませんか？私はこの能力に感謝している。この能力のお陰で、罪の無い人達が苦しむのを少しでも救うことができる」

私は幼少の頃を思い出しながら言いました。

自分で言っておきながらなんですが、私の言葉は宗教家みたいだなと思いました。

そう言えば、黄巾の乱の首謀者である張角も何とかの水で病気を治していたらしいです。

この世界の張角はアイドルですけど・・・。

「・・・」

「劉ヨウ様、神様はないわ。確かに凄い能力やけど・・・。妖術とか仙術とちゃうの？」

「そうなのー。でも、凄いのー」

李典と于禁は私が冗談を言っていると思っている様です。

楽進だけは真剣な顔で私を見ていました。

まさか、私の言葉を信じてくれたのでしょうか？

それはないでしょう。

「信じていただかなくても構わないよ。それと一言言っておくよ。私の能力は妖術、仙術の類いではない」

私はそのことだけ告げると踵を返しました。

「ちよい、待ち劉ヨウ様！何処に行くんや」

「治療も終わったから、賊共を掃除しに行く。場所を教えて貰えるかな？」

「賊を直接襲撃しにいく気？そんなの自殺行為や！相手は1500やで」

「そうそう、劉ヨウ様。無理なのー」

李典と于禁は私が賊を襲撃しにいくのを止めようとします。

賊の数は1500。

私にとっては多いとはいえない人数です。

「その程度の人数なら、賊は全て皆殺しだよ」

「何言ってるのや！そんなの無理に決まっているやろ！」

「危ないのー！」

「2人ともやめないか！劉ヨウ様、私が賊が潜伏していると思う場所に案内します」

今まで、黙っていた風は私の道案内を勝手にしました。

「風まで、何いうてんのや！いくら地獄の獄吏と呼ばれている劉ヨウ様でも無理に決まってる！」

「風ちゃん、危ないから止めるのー！」

「じゃあ、二人は村が賊に襲撃されるのを黙って見過ごせと言うのか！劉ヨウ様に怪我人を治療して貰ったけど、今のこの村は賊の襲撃に耐えられる状況じゃない。次、賊に襲撃されたら全滅だ！」

「そ、それは・・・」

「・・・・・・・・」

2人は顔を俯いて黙ってしまいました。

「劉ヨウ様、本当に勝てるのですか？」

楽進は真剣な表情で私を見えています。

その瞳は闘志に燃えています。

良い表情です。

楽進は私と賊退治をする覚悟のようです。

「必ず勝つ！時には死地にてこそ、勝利を見いだせるものだよ。私の場合、敵地の方が好き勝手に暴られるので都合が良かっただよ」

私は楽進の顔を真剣な顔で見つめ返しました。

「わかった、わかった！ウチも一口乗るわ！後、村の皆に声を掛けよう！一緒に戦ってくれる人が居るかもしれん」

「しょうがないのー。風ちゃん達だけに任せておけないのー」

「二人とも良いのか？」

「良いも悪いも無いわ。二人してカッコ付けておいて、ウチ達だけ尻尾を丸めて逃げれるわけないやろ。村の人達を見捨てて行く程、白状やないわ。それに、地獄の獄吏の劉ヨウ様も居るんや。劉ヨウ様、頼りにしているからな！」

李典は、私にニカツと笑顔を向けてきました。

「アタシも本音は嫌なの！。でも、劉ヨウ様もいるし！。勝てるかも！」

「ありがとう二人とも・・・」

楽進は泣いていました。

二人が賊討伐に力を貸してくれたことが嬉しかったのだと思います。

私は3人のやり取りに、微笑みが漏れました。

一度、麗羽達と合流した後、賊退治に行きましょう。

これが終われば楽進、李典、于禁をスカウトします。

特に、李典、あなたには必ず私の陣営に入ってもらいます！

第29話 因果応報、狩られる者達 前編

麗羽達と合流した私達は賊が居ると思われる場所に向かおうとしました。

ですが、揚羽の提案で、待ち伏せをすることになりました。

揚羽に言わせると、賊が居るか確証できないのに、その場所に攻め入るなど下策だそうです。

やっぱり私はこの手の策謀は駄目です。

揚羽以外にも頼りになる軍師をもう1人獲得したいです。

揚羽は優秀ですが、今後、彼女1人では負担が大きくなると思います。

言い軍師はいないでしょうかね。

今、程？と郭嘉は旅に出ているでしょうか？

出ているのならスカウトして見るのも悪くないです。

麗羽に関しては、いずれ荀？が仕官するので問題ないです。

荀？も今の麗羽になら愛想を付かすことはないと思います。

後は、田豊、沮授、郭図、張？を探し出して仕官させればいいと思います。

「正宗様、何してますの？ 賊退治に行きますわよ」

麗羽が私に声を掛けてきました。

「ああ、分った。直ぐいく」

斗詩には、私達の荷物もあるので、村で留守番をして貰うことにしました。

村からは楽進、李典、沙和の3人以外に、50人が参加しました。

その50人の手には鎌や鍬、斧、弓などを持っています。

弓を持っているのは、その内10人位です。

農民なので、武器と呼べそうなのは弓くらいです。

李典のドリルはこの時代明らかに不自然です。

誰も違和感を覚えないのが理解できない。

「なんや私の螺旋槍をジツと見て。どないしたん劉ヨウ様？」

私が李典の武器を凝視していたので、彼女が声を掛けてきました。

「李典、君の武器が凄かったので見入ってしまったんだよ」

「見るもんが見ると判るもんやな。これ凄いやろ。ウチが作ったんやで。楽進も沙和もウチの武器の良さが判らんのや」

李典は自分の作成した武器が褒められたことを喜んでいました。

「実は私も武器を自前で作成しているんだよ」

「へー。劉ヨウ様の武器は槍やけど、それ自分で作ったん」

李典は私が手に持っている武器を興味深そうに見ている。

「これじゃないんだ。李典と一緒に絡繰の武器なんだよ。今は村に置いてきているので、この賊退治が終わったら見せてあげるよ」

「劉ヨウ様も絡繰りが好きなんっ！でも、なんでその武器を持ってこなかったん？」

「威力は抜群だけど、私が持ってきた分だけでは、効果が低いから持ってこなかった」

「ふーん、まあ、ええわ。じゃあ、帰ったらみせてなっ！楽しみやわー」

李典は上機嫌のようです。

楽進の話によると村が襲撃を受けたのは1週間程前の深夜で、賊は村の北側にある森から現れたそうです。

賊達は略奪を行った後、同じ森の中に戻って行ったそうです。

賊達は略奪した食料が無くなったら、また来ると言っていたそうです。

揚羽はその情報を元に、森の中を調査して、賊の通った場所を見つけました。

その場所に沿って罠を張ることになりました。

揚羽の罠の概略は、森に入った賊を火計で焼き殺し、それから逃れた賊を各個撃破するというものでした。

私はこの火計で気になることができました。

揚羽に、森を火計の場にして、今後の村人の生活に支障ないのかと聞きました。

揚羽は渋い顔をしていましたが、村人達は生活に困るかもしれないが、賊に怯える生活よりましだと口々に言いました。

村人達の同意を得、火計の準備に移ることにしました。

私と楽進、李典、于禁は火計の準備を揚羽達に任せ、揚羽の指示に従い、村側の森の入り口とは反対側に移動しました。

私達は身を隠せそうな岩場を見つけ、賊が来るのを待つことにしました。

私達の役目は火計で動揺した賊達を後方から襲撃することです。

揚羽の話では夜までには火計の準備が終わると言っていました。

私達は身を隠し、じっと監視していました。

夜になっても何もおこりません。

結局1日目は空振りに終わりました。

翌日の深夜になると、賊達が現れ続々と森の中に入っていました。

私達は火計の始まるのを今か今かと待ちました。

賊達が森の中に入りきつて、暫くして村がある方角の森の辺りが爛々と燃えていました。

夜なので火の明かりが良く目立ちます。

火計が始まったと思った私達は、森の中に入って行きました。

賊達が森の奥から必死な顔で逃げたしてきました。

私は双天戟を構え、振雷・零式を放ち賊達を焼き払いました。

その後も、賊を森の奥に押し込めるべく、振雷・零式を放ち続けました。

森の奥からは、火計に嵌った賊達の絶叫が聞こえます。

火計を初めて体験しました。

まさに、地獄です。

森の奥では火に逃げ遅れた人間が火だるまになって転げ回っています。

村側の森の入り口は完全に火が回っていると思います。

火の回りは早く、かなり近くまで回っているように思います。

賊達はまだ、こっちに向かって逃げてきます。

早く終わらせないと、私達まで火に巻き込まれます。

私は振雷・零式を放つのを止め、双天戟で賊達を殺すことにしました。

賊を草を刈る如く、止めを刺して行きます。

火計の恐怖に動揺している賊など敵ではありませんでした。

彼らは逃げることで頭が一杯で、武器など持っていないものが殆どです。

楽進、李典、于禁は私の強さに驚いています。

「何をつつ立っている！今、賊達を皆殺しにしなければ禍根を残すぞ！」

私は賊を殺す手を止めている3人に対し、怒声を浴びせました。

「すみません！」

「そうや、こいつらを退治せんと」

「ごめんなのー」

私の怒声に我に返った3人は、賊を殺すことに専念しました。

戦闘は数時間に涉りました。

火の手の回りが酷くなり、仕方なく森の外に出ようとしたとき、
人の男が逃げてくるのを見つけました。 1

「あいつ！賊の頭です！」

楽進はそう言うのと、その賊に向けて拳を向けました。

私はそれを制止し、賊の頭を生け捕りにしました。

「何故です。こいつは私達の村を襲撃して、村の者を殺戮したので
すよ」

楽進は私が止めに入ったことに反対しました。

「そうや、そうや」

「そいつは殺さなくちゃいけないのー」

李典、于禁も駆け寄ってきて、私に猛抗議します。

「こいつの扱いは私に任せてくれ」

私は3人に対し、有無を言わさないという態度で一言告げると、賊を気絶させ連れて行きました。

その後も、3人は私に賊の頭を殺させてくれと何度も抗議を言ってきました。

私は何も応えず、気絶した賊の頭を引きずっていきました。

第30話 因果応報、狩られる者達 後編

火計の策は成功に終わりました。

森を焼く炎が収まるのを待ちました。

炎が収まったのは、朝を迎え日が丁度、空の真上に昇るところでした。

私達は、日が燦っている森を抜けて行きました。

彼方此方に、火計に逃げ遅れた者達の焼死体がありました。

肉の焼ける臭いに吐き気がしました。

当分、肉を食べれそうにありません。

それは楽進、李典、于禁も同様の様でした。

先程まで、ずっと私に抗議していた元気はありません。

賊の頭が引き摺っているので、傷が痛いとい幾度となく暴れたので、その度に殴りつけて気絶させました。

麗羽達と合流したのは、昼過ぎでした。

麗羽達は森の在った場所の入り口にいました。

麗羽達も賊を5人生け捕っているようです。

これからが本番です。

賊共に自分のやってきたことを自覚させることにします。

楽進、李典、于禁の3人と今回の賊退治に参加した村の者達は私に不満の目を向けています。

まあ、賊の頭を生け捕りにしたままな訳ですからね。

私が当事者なら許せる訳がないです。

「もうしねえ、だから勘弁してくれ！」

賊の頭は、私に土下座をして、頭を地面に擦り付けてました。

無様に謝っていますが、こいつに反省の色などないと思います。

どうせ、舌の根も乾かない内に、また、他の村を襲うに決まっています。

「いいだろう。今回だけは見逃してやる」

私は冷めた目で、賊の頭を見て心情とは裏腹のことを言いました。

「へへ、ありがてえ」

顔を上げた賊の頭の表情を見て、不快を覚えましたが、感情を押し殺しました。

「どうしてですか！劉ヨウ様、こいつを見逃すなんて納得いきませ

ん！」

楽進は私に詰め寄りました。

「言いたいことはわかるが、この件については黙って居てくれ」

有無を言わさない目で楽進に言いました。

「くっ！」

李典と于禁も納得いかないようですが、私の迫力に気圧され黙っています。

麗羽達は私が何をするか分っているので、静観しています。

私は賊の頭に踵を返し、立ち去ろうとしました。

賊の頭は私が背を向けた瞬間、懷から暗器を取り出し投げつけました。

「死にやがれー！ー！あがつ！？」

暗器を避けた私は、賊の頭の胸に双天戟を突き立てました。

馬鹿な奴です。

私を殺せると思っていたのでしょうか？

逃げ切れるとも思っていたのでしょうか？

まあ、別にどちらでも構いません。

初めから賊の頭を見逃すつもりはありませんでした。

賊の頭が逃げようと、襲いかかってこようと殺すつもりでした。

希望を裏切られる想いを賊の頭に与えることに意味があるのです。

「私がお前を見逃すと思ったか？初めから見逃すつもりなどない！
どんな気分だ？今まで、貴様らも同様のことをやってきただろう！」

双天戟に力を込め、賊の頭の傷口を乱暴に広げました。

「ぎゃああああー！ー！痛でえええ、やめてくれー！ー！」

賊の頭は、傷を開かれる痛み絶叫しています。

「自分が逆の立場になったら、助けてくださいだとか？笑わせるな！」

双天戟を賊の頭から引き抜きました。

「や、や・・・止めてくれ・・・。し、死にたくねー！ー！ぎゃあ
あああー！ー！」

私は、体勢を立て直し、賊の頭の体中を凄まじい早さで槍を突き立てました。

「いっ！」

賊の頭は、口から血を吹き出し、壊れた案山子のように、地面に突

つ伏しました。

地面は賊の頭の大量の血で染まっていきました。

双天戟をひと振りし、槍にこびりついた血を払いました。

楽進、李典、于禁、そして村の人間は突然私が、賊の頭を蹴り殺しにしたので驚いていました。

縄に縛られている賊達は、私の行為を恐怖の表情で見えています。

私は賊達に槍を向け、数人を双天戟の餌食にしました。

餌食になった賊はボロ雑巾のように地面に倒れました。

「お前達、生きたいか？」

賊達に怜悯な目を向けました。

賊達はあまりの恐怖で喋れないようでしたが、必死に肯定の頷きをしました。

「そうか・・・じゃあ、助けてやる」

私はそう告げると、私は双天戟を地面に突き立て、賊達に素手で殴りつけました。

賊達が命乞いをしてきました。

私はそれを無視し、ひたすら殴りつけました。

賊達がボロボロになって、命乞いすら言わなく成ったのを確認して、私はその行為を止めました。

「望み通り助けてやる。次に、同じ真似を試みる。お前らの頭のように無惨に殺してやる！」

私は凄まじい殺気を賊達に放ちましたが、彼らはただただ恐怖に内震えていました。

「どうしてあんなことされたのですか？」

楽進は神妙な顔をして、私に質問してきました。

李典と于禁は私を恐がっているようですが、いきなり賊の頭を殺したことに興味があるようでした。

「これは私の自己満足です。賊はいつも人の命を弄びます。思いつきで、言うことを聞けば助けてやると言いながら、結局殺したりします。その言葉が嘘と分っていても、縊るしか無い人達がいるのです。だから、あの賊にも同じ思いを味遭わせたかったのです。それが理由です。賊は人であることを捨ててしまった者達……。哀しい話ですが、彼らに理解させるには、絶対的な力で蹂躪するしかない。助けた賊達は二度と賊稼業をしないでしょう」

私は虚しい想いを抱きながら、楽進に言いました。

「・・・・・・・・劉ヨウ様のお気持ち分るような気がします。申し訳ありませんでした」

楽進は私に頭を下げました。

「劉ヨウ様のこと見損なっただと思っただんやけど・・・堪忍な。でも、ちよつとキツかったわー。村のモン、劉ヨウ様に引いottaで」

「私も真桜ちゃんと一緒なの。劉ヨウ様ごめんなさいのー。流石、『地獄の獄吏』なのー」

于禁の謝罪は何か軽く感じます。

別に、謝ることでもないと思いますから、良いですけど・・・。

「これは私の自己満足だと言っただろ。私がやろうとしたことを黙っていたのは事実だ。だから、気にすることはない」

私は彼女達に優しく言いました。

第31話 三羽烏配下になる

賊退治を終えた私達は、1週間程この村に滞在することになりました。

村人達は村の再建に汗を流しています。

私達と楽進、李典、于禁も陣頭に立って頑張っていました。

ここ数日で、再建作業も起動に乗って来ているみたいです。

私が怪我人を治療したことで、怪我人の面倒を見る必要がなくなり、再建作業に集中できたことが多きいようです。

今日は暇ができたので、麗羽、揚羽と李典を連れ立って森があった場所にいます。

再建は私達以外と村人達に任せています。

ここに来た理由は、揚羽と李典に火縄銃を見せるためです。

「これがこの前、話していた武器だよ」

私は、荷物から火縄銃を取り出し、揚羽と李典に見せました。

「へえ、これかいな。これはどうやって使っん？」

「これがこの前仰っていたものですね。初めて見ました。これはどのように使うのですか？」

2人は各々にどう使用するのかと聞いてきました。

「こうやって使うのさ」

私は火縄銃を撃つ準備を手際良く行いました。

私も7歳の頃から、火縄銃を研究しているので、扱いは堂が入っています。

麗羽も私には及びませんが、火縄銃の扱いは問題ありません。

私は準備を終えると、的を探しました。

空に鳶が飛んでいるのを確認すると、私は鳶に照準を合わせました。

「揚羽、李典。見てな。今から、あの鳶を撃ち落とす」

「あれをですか？かなりの距離だと思いますが・・・」

「そやな・・・。あんな場所、弓でも落とせんとちゃう」

2人は半信半疑の様です。

私は2人の言葉に応えず、鳶に向けて弾丸を放ちました。

バーン――

火縄銃の発砲音が鳴ると共に、鳶が地面に向けて落ちて行きました。

「「なっ！」」

2人とも発砲音と同時に鶯が落ちたことに驚いたようです。

私の火縄銃の腕前はどうぞです。

「ホンマに撃ち落としおった！劉ヨウ様凄いやん！その絡繰りの構造どうなってるの」

李典は目をキラキラさせて、私が手に持つ火縄銃を見えています。

目論み通りです。

絡繰り好きの李典は、予想通りこの火縄銃に興味を持っています。

揚羽は驚いていましたが、私が李典を取り込もうとしていると察したかの何も言いませんでした。

「ああ、構わないよ。私は絡繰りが大好きなんだ。だが、私は手先が器用な方ではないんだ。設計と組立は私が自分でしたんだけど、部品に関しては、鍛冶屋に作らせたんだ。それで、私は絡繰り好きで、絡繰りの才能高い人物を探していたんだ。李典、君が良ければ、私に仕官して、一緒に洛陽に來ないかい。洛陽に歸るのは、今、旅の途中なので、もっと後になると思う。どうかな。考えて貰えないかな？」

「へえ、凄いやん。手先が不器用で、これだけのもんを作れるやろ。絡繰りへの愛を感じるで。劉ヨウ様、ええよ。仕官したるよ。洛陽は大陸の中心やし、珍しいもの仰山あると思う。こちらこそ渡りに船や。ウチの真名は真桜や。よろしゅうお願いします」

真桜は頭を下げてきました。

「本当かい！ありがとう！ありがとう！同じ絡繰りを愛す同士が出来て感激だよ！私の真名は正宗だ。よろしく頼むよ！」

真桜が仕官してくれたことに感激して、真桜の両手を握り、ブンブンと上下に降りました。

「そんなに喜ばれると恥ずかしいわ」

真桜は照れながら言いました。

「ちょっと、待ったのー！」

私と真桜が仕官の瞬間を喜んでいるときに、それを破る声が聞こえました。

私達が振り向くとそこには于禁が居ました。

于禁の後には、楽進がすまなそうに控えていました。

彼女達はいつから居たのでしょうか？

火縄銃は真桜だけに見せて置くつもりでしたが……。

見られた以上、仕方がないでしょう。

彼女達を仕官させる計画でしたし、私に仕官してくれるのなら口封じは必要ないです。

彼女達は正規軍ではなく、私がいずれ創設する諜報組織の方に配置するしかありません。

諜報組織といっても、諜報活動も担いますが、別に諜報専門という訳でないです。

組織の中に、最新兵器の扱いに慣れた部隊も作るつもりです。

于禁が少し心配ですが・・・。

まあ、何とかなるでしょう。

「真桜ちゃんだけ、狡いのー。私も洛陽に行きたいのー」

「劉ヨウ様、申し訳ありません。聞くつもりは無かったのです。真桜を探していたら、轟音が聞こえて、急いで向かった先に皆さんが居らして・・・」

于禁は一旦無視です。

楽進は火縄銃を撃つところは見ていないようです。

でも、火縄銃は見られた訳ですから、彼女達は諜報組織に所属させるのは決定です。

「そうか、于禁。じゃあ、君も洛陽に来るか。ただし、私に仕官してくれるのが条件だよ」

「劉ヨウ様、分ったのー。仕官すればお給金貰えるんですね」

ちゃっかりしています。

洛陽に戻ったら宮仕えをするつもりだったので、大丈夫でしょう。

それに袁逢殿にいただいた金があるので、この旅の間に支払う給金も問題ないと思います。

袁逢殿の餞別を貰っておいて正解でした。

「そや、正宗様、ウチも給金貰えるやろ」

くっ！

于禁・・・、お前の所為で・・・。

「あ、ああ、問題ない」

「やったのー。村に居ても欲しい物買えなかったけど、これで買えるのー。何にしようかなー」

「沙和、それよりまず正宗様に挨拶やろ！お世話になるやから、ちゃんとせなあかん！」

真桜が皮算用をする于禁に注意しました。

「あっ！そうだったのー。劉ヨウ様、私の真名は沙和なのー。よろしく願いますなのー」

「こちらこそよろしく。私の真名は正宗だ」

「わかったのー、正宗様」

「劉ヨウ様」

「うん？」

振り向くと楽進が神妙な顔で私を見ていました。

「一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

「正宗様は何故、真桜や沙和を仕官されたのでしょうか？」

何故、仕官させたか聞きたいのでしょうか。

彼女にしてみれば皇族が戦闘能力が高いとは言え村娘を仕官させるなどおかしいでしょう。

穿った見方をすれば、伽の相手として仕官させたとも思っているのかもしれないです。

楽進も仕官させるつもりなので、ここは真摯に応えないといけません。

「それは来る動乱の為だよ。動乱になれば人材は幾ら居ても足りない」

「動乱？」

楽進は私の答えが予想外だったようです。

本当に、私が真桜と沙和を伽の相手にさせようと思っていると思っていたようです。

私は女性を無理やり手込めにするような鬼畜ではないです。

元日本人の小市民の私にそんな真似できるわけないでしょう。

全く、心外です。

「そう動乱だ。この前の賊は規模が多かったと思わないか。今までの賊の規模は、精々数十人、多くて数百人。賊の数が多いということだ、それだけこの辺りの治安が悪いということだ。これがいずれ大陸全体に広がる。そして、世が乱れる。私はそのときに、力無き民を守る剣であり、盾である為にこうして旅をして人材を探している。真桜に関しては、絡繰りが得意な人物が欲しかったというのは嘘ではない」

私は楽進の目を見て、話せることを話しました。

「申し訳ありませんでした。私は」

私は楽進の言葉を制止しました。

「構わない。友を思つての行動だろ。その程度のこと、私は気にしないよ。それより、楽進、私に仕えてくれないかい？」

私は楽進は私の顔を真剣に見ていました。

「私であれば、陣営の末席にお加えください！私の真名は凧と申します」

決意を決めた楽進は私に対し、片膝をつき拱手して頭を足れました。

「よろしく頼む。私の真名は正宗だ」

良いです！

私は猛烈に感動しています。

これが主従の契りというものです。

沙和の軽薄な感じと、楽進は違います。

第32話 両親との再会

人材探しが予定より捗っています。

人材探しの予定が前倒しになりましたが油断は禁物です。

太史慈の仕官が上手くいき、余裕があれば幽州方面にも行きたいです。

凧、沙和、真桜の馬が無いので、両親のいる山陽郡に寄ることにしました。

父上に頼んで3頭程融通してもらおうと思っています。

駄目なら、都督のジジに借りればいいです。

太史慈が居る青州東萊郡黄県まで、歩きの者がいると旅の行程に支障がでると思いました。

「やっと、正宗様のお義父様とお義母様にお会いできますのね」

麗羽は凧達の村を経つときからこの調子です。

「私も8年振りの帰郷だから、楽しみしているんだ」

「正宗様のご両親はどのようなお方なのですか？」

揚羽が尋ねてきました。

「うーん。父上は清廉で、真面目で、模範的な文官を体現した人物だと思う。母上は優しくて芯の確りした人物だと思う」

「理想的な両親像を描いたような方々ですね。正宗様のご両親なので、もう少し変わった方なのかと思っておりました」

揚羽が何か失礼なことを言ってきました。

「揚羽さん。失礼ではありませんこと。いずれは、私達のお義父様とお義母様になりますのよ」

麗羽がムツとした表情をして、揚羽に説教しました。

「麗羽殿、別に、悪意があった訳ではありません。正宗様は他の士大夫の方に比べ、型破りな性格に見受けられたので、ご両親の影響かと思っただけです」

揚羽は麗羽の説教を気にするでもなく、淡々と言っていました。

「あら、そうでしたの。確かに、正宗様は型破りですわね。目的が有るとはいえ、今の時期、他国を見聞と称して旅をしていますもの。普通の士大夫は、中央官吏を目指してますもの」

「まあ、中央官吏の道については、この旅における正宗様の風聞と麗羽様のご実家に加え、私の母の口添えがあれば、問題ないと思います」

「オーホホホ、そんなこと当然ですことよ。この旅が終われば、正宗様も私も要職につけますわ。叔父様もその様に申しておりましたもの」

私はそんなこと初耳だけど・・・。

「私はそんなこと聞いていないけど、本当かい？」

私は麗羽に聞きました。

「え、あ、アハハハ、これは秘密の事でしたわ・・・」

麗羽はばつの悪そうな表情をしています。

「・・・仕方ありませんわね。叔父様は悪気はありませんのよ。正宗様が洛陽に戻ったら、驚かせたいと仰てましたの・・・」

「悪気がないのは分っているよ。だから、気にしなくてもいいよ」

「正宗様、この件は聞かなかったことにしてくださいまし。叔父様はきつと、元気を無くすと思いますもの」

麗羽は元氣のない顔で、袁逢殿のサプライズを知らないことにして欲しいと頼んできました。

私は麗羽の頼みを受け入れることにしました。

麗羽の頼みですし、袁逢殿は麗羽の肉親です。

それに、袁逢殿にはこの旅では色々と気を配ってくれました。

この位はしない罰が当たります。

「麗羽のたつての頼みなら、断れるはずないだろ。それに、袁逢殿にはお世話に成っているしね」

私は笑顔で快く応えました。

「正宗様、ありがとうございますわ」

麗羽は私の言葉を聞いて、元気な顔に戻りました。

あれから数日かけて、山陽郡の両親を訪ねました。

「お久しぶりです。父上、母上、健康そうで何よりです」

8年振りに見る父上、母上の顔は少し老けていました。

私も山陽郡を出る頃と違い、若武者の風貌で、貫禄も出てきた気がします。

賊狩りで実践を積んでいることも影響しているかもしれないです。

「正宗、お前の許嫁を紹介してくれないか？」

「それよ、それ！私は凄く楽しみにしていたのよ」

父上と母上は私が挨拶をするや否や、早く許嫁を紹介しろと急かしてきました。

「許嫁は二人います。1人は洛陽で、もう1人は旅の途中で巡り逢いました。麗羽、揚羽こちらに来てくれないか」

私は二人を手招きして呼びます。

「何、2人も居るのか！」

父上は驚いています。

「まあ、まあ、正宗は女誑しのようなね」

母上は私を見ながら、困った子ねと言わんばかりに頬に手を当てています。

「彼女が袁成殿の息女で、麗羽です」

「袁紹、字を本初、真名を麗羽と申します。正宗様のお義父様とお義母様にお会い出来て感激ですわ。お二人には、もっと早くお会いしたかったのですが、機会が無く申し訳ございませんでした」

麗羽は品のある所作でお辞儀をしました。

「彼女が司馬防殿の息女で、揚羽です」

私は次に揚羽を両親に紹介しました。

「お初にお目にかかります。司馬懿、字を仲達、真名を揚羽と申します。正宗様のお義父様とお義母様にお会い出来て感激でございます。正宗様には日頃より、お二方のことを聞かせていただいております」

ました。お二方のように仲睦まじい夫婦になりたいと思っております」

揚羽は完璧な返答を父上と母上に変えました。

揚羽にはもつと人間味のある所を表に出して欲しいです。

軍師として問題があるかもしれないです。

難しいところです。

でも、麗羽は案外、揚羽とは上手くやって行けそうな気がします。

私達が揚羽を理解していれば良いのでしょうか。

「二人とも美人ではないか。正宗、羨ましいぞ！ぎいあっ！」

父上が麗羽と揚羽を見て鼻を伸ばして褒めていると、父上が蛙を潰したような声を出しました。

「ふふふ、そうね。本当に綺麗な子達ね。あなた、後でちょっとお話をしましょうね」

母上が父上を見つめながら、笑顔で笑っています。

母上の笑顔は笑っているのですが怖いです。

「私は仕事があるから、明日にしてくれないかな」

父上が母上の顔を見て、顔を青ざめながら言いました。

「おおっ！正宗、母上と彼女達を中庭にでも案内して、お茶会でもしなさい。お前も久しぶりで、母上に話たいことがあるだろ」

母上に恐怖していた父上は私の顔を見て、母上を連れて行ってくれと目で合図をしてきました。

ここは父上を助けましょう。

「そうですね。父上もああいつていますし、久しぶりにお茶会でもして、皆で話でもしませんか？私も洛陽での話や旅の話をしたいです」

「・・・そうね。今日は、息子と私の娘と歓談でもしましょう。そうね、あなた達も一緒にいらっしやい。お茶会は人が多い方が楽しいわ」

母上は私の後に控えていた、猪々子、斗詩、凧、沙和、真桜に声を掛けました。

「アタイ達も良いんですか？」

猪々子が素直に聞きました。

「ええ、良いわよ。正宗と一緒に旅をしているのでしょ。全く知らない仲間じゃないのだから、そんな細かいことは気にしないの。そうでしょ、正宗」

母上は優しい笑顔を猪々子達に言いました。

「母上の言う通りだ。猪々子が遠慮するなんて、らしくないぞ」

「えー。酷いな、アニキ。それじゃ、アタイがいつも図々しいみたいじゃないか」

猪々子は口を尖らせて言いました。

「ふふふ、安心したわ正宗。良い友達が居るのね」

母上は私と猪々子のやり取りを見て楽しそうにしています。

私達はその後、母上とお茶会をしました。

父上は気付いたときには居なくなっていました。

「・・・ふふふ、しょうのない人ね・・・」

母上は軽く微笑んでいました。

第33話 母と嫁

「正宗に許嫁が出来たとお義父様に文をいただいた時は本当に驚いたわ。父上も凄く驚かれて、一時は政務を放って洛陽に行こうとしていたのよ」

母上は私と麗羽が許嫁に成った報せを受けた時の話をしてくれました。

今、私達は私の実家の屋敷の中庭で、お茶会を開いています。

久しぶりの我が家は良いです。

「あなた達の馴れ初めを聞きたいわ。話をしてくれるでしょ」

母上はニコニコと微笑んで、私と麗羽と揚羽の顔を順に見ました。

「今日は正宗に聞くより、麗羽ちゃんに聞こうかしらね。その次が揚羽ちゃんね」

私が母上に何か言おうとしたら、母上は私を無視しました。

「正宗。あなたは少し黙っていなさい。あなたに聞いてもどうせ肝心の所を話してくれないでしょ。早く麗羽ちゃん話して頂戴」

「え、はい。お義母様、正宗様とは……。食堂にて暴漢に襲われた処を助けていただいたのが切っ掛けでございました」

「ふふふふ。それで、それで」

母上は口元に手を隠し、ニヤニヤして麗羽の話に耳を傾けています。その後、いろいろな話を麗羽に根掘り葉掘り聞いていました。

揚羽、斗詩、凧、沙和、真桜は麗羽の話に興味を持ったのか母上と一緒に話に加わっていました。

猪々子は麗羽の話には興味を示さず、お菓子を黙々と食べていました。

猪々子らしいなと思っていると、母上は麗羽から揚羽に目標を変えたようです。

「麗羽ちゃんからは十分に聞いたわ。次は揚羽ちゃんの番よ」

「お義母様、私の番ですか？私と正宗様の馴れ初めを聞かれても面白くないと思います」

揚羽は突然、話を母上に降られても動ずることなく淡々と話しています。

「それはあなたがそう思っているだけで、私も同じとは限らないと思うわよ」

母上は揚羽のジャブを軽く受け流し、話をするように促しました。

「お義母様がそう仰るなら、分かりました」

「早く聞かせて頂戴」

母上は揚羽の話をワクワクした表情で聞いていました。

私と揚羽の馴れ初めは面白いものとは言えないと思います。

案の定、揚羽の話を聞いていた母上は段々、つまらないと思ったようです。

「正宗。綺麗な二人を妻にした割に、馴れ初めが地味すぎよ。もつと、熱く燃えるような恋愛をしていたのかと想像していたのに……。だいたい何なの。麗羽ちゃんと出会って以来、ずっと二人で文武に励んでいたなんて母上は悲しいわ。甲斐性の無い正宗に付き合う麗羽ちゃんが健気で可哀想すぎる。揚羽ちゃんとの出会いも微妙よね。引きこもりの彼女を自分に仕官するように熱心に説得する正宗に惚れたなんて……。揚羽ちゃん。ごめんなさいね。揚羽ちゃんは何も悪くないわ。悪いのは正宗」

母上は私達の馴れ初めを好き勝手に言いました。

「母上が聞きたいと仰ったのです。私達は別に話したくなどありませんでした。当人同士が納得しているのですから良いでしょう」

「正宗様。お義母様にそんなことを仰しゃってはいけませんわ。私はお義母様に私達のことを聞いて戴けて本当に嬉しいですわ。お義母様。私は正宗様と文武に励んで居いたことを苦と思ったことは一度もございませんのよ。恥ずかしい話ですが、私は正宗様にお会いするまで、馬鹿でしたの。周囲から白い目で見られていたことすら気付いていませんでしたの。その中で、正宗様はいつも私のことを思っって頑張ってくださったのです。私はそんな正宗様が大好きです」

麗羽は恥ずかしそうに頬を染めながら母上に自分の気持ちを伝えていました。

「お義母様。私も正宗様との出会いをつまらぬものとは思いません。正宗様は私に希望を与えてくださいました。私の周囲に近づく者は私を利用しようとする者達ばかりでした。その中で、正宗様は命を賭してもお前が欲しいと私に短剣を差し出されました。それ迄、正宗様のように純粋な気持ちをぶつけてきた方はいませんでした。私はこの方とずっと一緒に居たいと思いました。だからこそ、私は仕官を求められましたが妻にしてくださいと正宗様に要求いたしました」

揚羽は普段の淡々とした態度ではなく、感情の籠った表情で母上に自分の気持ちを伝えていました。

「ふふふふ、二人とも正宗のことが好きなのね。正宗は果報者ね。正宗。二人を必ず幸せにしないね。二人を不幸にしたら母上は許しませんからね」

母上は唐突に麗羽と揚羽の言葉を聞いて、嬉しそうに微笑んでいます。

「麗羽さんと揚羽さん。正宗のこと頼みます。この子は一人で何もかも抱える悪い癖があります。私や夫には言えないことでもあなた達になら素直に話せるかもしれない」

母上は麗羽と揚羽に頭を下げ、私を頼むと言いました。

まだ、婚礼は先なのに今言う事でもないように思います。

麗羽と揚羽は母上の突然の行動に驚いています。

「お、お義母様。頭をお上げください。もとより私は正宗様をお支えするつもりです。私の一番大切な方ですもの」

「お義母様。麗羽殿の仰る通りです。私達は常に正宗様と共にあります。正宗様に嫌われようと離れるつもりはございません」

二人とも神妙な面持ちで母上に応えていました。

「本当に良い子達ね。正宗には勿体ない位……」

母上は麗羽と揚羽を見つめながら言いました。

「麗羽ちゃんと揚羽ちゃん。今日の夕飯は一緒に作らないかしら。正宗の好物も知りたいんじゃない」

母上は二人に夕飯を一緒に作らないかと誘っています。

「是非、参加させてください」

「正宗様の好物とは興味深いです。私も参加させてください。料理は得意ではないので、ご指導お願いいたします」

母上も麗羽と揚羽に打ち解けているような気がします。

母上と二人が仲良くなってきて、何か嬉しいです。

私は母上と麗羽と揚羽を交互に見ていると自然に微笑んでいました。

第34話 一家団樂。父上はエスケープ

今夜は母上の手料理を十二分に堪能しました。

母上の手料理は最高でした。

猪々子はガツガツと食事に勢を出しています。

「斗詩。そっちの豚の丸焼きを取ってよ。ああ、それとスープも」

「文ちゃん。もう少しゆっくり食べなよ」

斗詩が猪々子に落ち着いて食べるように注意していますが、猪々子は食べることに夢中です。

余っても勿体ないので食欲旺盛なのは構わないです。

凧、沙和、真桜はグループになって、楽しそうに会話しながら食事を楽しんでいるようです。

本当にあの3人は仲が良いなと思いました。

母上と一緒に夕食の用意をしていた麗羽と揚羽は、私の為に食後の甘味を用意してくれました。

二人が用意してくれたのは、杏仁豆腐です。

私は杏仁豆腐が大好きです。

麗羽と8年来の付き合いですが、料理をしているのを見た事がありません。

その麗羽が料理した杏仁豆腐なので、少し不安がありました。

見た目は全く問題ありません。

私は一口だけ杏仁豆腐を口に運びました。

凄く不味いです。

母上の絶品料理を食べて至福の一時を味わっていた私を一気に現実に戻してくれました。

条件反射で吐こうとしましたが、できませんでした。

麗羽が私を涙目で見ていました。

「正宗様。美味しくありませんのね」

「はは・・・・・・・・。不味い分けないじゃないか」

私は後に引けなくなりました。

「正宗様。無理を為されなくてもいいんですよ。私の料理が美味しいはありませんもの・・・・・・・・」

麗羽はすっかり元気を無くし、涙目でしょんぼりと俯いています。

母上を見やると満面の笑みで無言の圧力をしてきました。

食べれば良いんでしょう！

食べますよ！

私は自棄になり一気に杏仁豆腐を食べました。

オエエエエー！。

不味い！

なんて不味いんだ！

麗羽が作ったものでなければ料理した奴を斬り殺しています。

「麗羽。美味しかったよ」

私は吐きそうなのを気合いで克服し、麗羽に甘味の感想を言いました。

「・・・本当ですか？無理に美味しいだなんて言わないでくださいまし」

麗羽は私の感想を素直に受けようとしません。

「本当だよ。麗羽が作ってくれた料理を美味しくないなんて思う訳ないだろ」

「本当にですね。正宗様。私の作った杏仁豆腐は本当に美味しいんですのねっ！」

涙目だった麗羽は急に元気になりました。

「正宗様。実は杏仁豆腐を沢山作りましたの。好きなだけ食べてくださいまし」

麗羽は鍋一杯の杏仁豆腐を差し出しました。

はは・・・本当ですか？

あんな不味い甘味これ以上食べれるわけないです。

ですが、食べない訳にはいきません。

私が思案していると揚羽が助け舟を出してくれました。

「麗羽殿。次は私の杏仁豆腐を正宗様に食べていただきたいです。麗羽殿ばかり狡いです。その杏仁豆腐はお義父様に食べて戴くのがよろしいのではないでしょうか。お義父様は夕餉も取らずに政務を為さっているとのこと。義娘となる麗羽様の料理を口にすれば、きっとお喜びになられると思います」

揚羽は父上をスケープゴートにするつもりようです。

父上、お許してください。

私は心の中で父上に安否を祈りました。

「そうですね。お義父様のことをすっかり忘れていましたわ。こんな遅くまで政務をされていては体に毒ですわね。私の料理で英気

を養っていただかないといけませんわね。お義母様。お義父様の処に案内してくださいませんか」

「麗羽ちゃん。それは良いわね。あの人も多分お腹を空かせていると思うわ。義娘の手料理を食べれないなんて可哀想だと思っていたのよ。あの人の事だから涙を流して喜ぶと思うわ。麗羽ちゃん。一緒にあの人の処に行きましょう」

母上は余程、昼間のことが腹に据えかねているようです。

麗羽と揚羽は美人なのですから、そう思うのは素直な気持ちだと思います。

それに父上にとって最愛の人は母上ただ一人だと思います。

私は今度は父上の援護射撃をすることを止めました。

ここで私が余計なことをして、母上の矛先が私に向くかもしれないです。

麗羽の杏仁豆腐を鍋一杯食べる勇氣は持ち合わせていません。

「はい、お義母様。正宗様。少し出かけて来ますわね」

麗羽はうきうきした表情で私を見えています。

「正宗。揚羽ちゃんの料理もしっかり味わうのよ」

母上は私が麗羽の料理を食べていた時の笑顔を私に向けて来ました。

しっかり食べるといふことですな。

母上と麗羽は意気投合して、父上の居る政庁の執務室に向かって行きました。

父上、頑張ってください。

「正宗様。どうぞお召し上がりください」

揚羽は私の手に杏仁豆腐の入った皿を渡して来ました。

麗羽の件で杏仁豆腐に抵抗感を感じていた私は恐る恐る口にしました。

「えっ！美味しい・・・」

私はつい気持ちを口に出してしまいました。

本当に美味しいです。

「正宗様。私の杏仁豆腐は不味いと思つてらしたのですか？失礼ですね・・・」。私が味見もしていない料理を人前に出すわけがありません。お陰でこの一皿しかできませんでしたけど・・・」

揚羽は剥れた表情で私から顔を背けました。

「はは・・・」。面目ない。麗羽の料理が不味い」

私が話すのを揚羽は一差し指で口元を押さえました。

「そのようなことは人の居る前で言うものではありませんよ。妻の出した料理は美味いと言って食べるのが男の甲斐性というものです」

揚羽は私に小言を言うとは悪戯っぽく微笑みました。

「麗羽殿には私から上手くお伝えしておきます。きっと、お義父様は今頃酷い目に在われているでしょうね」

「ああ、そうだね……………」

私と揚羽は揃って嘆息しました。

第35話 剛毅なる者

私達一行は故郷の山陽郡を立ち、馬上の人となっています。

父上は馬3頭を融通しれました。

これで問題無く青洲に行くことができます。

凧、沙和、真桜にそれぞれ馬を割当ました。

父上に馬を融通してくれる様に頼みに行った時、麗羽の甘味の件で恨みがましく愚痴を言われました。

結局、父上は鍋一杯の杏仁豆腐を食べる羽目になったそうです。

当分、杏仁豆腐は食えないと父上が言っていました。

当の麗羽は自分の作った杏仁豆腐が不味いことを気付いてしました。

揚羽がそれとなく伝えた様です。

それで麗羽は元気ありません。

朝起きてから麗羽とは一度も会話をしていません。

気まずい空気です。

私が悪いです。

こんなことになるなら、不味いと正直に伝えれば良かったと思います。

後の祭りです。

私は麗羽に勇気を出して声を掛ける事にしました。

「麗羽。昨日の甘味の件だけど……。ごめん。正直に不味いと・
・言えば良かったんだと今は思っている」

「……………正宗様。今は放つといてくださいませんかこと」

麗羽は元氣なく返事をしてきました。

気まずいです。

「不味いのを不味いと言うのも悪いと思ったんだ。それに初めから
上手に作れる訳ないと思う」

「でしたら、そう言っただけで済んだです」

麗羽は俯きながら元氣なく言いました。

麗羽に掛ける言葉が見つかりません。

私が麗羽に掛ける言葉を思案していると揚羽が私達の会話に入ってきました。

「麗羽殿。くよくよするのは止めましょう。過ぎたことを悔やんでも仕方ありません。料理が不味くても良いと思います。不味いなら

練習すれば良いのです」

揚羽は珍しく麗羽に優しく声を掛けました。

「揚羽さんに何がお分りに成りますの！揚羽さんは料理が上手いからそのようなことが言えますの」

「私は料理が上手い訳ではありません。何度も失敗して作りました。麗羽様との違いは味見をしていたかどうかです。麗羽様は味見を為さらなかったのではないのですか？」

「味見？料理は味見をするものですか？」

麗羽は不思議そうな顔で揚羽に味見のことを尋ねていました。

「自分が口にしていない料理を人に食べさせることは失礼です」

「私は料理人の出すものをいつも食べていましたわ。料理人も味見をしますの」

「当然です。自分が美味しいと思えない料理を自信を持って人前に出せますか？」

「・・・・・・。揚羽さんの言う通りですわね。私が味見をすれば良かったですわ。そうすれば正宗様に美味しい料理を食べていただけましたわ」

「そうだ。今度料理するときは味見すれば良いんだよ。私は麗羽の料理を食べたいと思っている」

「正宗様とお義父様にはご迷惑お掛けしましたわ」

麗羽は少しすっきりした表情で私に謝りました。

「麗羽。全然気にしなくて良いよ。父上に関しては私が素直に本当のことを麗羽に告げれば良かったと思う」

父上の件は私の所為なので、麗羽が謝ることではありません。

私が麗羽に不味いと言えば済んでいたことです。

「正宗様。麗羽殿。仲直りは出来ましたか？」

揚羽は笑顔で私達二人に言いました。

「揚羽さん。何を言いますの。正宗様と喧嘩など初めからしていませんわ」

麗羽は揚羽にそついうと胸を張っていました。

いつもの麗羽に戻ってくれた様です。

私は一先ず一安心して、旅路を進めました。

泰山郡の溪谷に差し掛かった辺りで、異変が起こりました。遠くで剣戟と人の怒号が聞こえます。

私達は何事かと馬を走らせようと思いました。

「正宗様お待ちください」

それを揚羽が制止しました。

「この先で戦闘が起こっているのは必定了。無闇に攻めるのはお止めください。一度、見晴らしの良い場所に移動しましょう」

揚羽の提案通り私達は見晴らしの良い場所に急いで移動しました。

どうやら官軍と何者かが戦闘をしているようです。

官軍と言っても装備からして大守の処の兵だと思います。

「官軍を襲っているのは賊の様ですわ。官軍は1000人位。賊は10人。あの数で官軍に立ち向かうとは愚かなものですわ」

「それは違う。賊ならそんな危険を犯さない。確かに、ここは溪谷だから道幅が狭い。小数でも一度に相手にする人数が少なくなるから、官軍の数の利は無くなる。だけど、数の利が無かうと兵数は10倍だ。彼らが一騎当千であろうと長く持たない。危険を犯してもあの官軍を襲う必要があつたというのが自然だと思う。麗羽見てごらん。官軍達の中央に檻車がある。あの中に助け出したい人でも居るんだろ」

「正宗様。それでは彼らは賊ではありませんの？」

「ああ。今の泰山郡の大守はあまり良い噂を聞かない。どうせ役人

の不正を追求した結果、逆に捕まったというところだろう。それに、襲撃している者達は賊とは明らかに動きが違う。兵士ではないが、統率は取れているのが、ここからでも良く分る」

この時代はこの手のことが多々あります。

靈帝が行った売官のお陰で官卑が蔓延っているのです。

「正宗様の推察通り近からず遠からずでしょう。彼らには悪いですが、ここは静観しましょう」

揚羽は彼らを見捨てるように言ってきました。

「何を言っていますの！揚羽さん。あなたを見損ないましたわ。正宗様の話では悪いのはあの官軍達ではありませんの。ここは助太刀するのが当然ですわ！」

麗羽は胸を張って揚羽にビシッと指を指して言いました。

「彼らに加勢した場合、この地の太守に要らぬ恨みを買うことになります。ここは静観するのが上策です。麗羽殿。気持ちも分りますですが、ここは押さえてください」

揚羽は淡々と麗羽に言い、私の方を見ました。

私にも彼らを見捨てることに同意しろということでしょう。

揚羽には悪いですが、私には彼らを見捨てることはできません。

権力者ならば見捨てたかもしれないです。

彼らは人を助け出す為に命懸けの行動を取っています。

ここで見捨てたら後悔すると思います。

しかし、彼らを助ければ、父上と袁逢殿に迷惑が掛かることになります。

無位無官の身の私が大守を糾弾する伝手と言えば、父上達を頼るしかありません。

その上、大守の軍とはいえ、官軍と事を構えれば面倒なことになります。

力の無い自分が呪わしいです。

助けたくとも自分の力では何もできない。

他人の力を頼らなければいけない自分が惨めです。

幾ら大勢の賊を打ち倒す力があっても、権力の前では腕力など意味がないです。

私は自分の力の無さを痛感しました。

それでも彼らを見捨てることはできないです。

私は目を瞑り深呼吸を一度して、目を開けました。

「彼らを助けようと思う」

私は迷い無く揚羽を見て言いました。

「えーーーーー！アニキ。止めようよ。絶対に面倒なことに成るに決まってる」

猪々子は面倒臭そうに言いました。

「正宗様。この郡の太守が不正をしているのであれば、この旅が終わってからでも遅くないと思います。短慮に成られてはいけません」

揚羽は私の前に進み出て、厳しい目で私を見据えています。

「揚羽。悪いが私には彼らを見捨てることはできない。そこを通してくれ」

「できません。正宗様の身の安全を守る為ならば、諫言程度幾らでもします！」

揚羽は退くつもりはないようです。

「この地の太守と事を構える必要があるなら、喜んで受けて立つつもりだ。この程度のことです、怯んでいて私の夢を實現できると思うか？」

私は揚羽に負けじと彼女の目を見据えました。

私と揚羽はしばしの間睨み合いをしました。

「はぁ……………。分りました。言うだけ無駄のようですね。正

宗様。彼らを助け出す前に、この件を文にしたためてください。宛先は正宗様のお義父様と麗羽殿の叔父様にです。今の正宗様ではどうにもならないです。その後は、急いでエン州を抜けます。文を届けるのは斗詩と猪々子に任せましょう。斗詩と猪々子は仮にも袁家に仕えています。仮に大守側の人間に捕まっても酷い目に遭うことはないでしょう」

揚羽は嘆息し、彼らを助け出したら父上と袁逢殿に文を出す様に言いました。

父上と袁逢殿には申し訳ないです。

「ありがとう。揚羽」

私は揚羽が彼らを救うことに納得してくれたことを感謝しました。

「お礼は彼らが無事助け出してからにしてください。正宗様。私も助成します」

揚羽は私に力強く微笑みました。

「斗詩と猪々子は父上と袁逢殿の元に使いとして行ってくれないか」

「えーーーーー。ここでアタイと斗詩だけ洛陽に帰るなんて嫌だよ」

猪々子は不満気に言いました。

「もう、文ちゃん。空気読んでよ！正宗様。使いのお役目はお任せください」

斗詩が猪々子を嗜めつつ役目を受けてくれました。

「皆。彼らを救出していくぞ！揚羽。策を考えてくれ。斗詩と猪々子は文を書くから、それが出来次第ここを立つてくれ」

「仕方ないなあ。分ったよ。アニキ。お土産を沢山買ってきてくれなきゃ駄目だからな」

猪々子は渋々言いながら、ちゃっかりお土産を要求してきました。

「もう！文ちゃん。すいません。正宗様。使いのお役目は必ずやり遂げます。ご安心ください」

「二人とも頼むぞ。猪々子。土産は期待して良いぞ」

「本当っ！やったあ。流石、アニキ。使いは任してくれよ」

猪々子は土産が買ってくると言ったら俄然やる気を出しているようでした。

「正宗様時間がありません。戯れあうのはその辺にしてください。策の方なのですが、官軍の注意は結果的に彼らが引いてくれていきます。まず、正宗様が官軍の後方を襲撃して官軍を攪乱させます。後は、前後から攻撃を受け混乱した官軍の陣の乱れを突いて、私達が檻車の人物を助け出すことに専念すれば良いと思います。救出後は直ぐに撤退します。官軍を全滅させる必要はありません。麗羽殿も必要以上に殺さないでください。後々、正宗様のお義父様と麗羽殿の叔父様に後処理をお任せすることを考えれば、死傷者は少ないことに超したことはありません」

「分りましたわ」

麗羽は胸を張り言いました。

「必ずや救出を成功させてみせます」

楽進も義侠の心に燃えている様です。

楽進の瞳から炎が出ているように見えるのは錯覚でしょう。

その他の面々は渋々な表情をしています。

沙和が一番やる気がなさそうです。

面倒臭いオーラを体中から放っています。

私は父上と袁逢殿への文を急いで書き上げると、斗詩と猪々子に文を渡しました。

私達は馬を走らせ官軍の後方を急襲し檻車の人物を助け出すことにしました。

この私の行動が新たな出会いの始まりとはこのときは露程にも思いませんでした。

第35話 剛毅なる者（後書き）

次話はオリ武将登場です。

今回のオリ武将は劉ヨウ陣営です。

袁紹陣営のオリ武将の登場はまだ後です。

泰山郡と話の流れでもうお分かりの人もいると思います。

第36話 救出 前編（前書き）

更新遅れてすいませんでした。

第36話 救出 前編

私は食客10人を連れ父上を助けに向かった。

父上は大守の派遣した軍に捕われて護送されたいと近所の叔父さんから聞いた。

叔父さんの話によると、父上は大守の不正を糾弾したらしい。

その結果、逆に大守の怒りを買って今の状態になった。

父上は正しいことをしただけだ。

何も後ろ指を指されるようなことなどしていない。

許せない！

必ず父上を助け出してみせる。

「お前達。私の父上を助ける為に力を貸しておくれ！」

「姉御。任してください！」

食客達10人は心強く声をあげた。

私は費西山で大守の軍を襲撃する為に待ち伏せをすることにした。

叔父さんの話では大守の軍は100人位のはずだ。

頭数では向こうの方が上だが、この辺りの溪谷は幅が狭く一度に大人数を展開することはできない。

それでも私達が不利なのは変わりがない。

無理は承知の上だ。

これしか方法がない以上腹を括るしかない。

私の我が侬でこんなことに巻き込んでしまい、食客達には本当に悪いことをした。

「すまない。こんなことに巻き込んでしまつて・・・」

今更ながら、食客達を巻き込んだことに少し後悔を覚えた。

これから大守の軍を襲撃すれば、食客達の殆どが死ぬことに成る。

生き残つたとしても大守の奴は私達をお尋ね者として触れを出すに決まっている。

そうなればこの泰山郡には居られない。

何故、何も悪いことをしていない私達がこんな理不尽な目に遭わなければならないんだ！

私は大守へのぶつけどころの無い怒りで拳を握り締めていた。

父上を助け出す為とはいえ、こいつらには惨いことをしていると思つた。

「姉御。臧戒様には今迄世話になりました。臧戒様が糞大守に殺されるのと分っていて、見過ごせる訳ないですぜ。姉御は臧戒様を助け出すことに集中してください」

「そうですぜ。こんなときでもなけりや俺達に見せ場なんてないですぜ」

「姉御らしくありやせんぜ。いつもの調子で俺達に檄を飛ばしてくだせえ」

食客達は弱気になっていた私を元気づけてくれた。

お前達ありがとう。

「姉御。大守の軍が溪谷に入りやしたぜ。もう少ししたらここに現れますぜ」

見張りをしていた食客の1人が、大守の軍が来た事を伝えた。

私は腰に下げた剣を抜き放ち、剣を天に高々と突きつけた。

「父上を助け出すぞーーーーー！」

「オオオオオオーーーーー！」

食客達も私の声に呼応するように各々の武器を天に突きつけ大声を挙げた。

私達は大守の軍を後方から襲う為に目に突かない場所に各々身を潜

め襲撃の機会を待つことにした。

大守の軍は予定通り現れ私達の前を通過していった。

私達は大守の軍の兵士達が通り過ぎるのを待った後、後方から兵士達を襲撃した。

いきなりの襲撃に兵士達は動揺していた。

私達は動揺した兵士達を次々に殺して父上の元へ急いだ。

「おのれ何者だ！泰山大守の軍としての狼藉か！」

隊長らしき男が馬上から声を上げた。

「そうだ！我が父臧戒を返して貰いにきた。貴様らのような下種の輩に父上を好きにはさせない！」

「父だと？貴様。臧戒の娘か。罪人の娘が何を言うか！その娘と男共を殺してしまえ！」

動揺していた兵士達が隊長の命令一つで冷静さを取り戻した。

面倒なことに隊長は少し後方に下がり、兵士に素早く隊列を組ませた。

隊列を組んだ兵士達は私達に襲いかかってきた。

腐っても隊長というわけだな。

「退けええーーーーー！」

私は前を塞ぐ兵士を剣で斬り捨てた。

兵士は斬れども斬れども湧いてくるような錯覚を覚えた。

幾らここが狭所でもこれでは父上の元には行くのに時間が掛かりすぎる。

「姉御。あつし達が道を開けやす。そこを通って臧戒様が捕まっている檻車に行つて下させえ！」

食客全員がそう言つと私の前に出て捨て身で兵士を殺していった。

食客達は必死に兵士をなぎ倒していた。

槍や剣を受けながらも道を作ろうと前に塞がる兵士達を薙ぎ倒していった。

「糞が次から次へと湧きやがつて！邪魔だどきやがれ！」

「グガアーーーーー！あ、姉御。後は頼みやしたぜ」

食客の数人が兵士達の槍に串刺しになりながらも最後の気力で剣を奮つて何人かを剣で斬り殺した。

串刺しになつた食客達は力なく倒れた。

「姉御！行つてくだせえ」

道を作ろうと奮闘していた食客達が兵士の数が薄い場所を目で合図してきました。

「く、済まない」

私はそれしか言えず兵士の数が少ない場所に斬り込んだ。

兵士の数が少ないとはいえその数は少ないとはいえない。

「糞っ！どけどけーーーーー！お前らは邪魔だーーーーー！」

私は怒声を上げながら兵士達を斬り殺した。

四半刻程斬り合いをしたが未だ父上の所で辿りつけない。

糞っ！

父上を助けることはできないのか？

こんなところで死ぬのか？

そのとき兵士の動きに変化が起こった。

兵士が動揺しているようだ。

どうしたんだ？

反対側で馬に跨がり、槍を振り回している男がいた。

彼は凄まじい強さで兵士達を薙ぎ倒している。

「我が名は劉ヨウだ。山陽郡の麒麟児とは私のことだ！罪無き者を害す者はこの劉ヨウが許さん！死にたくなければ武器を捨てよ！」

彼はこの場所に居る者全てに轟くような大声で劉ヨウと名乗った。

劉ヨウとはあの山陽郡の麒麟児のこと？

劉ヨウ様は3000人の賊達を1人で全滅させた武人として、このエン州中で知らぬ者はいない。

最近では冀州で一切礼を受け取らず、賊退治をされていたと聞いている。

彼が私達の味方に成ってくれれば、父上も食客達も助けられる。

私は気持ちが折れそうだったが、彼の登場により体中から力がみなぎってきた。

「お前達もう少し頑張ってくれ！山陽郡の麒麟児が私達に助成してくれる。後少しの辛抱だ！」

私は食客達のいる方に向けて言った。

この隙に私は父上の元へ急いで向かうことにした。

死んだ者達の為にも絶対に父上を助けてみせる。

死んでたまるか！

第37話 救出 後編

「劉ヨウだと。まずいぞ。大守様からは臧戒を連行途中で抵抗したことにして殺せと仰せつかつておつたのだぞ。このままでは我らの破滅だ……。奴の父親は隣の郡の大守だったはず。お前ら今直ぐ臧戒を殺せ！臧戒さえ殺せば後はどうとでもなる。えええい！何をしておる。さつさと臧戒を殺してしまわぬか！」

隊長は冷静さを失い周囲の部下達に怒り狂いながら罵声を浴びせていた。

「させるか！」

私はこちらに気付いていない隊長に背中越しに心の臆目掛けて切り掛かった。

「ギィアアアアアーーーーー！お、おのれ……。貴様……。ただでは置かさ……。！」

隊長は目を血走らせて私を恨みがしい目を一瞬向けたが血を吐いて力無く前のめりに倒れ馬から落ちた。

「貴様らの隊長は死んだぞーーーーー！」

私は大声で隊長を討ち取ったことを高らかに宣言した。

劉ヨウ様のお陰で只でさえ動揺していた兵士達は隊長の死を知って恐慌状態になり逃げ出していった。

「父上！」

私は檻車に向かって逃げ出す兵士の間をぐぐり抜けて駆け出した。

檻車のある場所につくと4人の女が父上を助け出していた。

「父上！大丈夫ですか？」

私は彼女達のことより、父上の無事を確認することが先決だと思い父上に駆け寄った。

「馬鹿者！何という愚かな事をするだ」

父上は凄い剣幕で私の頬を叩いた。

私は突然、父上に叩かれたことに困惑した。

「仮にもあやつは太守の部下だ。何と言う軽はずみな事をするのだ！」

「父上を見捨てることなどできません！悪いのは奴らではありませんか！」

「あなたはあの方の娘ですの？」

金色のクルクルした髪型をした女が私に声を掛けてきた。

「随分と派手に暴れましたわね……。お義父様と叔父様には迷惑を掛ける事になりますわ」

彼女は嘆息しながら愚痴を言った。

何なのこの女。

「全くだな……。もっと速やかに撤退するつもりだったんだが……」

男の声が聞こえる方向を見ると劉ヨウ様がこちらに近づいて来られた。

「過ぎたことをとやかく言っても仕方ない。麗羽、それにみんな。この場所から直ぐに立つぞ。私達は急いで青洲に入るぞ。君たちは徐州を通って、エン州の山陽郡に向かうんだ。私の父上にこれを渡しなさい。必ず力に成ってくれる。これは路銀の足しにしれくれ」

劉ヨウ様はそう言う父上に竹簡と布袋をお渡しになられた。

私は状況が掴めなかったので、劉ヨウ様に質問することにした。

「話しの内容が分らぬのですが教えて下さいませんか？」

「君達が逃げる手助けをしようとしているんだ。ここでのんびりしている暇はない。このことは直ぐに大守の耳に入るはずだ。その前に、私達と君達はこの郡を出る必要がある」

「劉ヨウ様。これは受け取れません。命を助けて下さっただけで十分でございます。これ以上、劉ヨウ様にご迷惑をお掛けする訳にはまいりません」

父上は劉ヨウ様に竹簡と布袋を返そうとした。

「父上。助けて下さると言っているのに何を躊躇なさるのですか？大守に捕まってやる道理などありません。裁かれるべきは大守です」

私は声高に父上に言った。

「娘さんの言う通りだ。君達は無事に泰山を出て、あなたがやろうとした事をやり遂げて欲しい。だから、これは遠慮せずに受け取って欲しい」

劉ヨウ様は真剣な表情で私と父上に言った。

「見ず知らずの私達にどうしてそこまでして下されるのですか？」

父上は劉ヨウ様に対し疑問に思ったことを聞いた。

「君達親子を助けたのは私の我が侘だ。君達を見捨てて後悔するくらいなら、先の苦勞を被ろうと行動した方がましだと思った。お陰で私は今回、沢山の人間に迷惑を掛けることになった。だから受けて貰えないか？君達もこのまま大守に殺され、命の恩人の私達が窮地に立つのは望まないだろ」

劉ヨウ様は苦笑いをしながら言った。

父上は劉ヨウ様の話を黙って聞いていた。

四角四面が取り柄の父上も劉ヨウ様の言葉には折れるしかなさそうだ。

意地を張って義侠の行動をした恩人を窮地に追いやるなど父上には

無理だと思う。

「劉ヨウ様。私は臧戒と申します。私は大守の不正を糾弾しようと思いました。結果はこの有様ですが……。劉ヨウ様のご厚情を有り難く受けさせていただきます。あなた様の為にも私は必ずや大守を糾弾してみせます。このご恩は娘共々終生忘れはいたしませぬ」

父上は涙を流し謝意を示し頭を深く下げた。

「……そんなに気にしなくても良い。私がやりたくてやったことだ」

劉ヨウ様は父上の名前を聞いて一瞬驚いた顔をしていた。

どうしたのだろ。

「榮奈！何をしている。お前もお礼を申し上げないか！」

父上が私の方を見やって怒り出した。

「父上。そんなに怒鳴られなくても聞こえています」

父上に剣呑な態度で言った。

劉ヨウ様に向き直ると背筋を伸ばし拱手した。

「劉ヨウ様。ありがとうございます。ご恩は一生忘れません。無事逃げ仰せることが叶えば、私を家臣にしてください」

劉ヨウ様に感謝の礼と共に仕官を願いでた。

厚かましいと願いと考えたが、この機会を逃してら劉ヨウ様に仕官する機会などないと思った。

目の前の人物はエン州で知らぬ者等いない義侠の人だ。

私達の為に身の危険も顧みず助けてくださった人だ。

これ以上の主人は居ない。

「何を言っておる！劉ヨウ様。申し訳ございません。」

父上は私が劉ヨウ様に仕官を申し出たことに怒った。

いきなりだし非常識な行動だと思う。

「臧戒殿構わない。仕官の話し受けよう。君の名を覚えてくれないか？」

私が無理かと劉ヨウ様を仰ぎ見ると劉ヨウ様は仕官を認めてくださった。

「ありがとうございます！私は名前を臧覇。字を宣高。真名を榮奈と申します」

「私の名前は劉ヨウ。字は正礼。真名は正宗だ。お互い無事逃げ仰せ、再開した暁には私の家臣になってくれ」

「はい！」

私は元氣良く応えた。

後日談だが劉ヨウ様のお陰で食客達の半数が生き残ることができた。

劉ヨウ様は死んだ食客達を弔って下されると、食客達も家臣に取り立てる仰って下さった。

食客達は仲間が死んだことを悲しみながらも劉ヨウ様の家臣になることを心から喜んでいた。

第38話 泰山脱出

「もう駄目なのーーーーー。正宗様あ。休みたいのーーーーー」

沙和が疲れきった声で私に休憩を催促してきました。

これで何度目だろうか・・・・・・沙和の休憩の催促を聞くのは・・・・。

私達は榮奈達と別れた後、青州へ強行軍を行っています。

泰山大守の追手を警戒してのことです。

榮奈達も無事に逃げきって欲しいと思います。

「後少し頑張ってくれ。青州に入ればゆっくりと休める宿を探すつもりだ。沙和だって大守に捕まって牢屋に入りたくはないだろ」

「牢屋は嫌なのーーーーー。はあ。頑張るの」

沙和は元気無く返事をしました。

「疲れているのはみんな一緒だ。もう少し頑張るんだ。沙和」

風が沙和を元気づけていました。

「沙和さんの言い分も最もですわ。ここ数日、馬を休める為に最低限の休憩しか取っていませんわ。こんな状況で何者かに襲撃されたら満足に反撃できませんわ」

麗羽が私に尤もなことを言いました。

今の私達は強行軍の疲れで疲労困憊です。

「そうですね……。正宗様。ここで一度少し休憩を取りましょう。国境はもうすぐそこです。これまで大守の追手もしくは付けられる気配はありません。これなら少し休憩をとっても問題ないでしょう。碌に休憩を取らない状態では冷静な判断も取れません」

揚羽は私に休憩を取るように言いました。

「追手のことは本当に大丈夫なのか？」

私は念のために揚羽に休憩を取る事に問題がないか確認しました。

「大丈夫と思います。追手が来るなら、もう遭遇していてもおかしくないです。これは推測ですが大守は榮奈の元に追手を差し向けたものと思います。正宗様を始末するより、榮奈達を始末した方が楽と考えたのでしょう。正宗様を始末するには小規模の軍では無意味だと大守も思っていると思います。自ずと大規模な軍を動かさなければいけません。そんなことをすれば時間が掛かる上に目立ち過ぎます。榮奈の話では大守は榮奈の父親を山中で亡き者にしようとしていたそうです。その大守がわざわざ正宗様に追手を差し向ける訳はないです。確証はありませんでしたが、今の状況から判断して確信できます」

揚羽は私に榮奈達の方に追手が向かった可能性が高いと言いました。それ以前にいつのまに揚羽は榮奈とそんなことを話していたのです

よう。

揚羽は榮奈達の方に追手が行くことを分っていたということです。

「それを榮奈は知っているのか？」

「はい。榮奈には伝えております」

揚羽はいつもの淡々とした態度で言いました。

「榮奈達は無事に逃げ仰せることはできるのか？」

私は榮奈達のが心配になり揚羽に聞きました。

「問題ありません。あの場所から徐州へは目の鼻の先です。榮奈は徐州に逃げることを想定して、あの場所で大守の軍を襲撃したのでしょう。大守の追手が追いつく前に彼女達は徐州に入るでしょう。

徐州に入れば大守も派手に動くことはできません。後の事は正宗様のお義父様と麗羽殿の叔父様にお任せすればよろしいでしょう。あの親子が無事逃げ仰せれば、大守は窮地に立つ事に成ります。それに正宗様が証人ともなれば信用度も高くなると思います。正宗様はご自身で思っておられる以上に民の信頼は厚いです。特にこのエン州に置いては絶大です。正宗様が無位無官の身であれ、朝廷もそのことを鑑みると思います。それに朝廷には正宗様の義姉上と麗羽の叔父様が居ることをお忘れですか？」

揚羽は自信有り氣に私に言いました。

「今回のことでは随分周りの者に迷惑を掛けてしまったな……」

私は父上、姉上、袁逢殿の顔を想い浮かべ心の中で深く詫言いました。旅が終わり再開したら今回のことを謝ろうと思いました。

「正宗様。後悔なされるなら早く偉くお成りください」

「気にすることはありませんわ。正宗様は何も間違ったことはしてませんもの」

「そうやで。気にすることないで」

「そうです。正宗様は間違っていないせん！」

「気にする事無いのーーーーー」

みんなが私を慰めてくれました。

そうだな・・・・・・・・。

早く偉くならなければ・・・・・・・・。

前回のことで、正しいことを為すにも権力が必要だと実感しました。

こんなことでよくよしては麗羽達と幸せに暮らせる世を実現するなんて無理です。

「みんなありがとう。揚羽の言う通り、青州に入る前に少し休憩を取ろう」

「はああ。良かったのーーーーー」

「ホンマか。はああ。早う湯浴みしたいわ」

「そうですわね。私の美しい髪と肌が荒れますわ」

「正宗様。私は追手がこないか念の為に見張りをします」

「呬。私も少し休んだら見張りを変わります。追手が現れた時、正宗様の武力が有効ですので、正宗様はゆっくり休憩をお取りください」

「すまない。呬。揚羽。少し休んだら交代しよう」

私達は青州に入る前に、しばしの休憩を取る事にしました。

第39話 太史慈

「オヤジ。ラーメン1杯」

アタイは賊退治で報奨金を稼いだ帰り道に行きつけの食堂に入った。

今日の成果は上々だった。

久しぶりに母さんに美味しいものでも食べさせてやれる。

「おい。エン州の泰山で軍が襲撃されたらしいぞ」

「泰山？あの碌でなし大守の処の軍が襲撃されたのか？一体誰の仕業だ」

「山陽郡の麒麟児らしいぞ」

「えええーーーーー！」

「声がでけえよ！馬鹿！」

飯が出来るのを待っていたら、山陽郡の麒麟児が大守の軍を襲撃したという話が聞こえた。

彼がそんな真似をした理由が気になった。

彼はエン州では英雄のような存在だ。

若い頃から金を受け取らずに賊退治に明け暮れていたらしい。

アタイとは正反対の奴だ。

それでも好感を持てる奴だと思う。

「おい。おっさん達。その話詳しく教えてくんない」

彼が太守の軍を襲撃した理由に興味が湧いたアタイはおっさん達の会話に割り込んだ。

「うっ！お、お前は太史慈・・・・・・・・」

「お、お前みたいな奴に、は、話すことなんてない！」

おっさん達は私に及び腰で怒鳴った。

「なんだとっ！テメエ等。誰のお陰で賊に襲撃されないで居られる
と思っただ！殺されなくなったらさっさと話しな！」

アタイはおっさん達の舐めた態度に腹を立てた。

「ひいひいひいひいひいひい。わ、分った。話す。話すから勘弁してくれ！」

「最初から素直に話せば良いんだっ！」

「すいませんでした！」

おっさん達の態度に少し傷ついた。

そこまで怖がらなくてもいいじゃないか。

私が悪人みたいだ。

「太史慈さん。山陽郡の麒麟児が太守の軍を襲撃した理由は人を助け出す為らしいです」

自分より一回りも歳の違うおっさんが敬語で話し出した。

こいつは豚みたいで禿ているから禿豚と命名しよう。

隣のおっさんは亀みたいな顔だから亀でいいや。

おっさん達に適当に名前を付けた。

「人を助け出す為？」

「はい。何でも太守の不正を糾弾した役人が居て、その役人は太守が派遣した軍に拘束されたそうです」

「それで山陽郡の麒麟児は軍を襲撃したのか？」

「襲撃したのはその役人の娘らしいんです。山陽郡の麒麟児はそれに助成したんです」

「へええ。山陽郡の麒麟児も良い奴じゃない」

「俺もその話を聞いた時は胸の空く様な思いでしたよ。流石は山陽郡の麒麟児です」

「それでその娘と山陽郡の麒麟児はどうなったんだ」

「大守の軍から役人と娘を助け出し逃げたみたいです」

「大守は血眼になって追手を差し向けてるらしいです。でも、大守の野郎は表立つては行動してないみたいです」

泰山の大守は良い噂は無いからな。

自分が気に入らない人間を濡れ衣で殺したりする酷い奴だ。

他にも叩けば幾らでも埃が出る悪徳大守だ。

そんな奴が派手に動けば自分の首を締めるに決まっている。

「それで山陽郡の麒麟児は何処に逃げたんだ」

「え！まさか山陽郡の麒麟児を捕まえるなんて言わないでしょうね。太史慈さん。そんなことしたらエン州の民に恨まれますよ」

「馬鹿野郎！そんなことする訳ないだろ。私だって泰山の大守のやり方は気に入らなかつたんだ」

舐めた連中だ。

アタイのことをなんだと思っているんだ！

「山陽郡の麒麟児はこの青州に逃げ込んだという話です」

「まじか！」

アタイは禿豚の首を締め上げた。

「く、苦じいーいーいーいー」

「あ。済まねえ」

「はあ、はあ。死ぬかと思った……」

「それで山陽郡の麒麟児がこの青州に逃げ込んだという話は本当か？」

「正確な情報じゃないですけど……。多分、逃げ込んだと思います」

「多分だあ！」

アタイは禿豚のいい加減な言い方に腹が立って怒鳴った。

「ひいひいひいひいひいひい。俺だって股聞きなんです。ゆ、許してください」

禿豚が恐怖した表情で謝ってきた。

「はあーいーいーいー。じゃあ山陽郡の麒麟児が本当に青州に居るかわからないんだな」

アタイは山陽郡の麒麟児に会えるかもと期待して損した。

「太史慈さん。そう言えばこの街に数日位前から余所者を見かけま

したよ」

「それがどうしたんだ。余所者位居るだろう。この街は街道沿いなんだから……」

アタイは禿豚を睨み付けた。

「睨まないで下さい。その連中エン州方面の街道から来たみたいなんですよ。それに身形も確りとしてました。だから、山陽郡の麒麟児のことも何か知っているかもしれないです」

身形の確りした奴ら……。

泰山の太守の配下じゃないな。

追手ならわざわざ目立つ格好はしない。

「そいつら何処に居るんだ」

「街の宿に泊まってると思います」

「どこの宿に泊まっているか聞いているんだよ！」

「すみません。知りません。多分、虱潰しに宿を訪ねていけば会えると思います」

禿豚はこの街の宿を全部訪ねれば会えるだろうと舐めたことを言い出した。

「お前！舐めてんのか！」

山陽郡の麒麟児に会う機会なんてそうそうないから駄目元でやってみる。

「ひいーいーいー。ゆ、許してください」

禿豚が頭を抱えて震えているのを無視して、エン州方面から来た余所者を探すことにした。

第40話 今後の旅の方針

「正宗様。今後どうしますの」

麗羽は今後どうするか聞いてきました。

「今居る斉郡から北海郡を通り、東萊郡の黄県に向かうつもりだ」

「そこに太史慈という人物が居るのですね」

揚羽は真剣な表情で言いました。

「これで人材集めも一応目処がつく。榮奈のことは予想外だったが嬉しい誤算だった」

私達は青州に入ると野宿をしながら、現在滞在しているこの街に着きました。

旅や先日の戦闘などで、私も含めみんな疲れが溜まっているので、この街で暫く骨休めをすることにしました。

この街に逗留して数日が立ち、みんなも鋭気を養うことが出来たと思います。

私は現在、逗留している宿の一室います。

麗羽と揚羽を含めた3人で今後の行動について話し合っています。

風達は今、街に出て旅の準備をしています。

風に金を渡しているので大丈夫と思います。

「太史慈という人物を探して仕官させた後は洛陽に帰られますの？」

「どうせエン州を通って洛陽に戻るのは面倒だろうから、幽州まで足を運んで洛陽に戻ろうと思う。太史慈の仕官が上手くいけば、私の人材探しも一息着くだろうから、今度は麗羽の人材も探そうと思う」

「私の人材ですか？」

「将来の麗羽の陣営は軍師の人数は問題ないと思う。ただ、武官の人数が少ないと思う。だから武官の人材を探して行こうと思う」

「分かりましたわ。人材探しは正宗様にお任せしますわ」

麗羽は私に人材探しは任せると微笑みました。

「本音を言えば荊州を勧める処なのですが、地理的に遠いですし今回は諦めるしかありませんね。」

揚羽の言う通り、荊州は有能な人材が多いです。

私も向かいたい処ですが、人材探しにばかり精を出しても仕方ないです。

少なくとも黄巾の乱が起こる前に、どこぞの大守、欲を言えば州牧になりたいと思っています。

その為には朝廷である程度出世しなくてはいけません。

「それと揚羽だけだと、今後、負担が大きくなると思うんだ。良い軍師候補は居ないかな」

「それでしたら姉の司馬朗と妹の司馬孚はどうでしょう。二人とも優秀です」

「初耳ですわ。揚羽さんには姉妹が居ましたのね。そう言えば私の従姉妹の美羽さんは元気にしているかしら」

麗羽は揚羽に姉妹が居ることに驚いていました。

私は史実の司馬懿の兄弟は司馬八達で有名なので知っていました。

揚羽から姉妹を紹介してくれるのは願ったりです。

「揚羽。是非2人を紹介してくれないかな」

「それは構いません。多分仕官の話しは問題ないと思います。洛陽に帰りましたら、直ぐにでも話を進めます」

「ありがとうございます。揚羽のお陰に私の陣営の軍師不足は解消しそうです」

麗羽が袁術の話を出してきて思い出したことがあります。

確か袁術は孫策に命こそ奪われ無かったですが無一文で追い出されていました。

麗羽の従兄弟ですし、フォローして上げないと可哀想だと思いまし

た。

袁術はアホですが、根は悪人ではないので導き方を誤らなければ有能とは言わずともまともな人物になると思います。

「麗羽。先程言っていた従兄妹は袁術のことかな？」

「ええ。そうですね。正宗様は美羽さんのことを何故知っていますの？」

「未来の知識で知っているだけだ。袁術は孫策に倒されて無一文なるんだ。袁術の場合、自業自得だけど……。だからと言って麗羽の従姉妹を見捨てるのも気が引ける。できれば袁術を正しい方向に導いてあげたいんだ」

その後、私は袁術の今後の未来について詳細を二人に話しました。

「何て事ですの！その孫策という野蛮人は無礼極まりないですわ！正宗様だけに空き足らず、美羽さんにまで酷い目に遭わせるなんてもう許せませんわ！」

麗羽は孫策に対し以前にも増して憤っていました。

「それにしても美羽さんも美羽さんですわね。蜂蜜欲しさに領民に重税を課すなんて従姉妹として情けないですわ」

話が従姉妹の未来での所業に移ると一転して額に手を当て落ち込んでいました。

「麗羽殿。深刻に悩まずとも良いと思います。正宗様の話はあくま

で未来の話です。現時点で袁術殿が被害を被っている訳でも問題を起こしている訳でもありません。そうならない様にすれば良いのです」

揚羽は麗羽に淡々との確な助言をしていました。

「私もそうだと思う。何もしなければ、私の知っている未来になると思う。この旅が終わったら袁術に会う機会を作ってくれないかな」

「正宗様と揚羽さんの言う通りですわね。正宗様。美羽さんと会う機会は必ず作りますわ。揚羽さんも美羽さんのことくれぐれもよろしく頼みますわ」

麗羽は殊勝な態度で私と揚羽に軽く頭を下げていました。

「麗羽の従姉妹なら私にとっても大事な家族だ。心配しなくても良い」

「麗羽殿。私達3人で力を会わせれば袁術殿のことは問題ないです」
私と揚羽はそれぞれ麗羽を力づけました。

「2人とも心強いですわ」

麗羽は嬉しそうな表情で応えました。

私と麗羽と揚羽は今後の方針について話が纏まると、何気ない話をしていました。

「正宗様。大変なのーーーーー！」

歓談を楽しむ時間は沙和によって破られました。

沙和は意気絶え絶えの様子で部屋の戸を乱暴に開けて入ってきました。

「沙和さん。騒がしいですね。何かありましたの？」

麗羽は沙和の態度を見て訝しい表情をしています。

沙和はこの街に逗留して以来、欲しい物を見つけると今回のように慌ただしくしていました。

私達はまた欲しい物を見つけてきたのだと思いました。

「沙和。何か欲しい物でも見つけたのか？」

私が最初に口を開きました。

「違うのーーーーー！ 凧ちゃんが大変なのーーーーー！ 危ない奴が私達に声を掛けてきたの。話をしていたらそいつがいきなり凧ちゃんに襲いかかってきて、凧ちゃんは今そいつと戦っているのーーーーー」

沙和は能天気な声で物騒な話をしました。

「風が危ない奴に襲われている？どんな奴なんだ？」

今になって泰山大守の追手が現れたのだとは思いました。

「正宗様。泰山大守の追手ではないと思います。こんな日が高いのに堂々と襲う馬鹿はいません」

「考えるよりその場所に行った方が良いと思いますわ。正宗様。早く行きましょう。沙和さん案内をお願いしますわ」

麗羽は沙和に風達の場所に案内するように言いました。

「麗羽の言う通りだ。風のことだから問題はないと思うが、早く現場に行こう」

「正宗様。分ったのーーーーー！」

沙和は気合いの入った声で言いました。

私達は沙和の案内で風達がいる場所へ急ぎました。

第41話 孔融の生存フラグを折る？（前書き）

更新が遅れすみません。

第41話 孔融の生存フラグを折る？

私達が凧と真桜のいる場所に駆けつけると、彼女達は1人の女性と対峙していました。

「正宗様、あいつなのーーーーー！」

沙和が大きな声で対峙している女性を指差しました。

彼女は両手に双剣を持ち、凧と真桜を相手に一歩も引かずに攻勢をかけていました。

凧と真桜の2人を同時に相手できる技量から、ただ者でないです。

私は体中を硬気功で強化し、3人の間に無理矢理に入り込みました。

「何するんや！危ないやろ！えつ、正宗様やんか。そこどいてんか」

真桜は邪魔されたことに怒りましたが、私だと気づくと驚きつつ厳しい表情で彼女を睨みました。

「正宗様、この女は危険です。そこを退いてください」

凧も彼女を威嚇しています。

「沙和の話ではお前の方から攻撃してきたと聞いている。私の部下が何か問題でも起こしたのか？」

私は彼女に対し威圧的に言いました。

「へえ、あんたがこいつらの主人かい？」

「そうだ。私の部下を襲った理由を知りたい」

私は不必要に面倒事を起こしたくないです。

相手の出方次第ですが、穏便に済まそうと思いました。

「別に大したことじゃない。彼女達に劉ヨウという人物を知らないかと聞いたら、無視されたから襲ったのさ」

彼女は私を探しているようです。

泰山郡からの追手でしょうか？

追手が往来で堂々と襲うとは思えないです。

泰山郡の太守に金をせびろうとしている賞金稼ぎでしょうか？

お尋ね者になっている気配はありません。

どれも当てはまりそうです。

考えるだけ無駄の様な気分になりました。

人探し為に話かけた人物に無視されたくらいで斬り掛かるとは、風の言う通り危険人物です。

あまり関わりたくない人種だと思いました。

「貴様っ！」

凧が今にも彼女に襲いかかろうとするのを私は手で静止しました。

「生憎だが私は劉ヨウという人物は知らない。他を当たってくれ。凧、真桜帰るぞ」

私は彼女に嘘をつき、この場を納めて宿に戻ろうとしました。

「あんたが劉ヨウ様じゃないのかい？」

私が背を向け凧と真桜を宥め、宿に帰ろうとすると彼女は私に話しかけてきました。

「だから、私は劉ヨウでは」

劉ヨウではないと彼女に告げようと振り向くと彼女は私の目前まで迫っていました。

彼女は私に双剣で首目掛けて斬りつけてきました。

私は寸でところで、双天戟で剣を受け止め彼女の攻撃をいなすと、彼女の脇腹を右腕で殴りつけました。

私の反撃をともに受けた彼女は吹き飛ばされました。

「何のまねだ！理由次第では覚悟して貰うぞ！」

穩便に済ませたいですが、無理のようです。

私は双天戟を構え言いました。

「正宗様、ご無事ですか？貴様っ！泰山大守の回し者だな！」

「いい加減しいや！もう許せへん！」

「あなた何ですの！正宗様を背後から斬り掛かるなんて！」

「やっぱり危険な奴なのーーーーー！」

「・・・・・・・・」

私を含め他の者も彼女の行動に頭に來たのか口々に怒りを表し、臨戦態勢です。

揚羽だけは何も言わず剣を鞘から抜きました。

「痛ちっ！思った通りだな。あんたが劉ヨウ様だ。その姉ちゃんが泰山大守がどうか言ってたのを聞いたぞ」

彼女は風の方を見やると私の方を見ました。

「くっ！正宗様、申し訳ありません」

風が苦虫を噛み潰した表情で臨戦態勢を解かずに私に謝罪してきました。

「風、気にすることはない。お前の言う通り私は劉ヨウだ。お前は何者だ」

私は隠すだけ無駄だと悟り、彼女を睨みつけました。

「そんな恐い顔しないでくれ。アタイは太史慈、字は子義っていうんだ。最近、あんたが泰山郡の悪徳大守から人を助けた話を聞いて、山陽郡の麒麟児がどんな人物か会いたくて探していたのさ」

「太史慈と言ったな。突然私に斬り掛かって来るとは非常識過ぎだぞ！お前の攻撃を私が上手く避けたから良かったが、一步間違えたら死んでいたかも知れない。お前は私が劉ヨウではなく、別人だったかどうかどうしたのだ」

私は太史慈が東萊郡にいたとばかり思っていたので、彼女がその当人であることに驚きました。

太史慈がこんな危険な人物とは思いませんでした。

彼女にも言いましたが、一般人なら間違いなく太史慈の剣で首が飛んでいました。

「その心配は無いよ。劉ヨウ様が5人の中で一番偉そうだった。劉ヨウは男で獲物は珍しい形状の槍だつて有名だ。その2人に劉ヨウ様のことを聞いたとき、一瞬だったけど私を警戒していたのさ。だから、劉ヨウ様の関係者だと思ったんだ。3人を攻撃したのも、アタイに敵わないと思えば、助けを求めに行くと考えたからさ。案の定2人を残して、1人が助けを求めに行った。それでも手加減してたんだぜ。この街の自警団は名ばかりの連中でアタイの邪魔をするわけない。必ず自分の仲間を呼ぶと踏んでいたんだ」

彼女は腕を胸で組んで自慢げに話していました。

「太史慈、それで私が来るとは限らないだろ」

「ちっ、ちっ、ち。分かっていないな。アタイは伝聞でしか劉ヨウ様のことを知らない。でも、劉ヨウ様が義侠に熱い人物だというのは想像できる。劉ヨウ様は自分の家臣が危険な状況にあれば、すぐ駆けつけるはず。泰山郡では見ず知らずの人間の為に官軍と対峙した人が助けに來ない訳ないだろ。ここに現れた人物で一番偉そうで、さっきいった特徴に合致する人物を探せばいいだろ。事実、劉ヨウ様はアタイの目の前にいるじゃない」

彼女は人差し指を揺らして言いました。

どうやら私達は彼女に踊らされていたようです。

彼女は全て計算した上での行動だったようです。

私は彼女への見方が変わりました。

この様子ではまだ東萊郡の役人でないでしょう。

孔融には悪いですが、計画通り彼女を私の家臣にスカウトします。

ここは直球で行きます。

「私に士官してくれないか？洛陽に戻ればそれなりの役職に就くから、お前を家臣にする位の余裕はある」

麗羽の話では袁逢殿がかなり良い役職を用意してくれるようなので問題ないでしょう。

「なっ！本気ですか！？」

「何言うてんのや！こいつは正宗様を襲ったんやで、信用できるかいな」

「こんな危険な奴、嫌なのーーーーー」

凧と真桜と沙和は私の言葉を信じられないと言わんばかりの表情で見えています。

麗羽と揚羽は太史慈の名前を聞いて黙っています。

「あはははははっ！無礼を働いたアタイを家臣にするのかい。劉ヨウ様の家臣は納得していないのにいいのかい？」

彼女は興味深そうに私に聞いてきました。

「私の家臣がお前に疑心を抱くのは当然のことだと思う。だが、私はお前の才覚が欲しい。お前ならこれからの結果で家臣を納得させることができるはずだ」

彼女に相対して粗忽ですが実力のある人物だと思いました。

彼女が史実の太史慈と同じかは分かりませんが、きっと心強い味方になってくれると思います。

「アタイのことを高く買ってくれるんだね。良いよ。その話乗った。アタイは賊狩りで生計を立てているんだけど、いつまでも今の稼業を続けるのは無理だと思っていたところなんだ。母さんも心配して

いたし調度良い。劉ヨウ様、お願いが一つあるんだけどいいかい？」

「内容によるが私に出来る範囲内であれば聞こう」

「あのさ……。アタイ、母さんと2人暮らしたから、母さんも士官先に連れて行きたいんだけど無理かな」

彼女は言いにくそうに私に言いました。

史実では孔融が彼女の母親の面倒を見ていた縁で恩に感じた彼女が孔融を助けたとあります。

ここは了承した方が良さと思いました。

「そんなことか。構わない。お前の好きにすると良い。そうだな……。私達はまだ旅を続ける予定だから、洛陽に先に戻ってくれるかな。途中、私の父が治める山陽郡に寄るといい。そうだ！父上とお爺々様に宛てた文も書こう。洛陽までの路銀も必要だな。給金は姉上に立て替えて貰うかな。そうなると姉上にも文が必要だな」

「劉ヨウ様、ありがとう。これで安心して士官できる。劉ヨウ様にはアタイの真名を預ける。真名は真希。これからは真名で呼んでくれ」

彼女は快活な笑顔を私に向けました。

「……ああ。私の真名は正宗だ。私のことも真名で呼んでくれて構わない」

言葉遣いが乱暴なので気づきませんでした。太史慈は凄い美少女

です。

素朴ですが美しいです。

「正宗様！」

「・・・・・・・・」

麗羽と揚羽が私を睨んでいました。

「真希、洛陽に戻ったら忙しくなるだろうから、それまで英気を養っていてくれ。路銀や渡すものがあるから、後で私達が逗留している宿に来て欲しい」

麗羽と揚羽の睨みが恐かった私は彼女との今後の話を進めることにしました。

「了解！正宗様、アタイに任せておけば万事問題ないよ」

彼女は元気良く返事をしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1946w/>

真・恋姫†無双 劉ヨウ伝

2011年10月16日21時31分発行